

平成19事業年度

業務実績報告書

独立行政法人農林水産消費安全技術センター

目 次

1.	国民の皆様へ	1
2.	基本情報	3
	(1) 法人の概要	
	(2) 本部・地域センター等の住所	
	(3) 資本金の状況	
	(4) 役員の状況	
	(5) 常勤職員の状況	
3.	簡潔に要約された財務諸表	8
4.	財務情報	11
	(1) 財務諸表の概況	
	(2) 施設等投資の状況	
	(3) 予算・決算の概況	
	(4) 経費削減及び効率化目標との関係	
5.	事業の説明	20
	(1) 財源構造	
	(2) 財務データ及び業務実績報告書と関連付けた事業説明	

別添 年度計画に定められた項目ごとの実績

1. 国民の皆様へ

(1) 農林水産消費安全技術センターについて

独立行政法人農林水産消費安全技術センター（以下「センター」という。）は、平成19年4月1日に独立行政法人農林水産消費技術センター（以下「旧センター」という。）、独立行政法人肥飼料検査所（以下「旧肥飼検」という。）及び独立行政法人農薬検査所（以下「旧農薬検」という。）（以上の3法人を以下「旧3法人」という。）が統合して発足しました。

センターは、統合した旧3法人が有する専門的知見を結集し、農場から食卓までの一連の過程（フードチェーン）を通じて、肥料、農薬、飼料等の品質・安全性や、食品の表示が適正かどうかの監視のため、科学的な手法による検査や事業者への立入検査等を行い、食の安全と消費者の信頼の確保に技術で貢献することを使命とする独立行政法人です。

(2) 平成19年度の主な業務の取組・成果について

平成19年度は牛挽肉偽装事案、賞味期限の改ざんなどの食品表示の偽装、有機JASマークの不正使用、輸入冷凍ギョーザによる薬物中毒事案等、消費者の食に対する信頼を大きく損なう事件が相次ぎました。

また、肥料においては、有機資源の再生利用が進む中で、汚泥肥料等有害成分を含むおそれの高い肥料の生産が増加し、カドミウムなどの有害成分が基準値を超えて混入した肥料の流通、飼料においては、残留農薬等の有害物質による汚染、未承認遺伝子組換え作物の混入、農薬においては無登録農薬の流通などの事案が発生しました。

このような中、センターは、

- ① 牛挽肉偽装事案では、肥飼料検査部門が特許を有するDNA分析による飼料中の肉骨粉の動物種を判別する技術を食品の肉種鑑別に利用し、食品検査部門と肥飼料検査部門が連携して農林水産省の要請による緊急調査等に迅速に対応しました。また、その後の度重なる偽装表示やJASマークの不正使用等の事案にも農林水産省と一体的に立入検査等を行うなど、農林水産省等の関係機関と連携して対応しました。
- ② 食品中の残留農薬等にポジティブリスト制度が導入された中で、前作に使用された農薬の土壌残留に伴う後作の作物中の残留農薬に係るリスク低減に資するためのデータを得るため、農薬検査部門と食品検査部門が協力して土壌残留性の高い農薬の分析に取り組みました。
- ③ 肥飼料に関する立入検査については、有害物質を含むおそれの高い肥料の流通防止、牛海綿状脳症（以下「BSE」という。）の発生の防止、飼料等の有害物質による汚染防止、未承認遺伝子組換え体の流通防止等に重点化・効率化を図りました。

- ④ 無登録農薬と疑われる資材について農林水産省と一体的に立入検査を実施し、安全性の確保を図りました。
- ⑤ 輸入冷凍ギョーザによる薬物中毒事案では、消費者の不安解消のため、消費者相談窓口を土日も開設するとともに、保健所、農林水産省、国民生活センター等の関係機関に対して迅速な情報提供を行いました。

(3) 独立行政法人の整理合理化計画への対応について

平成19年12月24日に閣議決定された独立行政法人の整理合理化計画への対応は、

- ① 独立行政法人国民生活センターとの連携については、当センターに全国消費生活情報ネットワーク・システム（P I O - N E T）の端末を設置し、情報の共有化を図るとともに、両機関が実施する研修会、講習会等や分析技術面についても連携
- ② 大阪・岡山事務所の廃止（神戸センターへの統合）、小樽事務所の廃止については、効率的な業務運営を推進するため、検査等業務に支障が生じないように考慮しつつ、整理合理化計画に定められた期間内に統廃合を実施するとともに、アウトソーシングの実施、内部統制に係る体制整備など適切に対応することとしています。

また、随意契約の見直しについては、すでに原則一般競争入札とし、随意契約にすることができる額の限度額等については国と同じ基準としています。

(4) 今後の取り組みについて

平成19年度は、牛挽肉偽装事案等に各分野の技術力やマンパワーを結集して迅速かつ的確に対応するなど、統合メリットを発揮しつつ、効率的かつ効果的に業務を推進して参りました。

近年、消費者の食に対する信頼が著しく失われている状況の中で、食の安全と消費者の信頼の確保に技術で貢献する法人として、センターの果たすべき役割を役職員一同、十分に認識し、今後とも高い使命感と倫理観を帯びて的確に業務を推進して参ります。

さらに、中期目標を達成すべく、各分野の技術力を結集して検査・分析能力の向上に不断に取り組むとともに、分析の精度管理を的確に実施しつつ、業務の重点化、効率化を図って参りますので、皆様のご理解とご支援をよろしくお願い申し上げます。

2. 基本情報

(1) 法人の概要

① 法人の目的

センターは、農林水産物、飲食料品及び油脂の品質及び表示に関する調査及び分析、日本農林規格又は農林物資の品質に関する表示の基準が定められた農林物資の検査等を行うことにより、これらの物資の品質及び表示の適正化を図るとともに、肥料、農薬、飼料及び飼料添加物並びに土壌改良資材の検査等を行うことにより、これらの資材の品質の適正化及び安全性の確保を図ることを目的としています。（独立行政法人農林水産消費安全技術センター法（平成11年法律第183号。以下「センター法」という。）第3条）

② 業務内容

ア センターは、センター法第3条の目的を達成するため以下の業務を行います。

- (ア) 農林水産物、飲食料品（酒類を除く。以下同じ。）及び油脂の品質及び表示に関する調査及び分析並びにこれらに関する情報の提供を行うこと。
- (イ) (ア)に掲げるもののほか、農林水産物、飲食料品及び油脂の消費の改善に関する技術上の情報の収集、整理及び提供を行うこと。
- (ウ) 日本農林規格又は農林物資の品質に関する表示の基準が定められた農林物資の検査を行うこと。
- (エ) 日本農林規格による農林物資の格付（格付の表示を含む。）に関する技術上の調査及び指導を行うこと。
- (オ) (ウ)に規定する農林物資の品質管理及び品質に関する表示に関する技術上の調査及び指導を行うこと。
- (カ) (エ)及び(オ)に掲げるもののほか、(ウ)に規定する農林物資の検査技術に関する調査及び研究並びに講習を行うこと。
- (キ) 肥料、農薬、飼料及び飼料添加物並びに土壌改良資材の検査を行うこと。
- (ク) 飼料及び飼料添加物の検定及び表示に関する業務を行うこと。
- (ケ) 飼料及び飼料添加物について登録検定機関が行う検定に関する技術上の調査及び指導を行うこと。
- (コ) 飼料及び飼料添加物の製造設備、製造管理の方法等に関する調査を行うこと。
- (サ) 前各号の業務に附帯する業務を行うこと。

イ センターは、前項の業務のほか、次の業務を行います。

- (ア) 農林物資の規格化及び品質表示の適正化に関する法律（昭和25年法律第175号）第19条の9第2項第6号の規定による検査並びに同法第20条の2第1項及び第2項の規定による立入検査
- (イ) 肥料取締法（昭和25年法律第127号）第30条の2第1項の規定による立入検査、質問及び収去並びに同法第33条の3第2項の規定による立入検査及び質問

- (ウ) 農薬取締法（昭和23年法律第82号）第13条の2第1項の規定による集取及び立入検査並びに同法第15条の3第2項の規定による立入検査
- (エ) 飼料の安全性の確保及び品質の改善に関する法律（昭和28年法律第35号）第57条第1項の規定による立入検査、質問及び収去
- (オ) 地力増進法（昭和59年法律第34号）第17条第1項の規定による立入検査
- (カ) 遺伝子組換え生物等の使用等の規制による生物の多様性の確保に関する法律（平成15年法律第97号）第32条第1項の規定による立入り、質問、検査及び収去

③ 沿革

（旧センター関係）

平成 3年4月 農林水産省農林規格検査所から農林水産省農林水産消費技術センターに改組

平成13年4月 独立行政法人農林水産消費技術センターとして設立

（旧肥飼検関係）

昭和38年1月 農林省肥料検査所と農林省飼料検査所が統合して農林省肥飼料検査所となる

平成13年4月 独立行政法人肥飼料検査所として設立

（旧農薬検関係）

昭和22年6月 農林省農薬検査所設置

平成13年4月 独立行政法人農薬検査所として設立

平成19年4月 上記旧3法人を統合して独立行政法人農林水産消費安全技術センターとして設立

④ 設立根拠法

独立行政法人農林水産消費安全技術センター法（平成11年法律第183号）

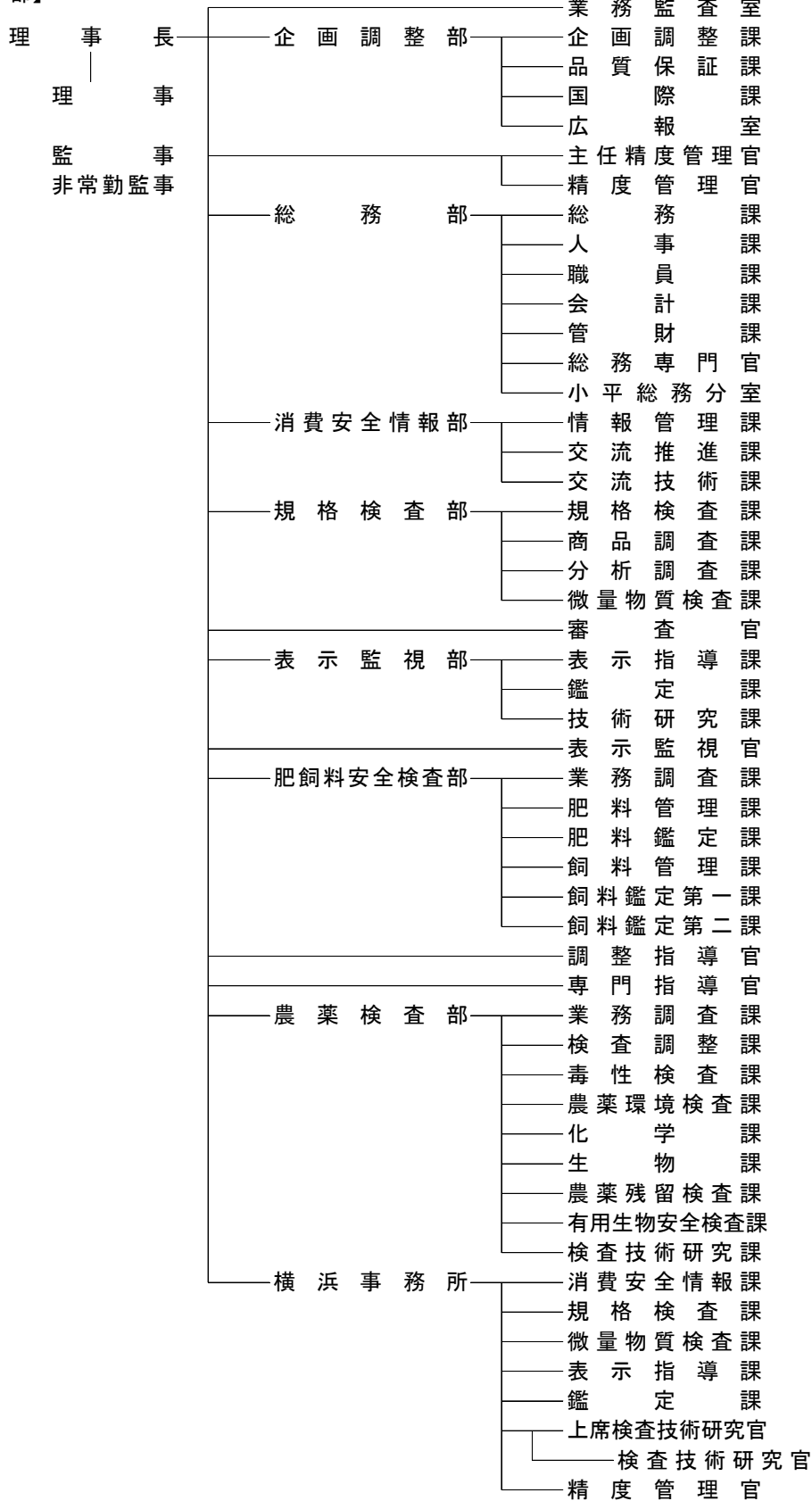
⑤ 主務大臣（主務省所管課等）

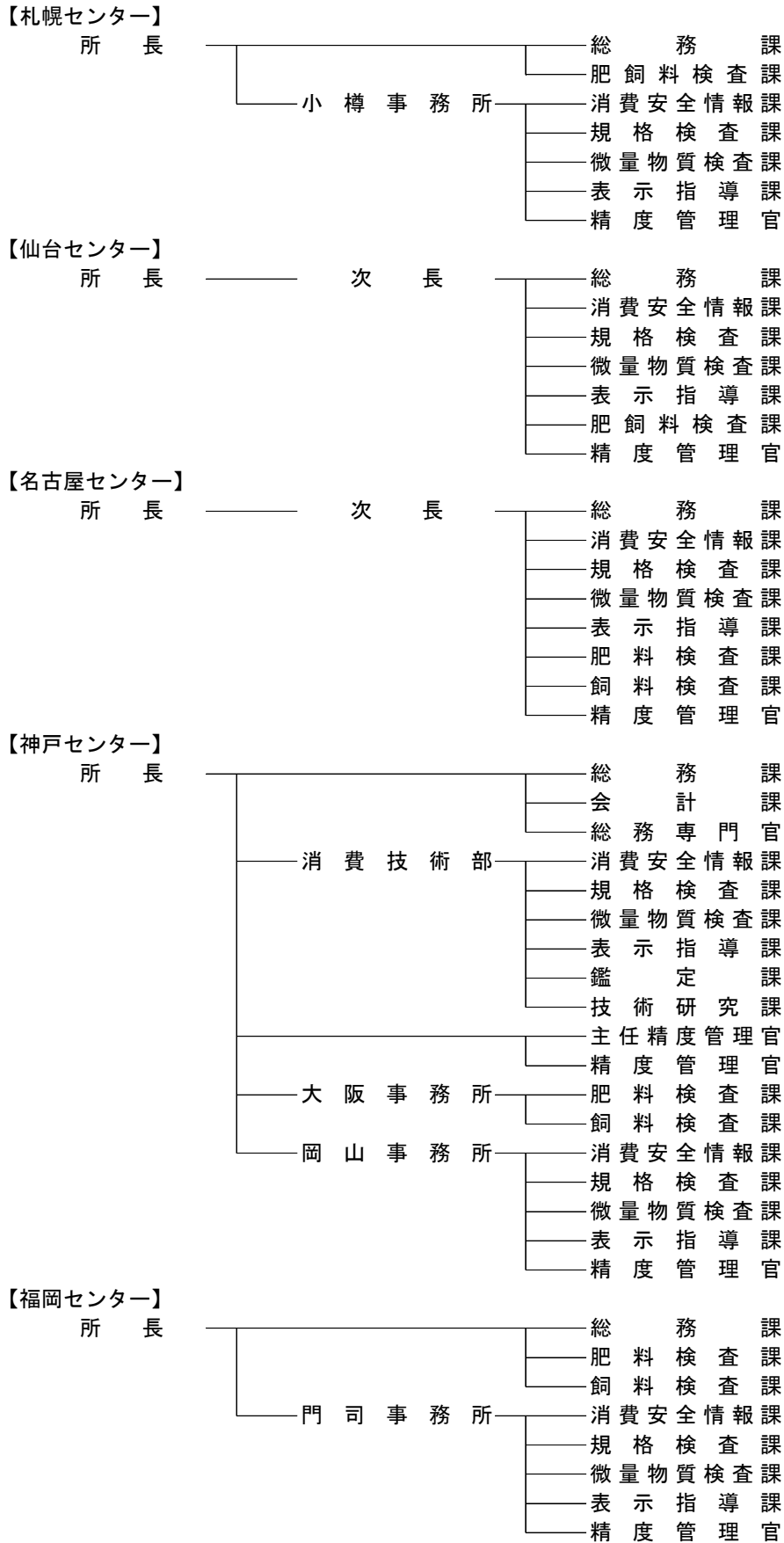
農林水産大臣（農林水産省消費・安全局総務課、表示・規格課、農産安全管理課、畜水産安全管理課）

⑥ 組織図

(平成20年3月31日現在)

【本部】





(2) 本部・地域センターの住所

本 部：さいたま市中央区新都心2-1 さいたま新都心合同庁舎検査棟
農薬検査部：小平市鈴木町2-772
横浜事務所：横浜市中区北仲通5-57 横浜第2合同庁舎
札幌センター：札幌市中央区大通西10-4-1 札幌第2合同庁舎
小樽事務所：小樽市港町5-3 小樽港湾合同庁舎
仙台センター：仙台宮城野区五輪1-3-15 仙台第3合同庁舎
名古屋センター：名古屋市中区三の丸1-2-2 名古屋農林総合庁舎2号館
神戸センター：神戸市中央区小野浜町1-4
大阪事務所：大阪府中央区大手前4-1-67 大阪合同庁舎第2号館別館
岡山事務所：岡山市下石井1-4-1 岡山第2合同庁舎
福岡センター：福岡市東区千早3-11-15
門司事務所：北九州市門司区西海岸1-3-10 門司港湾合同庁舎

(3) 資本金の状況

(単位：百万円)

区分	期首残高	当期増加額	当期減少額	期末残高
政府出資金	3,541	6,845	—	10,386
その他出資金	—	—	—	—
資本金合計	3,541	6,845	—	10,386

各計数は単位未満を四捨五入して記載しています。

(4) 役員の状況

(平成20年3月末現在)

役職	氏名	任期	担当	経歴
理事長	山口 勇	自 平成19年 4月 1日 至 平成23年 3月31日		元 独立行政法人農薬検査所
理事	戸谷 亨	自 平成19年 4月 1日 至 平成21年 3月31日	総合調整・ 食品等検査 担当	昭和50年 4月 農林省採用 平成15年10月 独立行政法人農畜産業 振興機構総括調整役 平成17年 4月 独立行政法人農林水産 消費技術センター理事長
理事	杉浦勝明	自 平成19年 4月 1日 至 平成21年 3月31日	評価・肥飼 料検査担当	昭和53年 4月 農林省採用 平成17年10月 消費・安全局畜水産安全 管理課長
理事	阪本 剛	自 平成19年 4月 1日 至 平成21年 3月31日	農薬検査 担当	昭和47年 4月 農林省採用 平成15年 7月 消費・安全局植物防疫課 課長補佐(農業航空班担当) 平成16年 4月 独立行政法人農薬検査所 検査部長
監事	本多一郎	自 平成19年 4月 1日 至 平成21年 3月31日		昭和51年 4月 農林省採用 平成18年 1月 生産局総務課予算調整官
監事 (非常勤)	碓井憲男	自 平成19年 4月 1日 至 平成21年 3月31日		現 公認会計士

<注>理事長は、平成20年3月31日付けで山口勇が退任し、平成20年4月1日付けで吉羽雅昭(元東京農業大学教授)が就任しています。

(5) 常勤職員の状況

常勤職員は平成20年1月1日時点において688人（前期末比6人減少、0.9%減）であり、平均年齢は40.9歳（前期末40.4歳）となっています。このうち、国等からの出向者は111人、他の独立行政法人（旧3法人は除く）からの出向者は2人です。

（注）常勤職員数は平成20年1月1日現在国会報告データによる。

3. 簡潔に要約された財務諸表

以下の計数は単位未満を四捨五入しており、合計が一致しない場合があります。

① 貸借対照表（平成20年3月31日現在）

（単位：百万円）

資産の部	金額	負債の部	金額
流動資産	2,116	流動負債	2,100
現金・預金等	1,874	運営費交付金債務	937
その他	242	その他	1,163
固定資産	11,846	固定負債	1,921
有形固定資産	11,839	資産見返負債	1,877
無形固定資産	7	その他	45
投資その他の資産	0	負債合計	4,021
		純資産の部	
		資本金	10,386
		政府出資金	10,386
		資本剰余金	△ 480
		利益剰余金	34
		純資産合計	9,940
資産合計	13,962	負債純資産合計	13,962

② 損益計算書（平成19年4月1日～平成20年3月31日）

（単位：百万円）

	金額
経常費用（A）	7,640
調査指導業務費	6,080
人件費	4,610
減価償却費	323
その他	1,146
一般管理費	1,559
人件費	1,227
減価償却費	27
その他	304
財務費用	1
経常収益（B）	7,640
運営費交付金収益	7,225
事業収益等自己収入	106
その他	308
臨時損益（C）	1
その他調整額（D）	18
当期総利益（B - A + C + D）	19

③ キャッシュ・フロー計算書（平成19年4月1日～平成20年3月31日）

（単位：百万円）

	金額
I 業務活動によるキャッシュ・フロー（A）	477
人件費支出	△ 5,766
運営費交付金収入	7,858
事業収益等自己収入	116
その他収入・支出	△ 1,732
II 投資活動によるキャッシュ・フロー（B）	△ 194
III 財務活動によるキャッシュ・フロー（C）	△ 27
IV 資金増加額（D=A+B+C）	256
VI 資金期首残高（E）	1,165
V 統合による資金増加（F）	453
VII 資金期末残高（D+E+F）	1,874

④ 行政サービス実施コスト計算書（平成19年4月1日～平成20年3月31日）

（単位：百万円）

	金額
I 業務費用	7,542
損益計算書上の費用	7,647
（控除）事業収入等自己収入	△ 105
（その他の行政サービス実施コスト）	
II 損益外減価償却相当額	435
III 損益外固定資産除却相当額	13
IV 引当外賞与見積額	2
V 引当外退職給付増加見積額	128
VI 機会費用	819
VII 行政サービス実施コスト	8,939

<注>国民一人あたりの行政サービス実施コスト 70.0円

行政サービス実施コスト 8,938,754,752円/127,768千人

（総務省統計局公表の人口推計月報平成19年12月1日現在確定値
（127,768千人）によっています。）

Iのうち損益計算書上の費用（臨時損失を除く。） 事業費用の国民一人あたりセグメント費用

(1) 肥料及び土壌改良資材関係経費	4.8円	（事業費用）	611,188,716円
(2) 農薬関係経費	5.6円	〃	719,540,185円
(3) 飼料及び飼料添加物関係経費	5.8円	〃	739,351,281円
(4) 食品等の調査、分析、情報提供業務関係経費	12.4円	〃	1,586,615,742円
(5) 農林物資の検査、指導業務関係経費	16.5円	〃	2,108,957,646円
(6) 農林物資の調査分析、講習業務関係経費	2.5円	〃	314,018,278円
(7) 一般管理費（共通経費）	12.2円	〃	1,560,030,114円

■ 財務諸表の科目

① 貸借対照表

- 現金・預金等 : 現金、預金、郵便貯金
- 有形固定資産 : 土地、建物、機械及び装置、車両、工具など独立行政法人が長期にわたって使用または利用する有形の固定資産
- その他（固定資産）: 有形固定資産以外の長期資産で、特許権など具体的な形態を持たない無形固定資産が該当
- 運営費交付金債務 : 独立行政法人の業務を実施するために国から交付された運営費交付金のうち、未実施の部分に該当する債務残高
- 政府出資金 : 国からの出資金であり、独立行政法人の財産的基礎を構成
- 資本剰余金 : 国から交付された施設費などを財源として取得した資産で独立行政法人の財産的基礎を構成するもの
- 利益剰余金 : 独立行政法人の業務に関連して発生した剰余金の累計額

② 損益計算書

- 調査指導業務費 : 独立行政法人の業務に要した費用
- 人件費 : 給与、賞与、法定福利費等、独立行政法人の職員等に要する経費
- 減価償却費 : 業務に要する固定資産の取得原価をその耐用年数にわたって費用として配分する経費
- 財務費用 : 利息の支払に要する経費
- 運営費交付金収益 : 国からの運営費交付金のうち、当期の収益として認識した収益
- 事業収益等自己収入 : 手数料収入、受託収入などの収益
- 臨時損益 : 固定資産の売却損益又は、除却損が該当
- その他調整額 : 前期中期目標期間繰越積立金の取崩額が該当

③ キャッシュ・フロー計算書

- 業務活動によるキャッシュ・フロー : 独立行政法人の通常の業務の実施に係る資金の状態を表し、サービスの提供等による収入、原材料、商品又はサービスの購入による支出、人件費支出等が該当
- 投資活動によるキャッシュ・フロー : 将来に向けた運営基盤の確立のために行われる投資活動に係る資金の状態を表し、固定資産の取得・売却等による収入・支出や施設整備費補助金の交付による収入が該当
- 財務活動によるキャッシュ・フロー : リース債務の償還額が該当
- 統合による資金増加 : 統合に伴う旧肥飼検及び旧農薬検の現金及び預金が該

当

④ 行政サービス実施コスト計算書

- 業務費用 : 独立行政法人が実施する行政サービスのコストのうち、独立行政法人の損益計算書に計上される費用
- 損益外減価償却相当額 : 償却資産のうち、その減価に対応すべき収益の獲得が予定されないものとして特定された資産の減価償却費相当額（損益計算書には計上していないが、累計額は貸借対照表に記載されている）
- 損益外固定資産除売却相当額 : 償却資産のうち、その減価に対応すべき収益の獲得が予定されないものとして特定された資産の除売却相当額（損益計算書には計上していないが、累計額、除売却差額は貸借対照表に記載されている）
- 引当外賞与見積額 : 財源措置が運営費交付金により行われることが明らかな場合の賞与引当金見積額（損益計算書には計上していないが、仮に引き当てた場合に計上したであろう賞与引当金見積額を貸借対照表に注記している）
- 引当外退職給付増加見積額 : 財源措置が運営費交付金により行われることが明らかな場合の退職給付引当金増加見積額（損益計算書には計上していないが、仮に引き当てた場合に計上したであろう退職給付引当金見積額を貸借対照表に注記している）
- 機会費用 : 国又は地方公共団体の財産を無償又は減額された使用料により賃貸した場合の本来負担すべき金額などが該当

4. 財務情報

センターは廃止・統合した旧肥飼検及び旧農薬検の資産を承継したことから、平成18年度以前の財務諸表等の計数は原則として旧3法人の決算数値の合計額としています。

(1) 財務諸表の概況

① 経常費用、経常収益、当期総損益、資産、負債、キャッシュ・フローなどの主要な財務データの経年比較・分析（内容・増減理由）

（経常費用）

平成19年度の経常費用は7,640百万円と、前年度比36百万円増（0.5%増）となっています。これは、統合による役員数の減に伴う役員報酬の前年度比30百万円減（32.6%減）、効率化による一般管理費の減等を行ったものの、退職金費用が前年度比57百万円増（12.0%増）となったこと等が主な要因です。

（経常収益）

平成19年度の経常収益は7,640百万円と、前年度比167百万円減（2.1%減）となっています。これは、前年度で旧肥飼検及び旧農薬検の運営費交付金の執行残額等を国庫返納するために全額収益化（204百万円）したことにより前年度の経常収益が多くなっていることが主な要因です。

（当期総損益）

上記経常損益の状況、固定資産除売却に伴う臨時損益1百万円の計上及び自己財源で取得した固定資産の減価償却費等の財源に充てるため積立てた前中期目標期間繰越積立金の取崩18百万円の計上の結果、平成19年度の当期総利益は19百万円と、前年度比200百万円減（91.3%減）となっています。

（資産）

平成19年度末現在の資産合計は13,962百万円と、前年度末比169百万円増（1.2%増）となっています。これは、旧肥飼検及び旧農薬検の資産承継時に承継資産の再評価により土地が前年度比387百万円減（6.7%減）となったこと、建設仮勘定（建設中の神戸新庁舎の出来高）が前年度比641百万円増（996.1%増）となったこと、その他の固定資産の除却、減価償却等によりその他の固定資産が前年度比468百万円減（7.6%減）となったこと、預金及び現金、施設整備費補助金の未収金等が383百万円増（22.1%増）となったことが主な要因です。

（負債）

平成19年度末現在の負債合計は4,021百万円と、前年度末比1,090百万円増（37.2%増）となっています。これは、建設中の神戸新庁舎の出来高を計上した建設仮勘定見返施設費が前年度比641百万円増（1,061.9%増）となったこと及び人件費の執行残等による運営費交付金債務が前年度比433百万円増（85.8%増）となったことが主な要因です。

（業務活動によるキャッシュ・フロー）

平成19年度の業務活動によるキャッシュ・フローは477百万円と、前年度比313百万円増（191.4%増）となっています。これは、前年度は前中期目標期間終了に伴う旧3法人の積立金を国庫納付しましたが、平成19年度は統合・廃止に伴い旧肥飼検及び旧農薬検における運営費交付金の残額等を国庫納付したことから、国庫納付額が前年度比764百万円減（79.1%減）となったこと及び運営費交付金収入が前年度比308百万円減（3.8%減）となったことが主な要因です。

（投資活動によるキャッシュ・フロー）

平成19年度の投資活動によるキャッシュ・フローは△194百万円と、前年度比76百万円増（28.3%増）となっています。これは、神戸センター新庁舎建設中の有形固定資産（建設仮勘定）の取得に係る施設費による収入が前年度比89百万円増（16.9%増）となったことが主な要因です。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

平成19年度の財務活動によるキャッシュ・フローは、全額リース資産の支払利息分であり、27百万円の支払額は概ね前年度と同額となっています。

表 主要な財務データの経年比較

(単位：百万円)

区分	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度
経常費用	7,940	7,865	8,006	7,603	7,640
経常収益	7,928	7,862	8,947	7,806	7,640
当期総利益	△ 98	131	945	219	19
資産	14,296	14,139	13,740	13,792	13,962
負債	5,898	3,123	2,230	2,931	4,021
利益剰余金（又は繰越金）	△ 78	53	998	236	34
業務活動によるキャッシュ・フロー	298	542	511	164	477
投資活動によるキャッシュ・フロー	△ 2,205	1,925	△ 466	△ 270	△ 194
財務活動によるキャッシュ・フロー	1,748	△ 2,381	△ 33	△ 27	△ 27
資金期末残高	1,654	1,740	1,752	1,618	1,874

(注) 平成18年度以前は、旧3法人の決算額の合計値です。

(キャッシュ・フローに与える影響)

i 15年度投資活動

旧センター：施設費14年度補正予算繰越及び15年度計画増による固定資産の取得に伴う支出増

旧農薬検：高度情報管理施設の建替えに伴う支出増

ii 15年度財務活動

旧農薬検：iのための長期借入金による収入増

iii 16年度投資活動

旧農薬検：高度情報管理施設の建替えに伴う施設整備資金貸付金償還時補助金収入増

iv 16年度財務活動

旧農薬検：高度情報管理施設の建替えに伴う無利子貸付金の償還による支出増

v 19年度統合による資金増加額

旧肥飼検及び旧農薬検から新法人が承継した資金増加額は、453百万円です。

② セグメント事業損益の経年比較・分析（内容・増減理由）

セグメント事業損益の経年比較については、平成18年度までは旧3法人ごとのセグメント情報を利用していますが、平成19年度は統合に伴い配分算定方法の見直し等の調整を行った上でセグメント情報を算定していますので、両者間で整合性の取れた経年比較・分析を行うことは困難な状況です。

このため、経年比較については実施せず、平成19年度における各セグメントの事業損益についての分析のみを行いました。

(肥料及び土壌改良資材関係経費によるセグメント情報)

当該経費の事業損益は△7百万円（前年度の旧セグメントでの計上額との対比67百万円減）となっています。これは、事業費用に計上されている減価償却費のうち7百万円については、その収益相当額を事業収益ではなく前中期目標期間繰越積立金の取崩しで処理することとしたことから、損失が生じました。

(農業関係経費によるセグメント情報)

当該経費の事業損益は△2百万円（前年度の旧セグメントでの計上額との対比29百万円減）となっています。これは、棚卸資産の費用化3百万円に見合う収益相当額を事業損益ではなく前中期目標期間繰越積立金の取崩しで処理することとしたことから、損失が生じました。

(飼料及び飼料添加物関係経費によるセグメント情報)

当該経費の事業損益は2百万円（前年度の旧セグメントでの計上額との対比63百万円減）となっており、19年度は概ね当初計画どおりの事業費用で業務を実施したところです。

(食品等の調査、分析、情報提供業務関係経費によるセグメント情報)

当該経費の事業損益は0百万円（前年度の旧セグメントでの計上額との対比0百万円減）となっており、19年度は概ね当初計画どおりの事業費用で業務を実施したところです。

(農林物資の検査、指導業務関係経費によるセグメント情報)

当該経費の事業損益は1百万円（前年度の旧セグメントでの計上額との対比1百万円減）となっています。19年度は特に、相次ぐ食品の偽装表示やJ A Sマークの不正使用等への対応が生じましたが、経費の節減等を図りつつ、概ね当初計画どおりの事業費用で業務を実施したところです。

(農林物資の調査研究、講習業務関係経費によるセグメント情報)

当該経費の事業損益は4百万円（前年度の旧セグメントでの計上額との対比6百万円減）となっており、19年度は概ね当初計画どおりの事業費用で業務を実施したところです。

(一般管理費（共通経費）)

当該経費については、統合に伴い旧農薬検のセグメントから一般管理費を分離し、旧センター及び旧肥飼検の一般管理費のセグメントと合わせて配分算定方法の見直し等を行いました。その事業損益は2百万円（旧センター及び旧肥飼検の前年度のセグメントの合計額との対比36百万円減）となっており、19年度は概ね当初計画どおりの事業費用で業務を実施したところです。

表 事業損益の経年比較（セグメント情報）

（単位：百万円）

区分	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度
肥料及び土壌改良資材関係経費	0	3	103	60	△7
農薬関係経費	0	0	101	28	△2
飼料及び飼料添加物関係経費	△14	△9	117	65	2
食品等の調査、分析、情報提供業務関係経費	0	△8	203	0	0
農林物資の検査、指導業務関係経費	△1	5	224	2	1
農林物資の調査研究、講習業務関係経費	1	3	19	10	4
一般管理費（共通経費）	2	3	174	37	2
合計	△12	△4	941	203	0

（注）平成18年度以前は、旧3法人の決算額の合計値です。

（著しい変動が生じている理由）

- i 平成17年度は中期目標期間最終年度であり、残額を国庫納付するために運営費交付金債務を全額収益化したため収益の変動が生じています。
- ii 平成18年度は廃止した2法人について、iと同様に残額を国庫納付するため全額運営費交付金の収益化したため収益の変動が生じています。

③ セグメント総資産の経年比較・分析（内容・増減理由）

（肥料及び土壌改良資材関係経費）

当該経費の総資産は976百万円と、前年度比315百万円増（47.6%増）となっています。これは、統合に伴う各セグメントの配分割合の見直し等により預金に係る配分額等流動資産が前年度比153百万円増（525.3%増）及び分析機器等固定資産の増が前年度比162百万円増（25.6%増）となったことが主な要因です。

（農薬関係経費）

当該経費の総資産は2,515百万円と、前年度比3,277百万円減（56.6%減）となっています。これは、統合に伴う各セグメントの配分割合の見直し等により預金に係る配分額等流動資産が前年度比50百万円増（34.3%増）並びに統合に伴う調整により土地等を一般管理費（共通経費）のセグメントに振り替えたこと等により、固定資産が前年度比3,327百万円減（58.9%減）となったことが主な要因です。

（飼料及び飼料添加物関係経費）

当該経費の総資産は817百万円と、前年度比325百万円増（66.1%増）となっています。これは、統合に伴う各セグメントの配分割合の見直し等により預金に係る配分額等流動資産が前年度比166百万円増（417.4%増）及び分析機器等固定資産の増が前年度比159百万円増（35.2%増）となったことが主な要因です。

（食品等の調査、分析、情報提供関係経費）

当該経費の総資産は1,180百万円と、前年度比215百万円減（15.4%減）と

なっています。これは、統合に伴う各セグメントの配分割合の見直し等により預金に係る配分額等流動資産が前年度比3百万円増（0.7%増）及び分析機器等固定資産のセンター内部門間調整や廃棄処分による減に伴い、前年度比218百万円減（23.1%減）となったことが主な要因です。

（農林物資の検査、指導業務関係経費）

当該経費の総資産は1,535百万円と、前年度比238百万円増（18.4%増）となっています。これは、統合に伴う各セグメントの配分割合の見直し等により預金に係る配分額等流動資産が前年度比134百万円増（25.2%増）及びセンター内部門内調整を含む分析機器等固定資産の増が前年度比104百万円増（13.6%増）となったことが主な要因です。

（農林物資の調査研究、講習業務関係経費）

当該経費の総資産は253百万円と、前年度比83百万円増（48.8%増）となっています。これは、統合に伴う各セグメントの配分割合見直し等により預金に係る配分額等流動資産が前年度比22百万円増（45.3%増）及び分析機器等固定資産の増が前年度比61百万円増（50.1%増）となったことが主な要因です。

（一般管理費（共通経費））

当該経費の総資産は6,687百万円と、前年度比2,699百万円増（67.8%増）となっています。これは、統合に伴う各セグメントの配分割合見直し等により預金に係る配分額等流動資産が前年度比146百万円減（29.9%減）及び統合に伴いセグメント調整のため農薬検査所の土地等を農薬関係経費から振替えること等による固定資産が前年度比2,845百万円増（81.3%増）となったことが主な要因です。

表 総資産の経年比較（セグメント情報）

（単位：百万円）

区分	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度
肥料及び土壌改良資材関係経費	744	740	685	661	976
農業関係経費	6,187	6,065	5,956	5,792	2,515
飼料及び飼料添加物関係経費	658	621	517	492	817
食品等の調査、分析、情報提供業務関係経費	1,434	1,520	1,427	1,394	1,180
農林物資の検査、指導業務関係経費	1,409	1,375	1,275	1,296	1,535
農林物資の調査研究、講習業務関係経費	228	157	158	170	253
一般管理費（共通経費）	3,636	3,660	3,723	3,987	6,687
合計	14,296	14,139	13,740	13,792	13,962

（注）平成18年度以前は、旧3法人の決算額の合計値です。

（著しい変動が生じている理由）

19年度の農業関係経費の減額については、旧農業検1本のセグメントでしたので、一般管理費（共通経費）と業務セグメントに分離されていませんでしたが、統合に伴い当該セグメントを分離し、土地等を一般管理費に振り替えて整理しました。

④ 目的積立金の申請、取崩内容等

目的積立金はありません。

⑤ 行政サービス実施コスト計算書の経年比較・分析（内容・増減理由）

平成19年度の行政サービス実施コストは8,939百万円と、前年度比254百万円増（2.9%増）となっています。これは、独立行政法人会計基準の改訂による算定方法の変更及び今期末在職者退職給付見積額の増等により引当金外退職給付増加見積額が増加したことが主な要因です。

表 行政サービス実施コストの経年比較

（単位：百万円）

区分	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度
業務費用	7,910	7,751	7,891	7,493	7,542
うち損益計算書上の費用	8,028	7,873	8,013	7,610	7,647
うち自己収入	△ 118	△ 122	△ 122	△ 117	△ 105
損益外減価償却累計額	544	516	462	441	435
損益外減損損失相当額	—	—	—	5	—
損益外固定資産除却相当額	28	1	3	13	13
引当外賞与見積額	—	—	—	—	2
引当外退職給付増加見積額	△ 427	△ 57	△ 376	△ 184	128
機会費用	559	553	617	917	819
行政サービス実施コスト	8,614	8,763	8,596	8,685	8,939

（注）平成18年度以前は、旧3法人の決算額の合計値です。

(2) 施設等投資の状況（重要なもの）

① 当事業年度中に完成した主要施設等

本部小平分室農業散布棟施設改修（工事費44百万円）

仙台センター検査設備等改修（工事費67百万円）

② 当事業年度において継続中の主要施設等の新設・拡充
神戸センター新庁舎建設（平成21年2月完成予定）

③ 当事業年度中に処分した主要施設等

本部横浜事務所生糸検査施設である合同庁舎の一部を財務省に返還

(3) 予算・決算の概況

(単位：百万円)

区分	15年度		16年度		17年度		18年度		19年度		差額理由
	予算	決算	予算	決算	予算	決算	予算	決算	予算	決算	
収入											
運営費交付金	8,008	8,008	7,922	7,922	7,957	7,957	8,166	8,166	7,858	7,858	
施設整備費補助金	277	759	197	169	109	59	136	607	731	752	
施設整備資金貸付金償還時補助金	0	0	2,978	2,978	0	0	0	0	0	0	
無利子借入金	1,785	1,785	0	0	0	0	0	0	0	0	
受託収入	15	64	31	62	20	71	0	61	0	48	*A
諸収入	25	53	25	57	25	52	36	57	36	57	
検査手数料収入	5	8	5	3	5	2	8	2	8	1	
検定手数料収入	20	36	20	43	20	40	24	36	21	17	
その他の収入	0	10	0	10	0	10	4	19	7	39	
前年度よりの繰越金	366	292	413	419	336	336	0	0	0	0	
計	10,477	10,961	11,565	11,606	8,447	8,475	8,338	8,892	8,625	8,716	
支出											
業務経費	1,148	1,143	1,130	1,259	1,116	1,194	1,051	1,083	1,040	1,028	
生産段階の安全性等確保関係経費	480	461	472	579	467	540	423	479	418	412	
肥料及び土壌改良資材関係経費	112	104	110	113	109	119	91	107	90	91	
農薬関係経費	194	155	190	256	188	221	183	182	181	169	
飼料及び飼料添加物関係経費	175	201	172	211	170	199	150	190	148	152	
農林水産物の品質及び表示適正化関係経費	668	682	657	680	650	654	628	604	621	616	
食品等の調査、分析、情報提供業務関係経費	430	381	423	403	418	421	407	332	403	263	*B
農林物資の検査、指導業務関係経費	173	223	170	205	168	168	159	195	157	267	*C
農林物資の調査研究、講習業務関係経費	65	78	64	72	63	65	63	78	62	85	
施設整備費	2,075	2,566	209	169	122	81	147	617	731	752	
施設整備資金貸付金償還時補助金	0	0	2,978	2,978	0	0	0	0	0	0	
受託経費	15	63	31	62	20	71	0	61	0	49	*A
一般管理費	802	813	789	759	786	745	772	726	748	674	
人件費	6,436	6,057	6,428	5,914	6,403	6,030	6,367	5,691	6,106	5,763	
計	10,477	10,642	11,565	11,140	8,447	8,121	8,338	8,178	8,625	8,266	

(注) 平成18年度以前は、旧3法人の決算額の合計値です。

(予算額と決算額との乖離理由)

* A : 平成18年度以降、国等の委託費は企画競争の実施が原則となったことから、予算計画では予算額を計上していません。

* B、* C : 食品の偽装表示問題の対応等緊急的、重点的な措置を図るため、経費配分を予算額に比べて大幅に変更しました。具体的には、農林物資の検査、指導業務関係経費(*C)の検査計画を維持しつつ、食品等の調査、分析、情報提供業務関係経費(*B)の効率的な執行による節減等を行い、経費を(*C)に振り向けました。

(4) 経費削減及び効率化目標との関係

当法人においては、業務運営の効率化による経費の抑制として、各事業年度の人件費を除く運営費交付金で行う事業について、少なくとも対前年度比で一般管理費を3%、業務経費を1%抑制することを目標としています。(平成17年度以前は人件費を除く運営費交付金で行う事業全体で対前年度比1%抑制することを目標としていました。)

(単位：百万円、%)

区分	前中期目標期間						当中期目標期間				
	15年度		16年度		17年度		18年度		19年度		
	削減額	比率	削減額	比率	削減額	比率	削減額	比率	削減額	比率	差額理由
(平成17年度以前)											
消費技術センター	△ 13	△ 1.3	△ 19	△ 1.6	△ 28	△ 2.4					
肥飼料検査所	△ 5	△ 1.1	△ 18	△ 3.8	△ 15	△ 3.1					
農業検査所	△ 2	△ 1.0	△ 4	△ 1.5	△ 10	△ 3.2					
(平成18年度～)											
一般管理費									△ 27	△ 3.7	*ア
消費技術センター							△ 16	△ 3.0			
肥飼料検査所							△ 8	△ 4.5			
農業検査所							△ 3	△ 3.6			
業務経費									△ 60	△ 5.8	*イ
消費技術センター							△ 36	△ 5.6			
肥飼料検査所							△ 19	△ 6.7			
農業検査所							△ 39	△ 8.2			

*ア 保有自動車の削減、経費の節減、一括発注等による調達効率化等を図りました。

*イ アンケート調査等のアウトソーシング、経費の節減、一括発注による調達効率化等を図りました。

更に、平成19年度の3法人統合後においては、法人全体として、管理部門等の効率化を行い、統合メリットを発現することにより、中期目標期間の最終年度において、平成18年度予算における一般管理費比で10%相当額を抑制することを目標としています。この目標を達成するため、本年度は平成18年度予算における一般管理費比で1.5%相当額の抑制を講じているところであり、具体的には統合に伴う管理部門の効率化を図ることにより人件費を抑制しています。

(単位：百万円)

区分	平成18年度予算額		当中期目標期間	
	金額	比率	19年度	
			削減額	比率
運営費交付金	772	100%	12	1.5%
うち人件費	772	100%	12	1.5%

5. 事業の説明

(1) 財源構造

当法人の経常収益は7,640百万円で、その内訳は、運営費交付金収益7,225百万円(収益の94.6%)、検査・検定手数料収入等事業収益56百万円(0.7%)、受託事業収益48百万円(0.6%)、その他諸収入2百万円(0.0%)のほかに資産見返運営費交付金戻入302百万円(4.0%)及び資産見返物品受贈額戻入6百万円(0.1%)となっています。これを事業別に区分すると下表のとおりとなっています。

(単位：百万円)

① 生産段階の安全性等確保関係事業

ア 肥料及び土壌改良資材関係事業

財源	19年度決算額 (I)	当該事業収益に占める割合 (II/I)
運営費交付金収益	573	94.7%
事業収益 (標準試料収入等)	1	0.2%
資産見返運営費交付金戻入	29	4.9%
資産見返物品受贈額戻入	1	0.2%
合計 (II)	604	

イ 農薬関係事業

財源	19年度決算額 (I)	当該事業収益に占める割合 (II/I)
運営費交付金収益	682	95.1%
事業収益 (講習事業収入)	0	0.0%
受託調査研究収益	1	0.1%
資産見返運営費交付金戻入	34	4.7%
資産見返物品受贈額戻入	0	0.0%
合計 (II)	718	

ウ 飼料及び飼料添加物関係事業

財源	19年度決算額 (I)	当該事業収益に占める割合 (II/I)
運営費交付金収益	650	87.7%
事業収益 (検定手数料収入等)	43	5.8%
受託調査研究収益	8	1.1%
資産見返運営費交付金戻入	39	5.3%
資産見返物品受贈額戻入	1	0.2%
合計 (II)	741	

② 農林水産物の品質及び表示適正化関係事業

ア 食品等の調査、分析、情報提供業務関係事業

(ア) JAS規格等見直し関係事業

財源	19年度決算額 (I)	当該事業収益に占める割合 (II/I)
運営費交付金収益	250	90.5%
事業収益 (講習事業収入)	0	0.0%
受託調査研究収益	22	8.0%
資産見返運営費交付金戻入	4	1.5%
資産見返物品受贈額戻入	0	0.0%
合計 (II)	276	

(単位：百万円)

(イ) 情報提供関係事業

財源	19年度決算額 (I)	当該事業収益に占める割合 (II/I)
運営費交付金収益	583	99.0%
資産見返運営費交付金戻入	6	0.9%
資産見返物品受贈額戻入	0	0.0%
合計 (II)	588	

(ウ) リスク管理のための有害物質分析関係事業

財源	19年度決算額 (I)	当該事業収益に占める割合 (II/I)
運営費交付金収益	645	89.4%
資産見返運営費交付金戻入	76	10.6%
資産見返物品受贈額戻入	0	0.0%
合計 (II)	722	

イ 農林物資の検査、指導業務関係事業

(7) 表示監視関係事業

財源	19年度決算額 (I)	当該事業収益に占める割合 (II/I)
運営費交付金収益	1,227	96.4%
事業収益 (検査手数料収入)	1	0.1%
受託調査研究収益	0	0.0%
資産見返運営費交付金戻入	45	3.5%
資産見返物品受贈額戻入	0	0.0%
合計 (II)	1,273	

(イ) 登録認定機関等技術上の調査・定期的調査関係事業

財源	19年度決算額 (I)	当該事業収益に占める割合 (II/I)
運営費交付金収益	819	97.9%
事業収益 (生系残系売払収入)	0	0.1%
資産見返運営費交付金戻入	15	1.8%
資産見返物品受贈額戻入	2	0.2%
合計 (II)	837	

(単位：百万円)

ウ 農林物資の調査研究、講習業務関係事業

(7) 調査研究関係事業

財源	19年度決算額 (I)	当該事業収益に占める割合 (II/I)
運営費交付金収益	220	83.4%
受託調査研究収益	17	6.5%
資産見返運営費交付金戻入	27	10.1%
資産見返物品受贈額戻入	0	0.1%
合計 (II)	264	

(i) 講習関係事業

財源	19年度決算額 (I)	当該事業収益に占める割合 (II/I)
運営費交付金収益	43	80.0%
事業収益 (講習事業収入等)	11	19.5%
資産見返運営費交付金戻入	0	0.5%
資産見返物品受贈額戻入	0	0.0%
合計 (II)	54	

(2) 財務データ及び業務実績報告書と関連付けた事業説明

① 生産段階の安全性等確保関係事業

ア 肥料及び土壌改良資材関係事業

この事業は、肥料取締法に基づき肥料の品質等を保全し、その公正な取引と安全な施用を図るため、肥料の登録調査、立入検査等に関する業務を行うとともに、地力増進法に基づき土壌改良資材の品質に関する表示の適正化のための措置を講ずるため、土壌改良資材の立入検査等に関する業務を行う事業です。

平成19年度業務実績は、肥料登録調査1,133件、肥料立入検査691件（うち緊急立入検査11件）、土壌改良資材立入検査32件でした。この他、肥料等に関する事業者等の相談（7,026件）等に対応しました。

事業の財源は、運営費交付金（平成19年度573百万円）のほか資産見返運営費交付金戻入（平成19年度29百万円）等となっています。

事業に要する費用は、人件費、水道光熱費、庁舎等保守修繕費、通信費等の事務費501百万円、分析機器等の整備費、検査用試薬代、検査旅費等の事業費66百万円及び減価償却費44百万円となっています。

イ 農薬関係事業

この事業は、農薬取締法に基づき農薬の品質の適正化及びその安全性の確保を図るため、農薬の登録検査、立入検査、農薬G L P適合確認業務、調査研究等を行う事業です。

平成19年度業務実績は、農薬登録検査1,697件、立入検査87件、農薬G L P適合確認業務15試験施設、調査研究5課題等でした。

事業の財源は、運営費交付金（平成19年度682百万円）、独立行政法人農業環境技術研究所からの受託収入（平成19年度1百万円）のほか資産見返運営費交付金戻入（平成19年度34百万円）等となっています。

事業に要する費用は、人件費、水道光熱費、庁舎等保守修繕費、通信費等の事務費539百万円、分析機器等の整備費、検査用試薬代、検査旅費等の事業費132百万円及び減価償却費49百万円となっています。

ウ 飼料及び飼料添加物関係事業

この事業は、飼料安全法に基づき飼料の安全性を確保するとともに飼料の品質の改善を図るため、飼料及び飼料添加物に係る立入検査、特定添加物の検定、B S Eに係る製造事業場の確認検査、飼料分析基準（公定法）の作成等を行う事業です。

平成19年度業務実績は、飼料の立入検査624件、特定添加物の検定324件でした。また、飼料等に関する調査研究を7課題行いました。この他、飼料等に関する事業者等からの相談（1,550件）等に対応しました。

事業の財源は、運営費交付金（平成19年度650百万円）、検定手数料収入（平成19年度17百万円）、講習事業等収入（平成19年度26百万円）及び独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構からの受託収入（平成19年度8百万円）のほか資産見返運営費交付金戻入（平成19年度39百万円）等となっています。

事業に要する費用は、人件費、水道光熱費、庁舎等保守修繕費、通信費等の事務費563百万円、分析機器等の整備費、検査用試薬代、検査旅費等の事業費121百万円及び減価償却費55百万円となっています。

② 農林水産物の品質及び表示適正化関係事業

ア 食品等の調査、分析、情報提供業務関係事業

(7) J A S規格等見直し関係事業

この事業は、J A S規格及び品質表示基準の改正等に資するとともに、国際規格に我が国の意見を反映させるため、所要の調査等を行う事業です。

平成19年度業務実績は、25品目（53規格）のJ A S規格及び15基準の品質表示基準の見直しについての意見書を作成するとともに、9品目9項目のJ A S規格の分析方法の妥当性確認等を行いました。また、I S O / T C 3 4等の国内審議団体事務局として、委員会等の開催、国際会議への職員派遣を行いました。

事業の財源は、運営費交付金（平成19年度250百万円）、並びに農林水産省及び（社）日本即席麺食品工業協会からの受託収入（平成19年度22百万円）

等となっています。

事業に要する費用は、人件費、水道光熱費、庁舎等保守修繕費、通信費等の事務費220百万円、分析機器等の整備費、検査用試薬代、検査旅費等の事業費53百万円等となっています。

(イ) 情報提供関係事業

この事業は、食品等の品質及び表示等、食に関する各種の情報の提供を行うため、インターネット、広報誌等の多様な媒体により情報発信を行うとともに、消費者、食品事業者等からの相談（食品表示110番による情報提供含む）に対応する事業です。

平成19年度業務実績は、メールマガジンの配信49回、消費者相談及び企業相談への対応22,152件（この他、肥飼料部門において8,576件の相談に対応（前掲））等でした。

事業の財源は、運営費交付金（平成19年度583百万円）等となっています。

事業に要する費用は、人件費、水道光熱費、庁舎等保守修繕費、通信費等の事務費492百万円、情報機器の整備費、情報通信費等の事業費91百万円等となっています。

(ウ) リスク管理のための有害物質分析関係事業

この事業は、農林水産省が策定する「サーベイランス・モニタリング年次計画」に基づき、有害化学物質である残留農薬、かび毒等の分析調査を行う事業です。

平成19年度業務実績は、残留農薬の分析調査2,038検体、かび毒の分析調査210検体でした。

事業の財源は、運営費交付金（平成19年度645百万円）のほか資産見返運営費交付金戻入（平成19年度76百万円）等となっています。

事業に要する費用は、人件費、水道光熱費、庁舎等保守修繕費、通信費等の事務費536百万円、分析機器等の整備費、検査用試薬代等の事業費109百万円及び減価償却費77百万円となっています。

イ 農林物資の検査、指導業務関係事業

(7) 表示監視関係事業

この事業は、表示の適正化に資することを目的として、科学的手法を用いて市販品の分析検査を行い、当該市販品に偽装の疑いが生じた場合や食品表示110番を通じて疑義が寄せられた場合に、農林水産大臣からの指示等に基づき、立入検査等を行う事業です。

平成19年度業務実績は、市販品の分析検査を6,055件、不正表示等に関する

立入検査等114件（161事業所）等でした。

事業の財源は、運営費交付金（平成19年度1,227百万円）のほか資産見返運営費交付金戻入（平成19年度45百万円）等となっています。

事業に要する費用は、人件費、水道光熱費、庁舎等保守修繕費、通信費等事務費1,099百万円、分析機器等の整備費、検査用試薬代、検査旅費等の事業費128百万円及び減価償却費46百万円となっています。

(イ) 登録認定機関等技術上の調査・定期的調査関係事業

この事業は、JAS制度に基づく登録認定機関等の登録申請があった場合の技術上の調査及び登録後も引き続き登録基準に適合しているかを確認するための定期的調査を行う事業です。

平成19年度業務実績は、技術上の調査436件、登録認定機関等に対する定期的調査113機関、JAS不正格付に関する立入検査等27件（43事業所）等でした。

事業の財源は、運営費交付金（平成19年度819百万円）のほか資産見返運営費交付金戻入（平成19年度15百万円）等となっています。

事業に要する費用は、人件費、水道光熱費、庁舎等保守修繕費、通信費等の事務費738百万円、分析機器等の整備費、検査用試薬代等の事業費81百万円及び減価償却費17百万円となっています。

ウ 農林物資の調査研究、講習業務関係事業

(ア) 調査研究関係事業

この事業は、食品表示の真正性判別のための検査技術の開発・実用化を目的として、調査研究を行う事業です。

平成19年度業務実績は、調査研究24課題（このうち食品表示の真正性判別のための検査技術の研究22課題）でした。

事業の財源は、運営費交付金（平成19年度220百万円）及び独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構からの受託収入（平成19年度17百万円）のほか資産見返運営費交付金戻入（平成19年度27百万円）等となっています。

事業に要する費用は、人件費、水道光熱費、庁舎等保守修繕費、通信費等の事務費150百万円、分析機器等の整備費、検査用試薬代等の事業費88百万円及び減価償却費27百万円となっています。

(イ) 講習関係事業

この事業は、食品、肥料、農薬、飼料等、土壌改良資材等に関する各種の情報の提供を行うため、事業者等からの依頼により講習会に講師を派遣する事業です。

平成19年度業務実績は、講習会への役職員の派遣回数298回でした。

事業の財源は、運営費交付金（平成19年度43百万円）、講習事業等収入（平成19年度11百万円）等となっています。

事業に要する費用は、人件費、水道光熱費、庁舎等保守修繕費、通信費等の事務費44百万円及び講習会出張旅費等の事業費5百万円等となっています。

以上

年度計画に定められた項目ごとの実績

第2期中期目標項目	第2期中期計画項目	年度計画項目	事業年度実績
<p>【前文】 食品は、国民が毎日消費するものであり、安全な食品の安定的な供給を図ることは、国の最も基本的な責務である。このため、国として、生産段階から消費段階にわたるリスク管理の徹底など、科学的知見に基づく食品安全行政を推進するとともに、食品の品質及び表示の適正化を図ることが重要な課題となっている。</p> <p>このような状況の下で、食の安全と消費者の信頼の確保に資するため、これまで独立行政法人肥飼料検査所（以下「旧肥飼検」という。）及び独立行政法人農薬検査所（以下「旧農薬検」という。）が推進してきた事務及び事業を、平成19年4月1日以降、独立行政法人農林水産消費安全技術センター（以下「センター」という。）において一体的に行うこととする。</p> <p>センターが、国や都道府県との連携及びその明確な役割分担の下で、管理部門の効率化等の合理化、消費者等に対する情報提供の一元化、検査・分析能力の向上、緊急時等における検査能力の結集等の統合によるメリットを発揮しつつ、農場から食卓までの一連の過程を対象に、検査等業務の効率的かつ効果的な実施に努め、もって技術を通</p>	<p>【前文】 平成19年4月1日に、独立行政法人農林水産消費技術センター（以下「旧センター」という。）、独立行政法人肥飼料検査所（以下「旧肥飼検」という。）及び独立行政法人農薬検査所（以下「旧農薬検」という。）が統合し、これらが推進してきた事務及び事業を独立行政法人農林水産消費安全技術センター（以下「センター」という。）において実施することとなり、肥飼料や農薬等の生産資材から食品等までの検査等を一体的に行う体制が整ったところである。</p> <p>センターは、高い使命感を持って国民の期待に応えるべく、「独立行政法人農林水産消費安全技術センターが達成すべき業務運営に関する目標」（平成19年4月1日付け18消安第14883号。以下「中期目標」という。）を踏まえ、統合メリットを発揮しつつ、農場から食卓までの一連の過程（フードチェーン）を対象に、食の安全と消費者の信頼の確保に資するため、技術的側面から貢献する。</p> <p>このため、国又は都道府県との連携及びその明確な役割分担の下で、検査等業務や情報提供業務が連携しつつ、一般管理部門の合理化及び検査等業務の重点化、消費者、生産者、事業者等への情報提供業務の一元化及び提供内容の充</p>		

<p>じて食の安全と消費者の信頼の確保に貢献することを期待する。</p>	<p>織一体的な分析方法の開発や人材育成、機動的かつ柔軟な組織体制の整備等を行い、専門技術的知見を駆使して、業務を効率的かつ効果的に実施する。</p>		
<p>第1 中期目標の期間 センターの中期目標の期間は、平成18年4月1日から平成23年3月31日までの5年間とする。 なお、センターが旧肥飼検及び旧農薬検から引き継いだ業務に係る平成18年4月1日から平成19年3月31日までの実績については、当該中期目標の期間の終了時における評価の際に、センターの平成18年4月1日から平成23年3月31日までの実績と併せて取り扱うものとする。</p>			
<p>第2 業務運営の効率化に関する事項</p> <p>1 共通事項 食の安全と消費者の信頼の確保に資するため、管理部門の効率化、検査・分析能力の向上等の統合メリットを發揮しつつ、業務運営の効率化を図ることとし、以下の取組を実施する。</p>	<p>第1 業務運営の効率化に関する目標を達成するためとるべき措置</p> <p>1 共通事項</p>	<p>第1 業務運営の効率化に関する目標を達成するためとるべき措置</p> <p>1 共通事項</p>	<p>第1 業務運営の効率化に関する目標を達成するためとるべき措置</p> <p>1 共通事項</p>
<p>(1) 組織体制の強化 ① 統合メリットの発現による効率的な業務の実施体制の整備 理事長の指導の下、統合メリットを發揮させ、検査等業務を効率的かつ効果的に推進するための組織体制を整備す</p>	<p>(1) 組織体制の強化 ① 統合メリットの発現による効率的な業務の実施体制の整備 検査等業務を効率的かつ効果的に推進するため、各分野の専門家からなるプロジェクトチームを設置する等により、各検査</p>	<p>(1) 組織体制の強化 ① 統合メリットの発現による効率的な業務の実施体制の整備 検査等業務を効率的かつ効果的に推進するため及び緊急時や繁忙時において機動的で柔軟な業務運営ができるよう、以下により組織運営及び組織体制</p>	<p>(1) 組織体制の強化 ① 統合メリットの発現による効率的な業務の実施体制の整備 次のとおり組織運営及び組織体制の整備を行うことにより、検査等業務の効率的かつ効果的な推進及び緊急時や繁忙時における機動的で柔軟な業務運営に努めた。</p>

<p>る。</p>	<p>業務で得られた知見やノウハウの活用を図るとともに、緊急時や繁忙時において検査等に従事する職員を重点的に投入することができるよう、スタッフ制を拡大する等により、機動的かつ柔軟な業務運営を行う。</p>	<p>の整備を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 理事長は独立行政法人農林水産消費安全技術センター（以下「センター」という。）の現状の課題を認識し、的確な業務運営を行うとともに業務の改善を図るため、農林水産省独立行政法人評価委員会の評価結果の通知を受けた後、マネジメントレビューを実施する。 なお、実施に当たっては、センターが業務の信頼性を確保するために行う内部監査や苦情処理等の結果を踏まえるものとする。 ○ 本部の各部及び各地域センターの業務部門に、緊急時や繁忙時において検査等に従事する職員を重点的に投入することができるようスタッフ制を拡大し、業務の進捗状況等に対応して、職員の業務内容を調整する。 ○ 各検査業務で得られた専門的知見の最大限の活用等を図るため、必要に応じて各分野の専門家からなるプロジェクトチームを設置する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 平成18年度の業務実績の評価結果、平成19年度の業務の進捗状況、内部監査・苦情処理の結果等を踏まえ、マネジメントレビューを実施するとともに、その結果に基づき、センターの現状の課題である統合メリットの一層の発揮、中期目標・中期計画の確実な進捗管理及び独立行政法人整理合理化計画への対応等について、理事長から本部の部長及び各地域センター所長に対して指示を行った。 ○ 本部の各部及び各地域センターにおいて、一般管理部門及び企画部門を除くすべての部署にスタッフ制を導入した。 また、各課長の指示により、業務の進捗状況等に対応して、スタッフ職員の業務内容を調整した。 ○ 各分野の専門家からなるプロジェクトチームを次のとおり2件設置し、各部門で蓄積された専門的知見を最大限に活用した。 <ul style="list-style-type: none"> ・牛挽肉加工品緊急調査プロジェクトチーム ・前作に使用された農薬の残留分析プロジェクトチーム
<p>② 内部監査の一体的実施 業務運営（会計を含む。）を横断的に監査する内部監査体制の充実・強化を図る。</p>	<p>② 内部監査の一体的な実施 内部監査体制を充実・強化し、業務の改善及び効率化を図るため、業務運営（会計を含む。）を横断的に監査する専任の部署を設置する。</p> <p>また、担当する職員の監査能力の向上を図るため、内部監査</p>	<p>② 内部監査の一体的な実施 内部監査体制を充実・強化し、業務の改善及び効率化を図るため、次に掲げる措置を講ずる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 業務運営（会計を含む。）を横断的に監査する業務監査室を役員直属の組織とする。 ○ 監査能力の維持・向上を図るため、内部監査員研修を実施する。 	<p>② 内部監査の一体的な実施 次に掲げる措置を講ずることにより、内部監査体制を充実・強化し、業務の改善及び効率化を図った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 平成18年度に設置した業務監査室を、平成19年度から役員直属の組織とし、業務を継続的に改善し、業務の信頼性を確保する体制を強化した。 ○ 職員に対して内部監査員研修を2回（延べ332名）実施した。

	<p>員研修を毎事業年度1回以上実施する。</p> <p>さらに、外部の有識者を活用した業務運営の改善を定期的に行う。</p>	<p>○ 業務運営の改善を定期的に行うため、第2四半期終了後を目途に外部の有識者を含めた業務評価委員会(仮称)による点検・評価を行う。</p>	<p>○ 平成20年3月に外部の有識者を含めた業務評価委員会を開催し、平成18年度における業務実績の評価結果及びこれへの対応状況、平成19年度マネジメントレビューの結果、平成19年度の事業の実施状況等について点検・評価を行った。</p> <p>なお、従来、業務評価委員会は8月の農林水産省独立行政法人評価委員会における前事業年度の評価結果を踏まえて行うマネジメントレビュー後の第3四半期に実施していたが、前事業年度の評価の後追いではなく、より早く業務改善に着手できるよう独立行政法人評価委員会の評価に先立ち、当該年度の事業の実施状況について意見を伺うとともに、プロジェクト課題の評価及び次年度の課題選定に係る意見を伺うため、開催時期を第4四半期とした。</p>
<p>③ 本部及び地方組織の再編・統合</p> <p>統合メリットを最大限発揮するとともに、効率的かつ効果的な運営を確保する観点から、本部及び地方組織の役割を踏まえ、管理部門等の合理化を含む再編・統合を行う。</p> <p>具体的には、3法人の統合時において管理部門の統合等により1本部5地方組織に再編したこと(注)を踏まえ、更に中期目標期間中に、可能な限り同一地方組織を同一庁舎に移転するよう努めることとする。</p> <p>(注) 本部(独立行政法人農林水産消費技術センター(以下「旧センター」という。))本部、旧肥飼検本部、旧農薬検及び旧センター横浜センター)5地方組織(札幌センター(旧</p>	<p>③ 本部及び地方組織の再編・統合</p> <p>統合メリットを発揮させるため、3法人の統合後は旧センター神戸センターと一体的に運営することとなる旧肥飼検大阪事務所及び旧センター岡山センターの組織・業務については、旧センター神戸センターの庁舎の移転・新築(注)と併せて、神戸センターの庁舎に移管することとし、旧肥飼検大阪事務所及び旧センター岡山センターの事務所については、これらを廃止する。なお、これらの廃止に際しては、あらかじめ、利用者等に周知徹底し、業務の円滑な引継ぎ等を行うこととする。</p> <p>(注) 旧センター神戸センターの現庁舎については、老朽化と耐震上の問題から、平成20年度を目途に移転・新築する予定であ</p>	<p>③ 本部及び地方組織の再編・統合</p> <p>大阪事務所及び岡山事務所の神戸センターへの移転統合を円滑に行うため、所要の準備を進め、事務・事業の効率的かつ効果的な運営を図る。</p>	<p>③ 本部及び地方組織の再編・統合</p> <p>平成19年4月の3法人の統合に伴い、統合メリットを最大限発揮するとともに、効率的かつ効果的な運営を確保する観点から、本部及び地方組織の役割を踏まえ、管理部門の統合等により、従来の3本部12地方組織を1本部5地方組織に再編した。また、次に掲げる準備を行うことにより、大阪事務所及び岡山事務所の神戸センターへの円滑な移転統合に努めた。</p> <p>○ 平成20年度末に予定されている神戸センター新庁舎完成に向け、工程表に則した工事の進捗状況の把握に努めた。</p> <p>○ 神戸センター新庁舎完成後は、大阪事務所及び岡山事務所を移転し、一体的に運営することから、大阪事務所が入居している大阪合同庁舎第2号館別館及び岡山事務所が入居している岡山第2合同庁舎の各合同庁舎管理官庁と、退去に伴う原状回復工事内容等の打ち合わせを行った。</p> <p>○ 神戸センターへの移転統合に先立ち、平成20年3月末をもって岡山事務所の消費安全情報課及び微量物質検査課を廃止し、神戸センター消費安全情報課及び微量物質検査課にそれぞれの業務を移管した。廃止に当たっては、同事務所の管轄区域内における情報提供業務及びリスク管理に係る分析業務</p>

<p>センター小樽センター及び旧肥飼検札幌事務所)、仙台センター(旧センター仙台センター及び旧肥飼検仙台事務所)、名古屋センター(旧センター名古屋センター及び旧肥飼検名古屋事務所)、神戸センター(旧センター神戸センター、旧肥飼検大阪事務所及び旧センター岡山センター)及び福岡センター(旧センター門司センター及び旧肥飼検福岡事務所)</p>	<p>る。</p>		<p>に支障が生じないよう、各センター・事務所間の業務分担の整理・見直し等必要な措置を講じた。</p>
<p>④ 一般管理部門の合理化及び検査等業務への重点化</p> <p>③の本部及び地方組織の再編・統合と併せて一般管理部門の統合など合理化を図るとともに、業務部門への振替等により、一般管理部門の要員が全体に占める割合を、平成18年1月1日を基準として、中期目標期間中に3ポイント程度低下させる。</p> <p>また、検査検定機関として検査等業務への重点化を図るため、一般管理部門の合理化と併せて検査等業務以外の業務の重点化及び効率化を図ることにより、検査等業務に従事する要員が全体に占める割合を、平成18年1月1日を基準として、中期目標期間中に2ポイント程度向上させる。</p>	<p>④ 一般管理部門の合理化及び検査等業務への重点化</p> <p>新規採用を抑制するとともに、一般管理部門から業務部門への人事異動により一般管理部門の要員を削減し、一般管理部門の要員が全体に占める割合を、平成18年1月1日を基準として、中期目標期間中に3ポイント程度低下させる。</p> <p>なお、一般管理部門から業務部門への人事異動を円滑に行うため、一般管理部門の職員を対象に必要な研修を実施する。</p> <p>また、検査検定機関として検査等業務への重点化を図るため、一般管理部門の合理化と併せて情報提供業務など検査等業務以外の業務の重点化及び効率化を図ることにより、検査等業務に従事する要員が全体に占める割合を、平成18年1月1日を基準として、中期目標期間中に2ポイント程度向上させる。</p>	<p>④ 一般管理部門の合理化及び検査等業務への重点化</p> <p>検査検定機関として検査等業務への重点化を図るため、平成18年1月1日を基準として、一般管理部門の要員が全体に占める割合を低下させ、検査等業務に従事する要員が全体に占める割合を向上させるため、トップマネジメントにより、組織活動の責任と権限を明確化した上で適切な人員配置を行うとともに、次に掲げる取組を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 一般管理部門の職員の退職に伴う補充に対応した新規採用を抑制する。 ○ 一般管理部門から業務部門への人事異動を円滑に行うため、異動する一般管理部門の職員を対象に必要な研修を実施する。 ○ 情報提供業務などの重点化及び効率化について検討する。 	<p>④ 一般管理部門の合理化及び検査等業務への重点化</p> <p>次に掲げる取組を行うことにより、平成18年1月1日(注)を基準として、平成20年1月1日時点における一般管理部門の要員が全体に占める割合(%)を18.4%から15.4%に3.0ポイント低下させ、検査業務に従事する要員が全体に占める割合を67.2%から70.9%に3.7ポイント向上させ、検査検定機関として検査業務への重点化を図った。</p> <p>注：独立行政法人通則法第60条の規定による常勤職員数の国会報告基準日である。なお、平成18年1月1日における職員数は旧3法人の職員数を合算したものである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 一般管理部門の職員の退職に伴う補充に対応した新規採用は実施しなかった。 ○ 本部及び地方組織の再編・統合と併せて一般管理部門の統合など合理化を図り、一般管理部門から業務部門へ4名の異動を行った。これに伴い、業務部門へ異動した一般管理部門の職員4名を対象に、業務部門異動者研修を実施した。 ○ 情報提供業務などの重点化及び効率化について検討し、肥飼料、農薬等の生産資材や食品等に関する情報を消費者、生産者、事業者等へ一元的に提供できるよう、各部門の担当者を情報提供部門に配置し、情報提供の体制を整備した。

			<p>⑤ コンプライアンス体制の整備 次の取組を実施することにより、内部統制の目的の一つであるコンプライアンス体制を整備した。</p> <p>○ 法令、社会的規範を遵守し、倫理、良識に従って行動することを明記した「行動理念」を策定し役職員に周知徹底を図った。</p> <p>○ 法令、社会的規範や内部規程の遵守状況の確認のみならず、法人の業務改善活動の重要な取組として内部監査を実施し、その結果については、理事長が行うマネジメントレビューに反映した。</p> <p>○ 内部監査、マネジメントレビュー等の業務改善活動は、外部有識者を含めた業務評価委員会において点検・評価を受けた。</p>
<p>(2) 業務運営能力の向上 科学技術の進歩に対応しつつ的確な検査・分析の実施に資するよう、職員の技術水準の維持・向上を図るための研修及び資格の取得をセンター全体で計画的に推進するとともに、先進的な技術、知識等の導入に努める。</p>	<p>(2) 業務運営能力の向上 科学技術の進歩に対応しつつ的確な検査・分析の実施に資するよう、職員の技術水準の維持・向上を図るため、次に掲げる研修及び資格等の取得をセンター全体で計画的に推進する。</p> <p>① 研修 ・ 機器分析研修 ・ ISO9000審査員研修</p> <p>② 資格の取得 ・ 放射線取扱主任者 ・ X線作業主任者</p>	<p>(2) 業務運営能力の向上</p> <p>① 業務運営能力を向上させ、的確な検査・分析の実施に資するため、次に掲げる取組を行う。</p> <p>○ 職員の技術水準の向上及び資格等の取得を計画的に実施するため、別に定める職員技術研修中期計画（仮称）に基づき研修を行うとともに、研修企画委員会（仮称）を開催し、必要に応じて当該計画の見直しを行う。</p> <p>○ 職員技術研修中期計画（仮称）に基づき、ISO9000審査員研修コースを受講させ、修了試験の合格者を確保する。</p> <p>○ 放射線を利用した分析・測定機器を適切に取り扱うため、放射線取扱主任者又はX線作業主任者を配置するとともに、必要に応じて、職員にこれらの</p>	<p>(2) 業務運営能力の向上</p> <p>① 次に掲げる資格の取得又は研修等を行うことにより、職員の技術水準の向上による業務運営能力の向上を図った。</p> <p>○ 職員技術研修中期計画に基づき、研修を次のとおり行った。また、研修企画委員会の審議結果を踏まえ、職員技術研修中期計画を改正した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 専門技術研修及び技術能力向上研修 91回（延べ594名） （うち機器操作研修 15回（延べ 56名）） <p>○ 職員技術研修中期計画に基づき、ISO9000審査員研修コースを6名に受講させ、次のとおり有資格者を確保した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ISO9000審査員研修修了者 47名（新規 6名） <p>○ 有資格者の必要なセンターに、放射線取扱主任者又はX線作業主任者を配置するとともに、放射線取扱主任者養成研修を6名に受講させ、資格を取得させた。</p> <p>なお、新たにX線作業主任者の資格を取得させる必要はな</p>

	<p>また、試験研究機関等との共同研究の実施等を通じて、検査分析に関する先進的な技術、知識等の導入に努める。</p>	<p>資格を取得させる。</p> <p>○ 職員の技術力の向上を図るため、遺伝子組換え食品の検査技術、安定同位体比測定技術等の最新の分析技術に関する研修を行う。</p> <p>② 科学技術の進歩に対応し、検査分析等に係る先進的な技術、知識等の導入を図るため、必要に応じて大学及び研究機関等との共同研究及び技術交流を行う。</p>	<p>かった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・放射線取扱主任者 79名（新規 6名） ・X線作業主任者 23名（新規 0名） <p>○ 遺伝子組換え食品の検査技術、安定同位体比測定技術等、最新の分析技術に関する研修を35回（延べ233名）行った。このうち、研究機関等が実施する研修に4回（9名）受講させた。</p> <p>② 次のとおり職員を研究機関等に派遣するとともに、大学及び試験研究機関等との共同研究を18課題実施する等の技術交流を行うことにより、検査分析等に係る先進的な技術、知識等の導入を図った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食品総合研究所 2名 ・中央水産研究所 1名
<p>(3) 外部委託（アウトソーシング）による業務の効率化</p> <p>専門技術的知見の必要性が低い作業等のうち次に掲げる業務については、早期にアウトソーシングを行う。また、次に掲げる業務以外についても、アウトソーシングを行う方が効率的な業務を整理し、当該業務のアウトソーシングを推進する。</p> <p>① アンケート調査票の発送及び回答の集計作業</p> <p>② 専門技術的知見の必要性が低い試薬調製作業等</p> <p>③ JASマークの付された農林物資（以下「JAS製品」という。）の検査データ、肥飼料等の登録及び届出情報並びに立入検査結果等の入力</p> <p>④ ホームページの運営管理</p>	<p>(3) 外部委託（アウトソーシング）による業務の効率化</p> <p>専門技術的知見の必要性が低い作業等のうち次に掲げる業務については、早期にアウトソーシングを行う。また、次に掲げる業務以外についても、アウトソーシングを行う方が効率的な業務を整理するため、検討を行う。</p> <p>① JAS規格見直し業務並びに肥料及び農薬の検査等業務に係るアンケート調査票の発送及び回答の集計作業</p> <p>② 専門技術的知見の必要性が低い試薬調製作業等</p> <p>③ JASマークの付された農林物資（以下「JAS製品」という。）の検査データ並びに肥飼料等の登録、届出情報及び立入検査結果等のデータの入力</p>	<p>(3) 外部委託（アウトソーシング）による業務の効率化</p> <p>① 次に掲げる業務については、平成18年度に引き続き、アウトソーシングに係る関連規程等に基づき適切にアウトソーシングを実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ JAS規格見直し業務及び農薬の検査等業務に係るアンケート調査票の発送及び回答の集計作業 ○ 専門技術的知見の必要性が低い試薬調製作業 ○ 専門知識を要しない外国文献の翻訳 <p>② 次に掲げる業務については、情報の取扱いや検査分析業務の信頼性の確保に留意しつつ、早期にアウトソーシングを行うため、検討委員会を設置し検討を行い、可能なものについては実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 肥料の検査等業務に係るアンケート調査票の発送及び回答の集計作業 	<p>(3) 外部委託（アウトソーシング）による業務の効率化</p> <p>① 「アウトソーシング実施規程」に基づき、外部の専門業者に委託した方が業務運営の効率化に資するものとして、次に掲げる業務についてアウトソーシングを行い、業務の効率化に努めた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ JAS規格見直し業務及び農薬の検査等業務に係るアンケート調査票の発送及び回答の集計作業 ・ 試薬調製作業 ・ 専門知識を要しない外国文献の翻訳 ・ 広報誌の編集及び発送 <p>② 次に掲げる業務について、情報の取扱いや検査分析業務の信頼性の確保に留意しつつ、アウトソーシングを実施するとともに、ホームページの運営管理業務について、他機関における状況の調査を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 肥料の検査等業務に係るアンケート調査票の発送及び回答の集計作業

<p>及び農薬検索システムの運営管理</p> <p>⑤ 専門知識を要しない外国文献の翻訳</p>	<p>④ ホームページ及び農薬の検索システムの運営管理</p> <p>⑤ 専門知識を要しない外国文献の翻訳</p> <p>このため、次に掲げる規程等を整備する。</p> <p>ア 業務外部委託規程</p> <p>イ 委託（入札）仕様書</p> <p>ウ 委託先（業者）選定基準</p>	<p>○ JAS製品の検査データ並びに肥飼料等の登録、届出情報及び立入検査結果等のデータの入力</p> <p>○ ホームページ及び農薬の検索システムの運営管理</p> <p>③ ①及び②以外の業務についても、効率化を図るため、アウトソーシングの可能性を検討する。</p>	<p>③ ①及び②以外の業務についてアウトソーシングの可能性を検討した結果、職員が行っていたメールマガジン配信管理業務のアウトソーシングを行い、平成19年7月12日以降の配信作業の効率化を図った。</p> <p>なお、官民競争入札については、センターが行っている立入検査等の業務は民間の事業主体に対する行政処分の前提となるものであることから、被検者からの隔離が必要であること、さらに、厳正な検査を実施するためには事前に検査内容等の情報が漏えいしないようにする必要があることから、あらかじめ検査内容等を公表することとなる公募等による入札の対象とすることは適当でないため実施していない。</p>
<p>(4) 分析機器等に関する効率化</p> <p>センターに設置されている分析機器等については、その稼働状況等を踏まえ、その有効活用及び効率的な運用を図るとともに、その更新に当たっては、センター全体における必要性を踏まえた精査を行う。</p>	<p>(4) 分析機器等に関する効率化</p> <p>センターに設置されている分析機器等については、定期的にその稼働状況等の調査を行い、その結果を踏まえた検査計画を策定することにより、既存の分析機器等の稼働率の向上を図る。</p> <p>また、分析機器等の更新に当たっては、耐用年数の経過状況等のほか、センター全体における必要性を十分に検討する。</p>	<p>(4) 分析機器等に関する効率化</p> <p>分析機器等の稼働率の向上を図るため、その稼働状況等の調査を行い、次の事業年度の検査計画の策定に反映させる。</p> <p>また、分析機器等の新規購入及び更新に当たっては、耐用年数の経過状況等のほか、センター全体における必要性を十分に踏まえたものとする。</p>	<p>(4) 分析機器等に関する効率化</p> <p>分析機器の稼働状況等の調査を行い、その結果を踏まえて分析件数を見直す等、平成20年度の検査計画の策定に反映させ、分析機器の稼働率の向上を図った。</p> <p>また、分析機器の新規購入及び更新に当たっては、分析試験業務担当課から要求のあった機器について、稼働状況等の調査結果を踏まえてセンター全体における必要性について十分な検討を行った上で整備方針を決定した。この結果、食品等検査部門の所有する冷却遠心分離機及びマイクロウェーブ試料分解装置を肥飼料検査部門で、肥飼料検査部門の所有する吸光マイクロプレートリーダー及び蛍光X線分析装置を食品等検査部門でそれぞれ活用するなど、効率的な運用を行った。</p>
<p>(5) 業務運営の効率化による経</p>	<p>(5) 業務運営の効率化による経費</p>	<p>(5) 業務運営の効率化による経費の抑制</p>	<p>(5) 業務運営の効率化による経費の抑制</p>

<p>費の抑制</p> <p>業務運営の効率化による経費の抑制については、各事業年度の人件費を除く運営費交付金で行う事業について、少なくとも対前事業年度比で一般管理費を3%、業務経費を1%抑制する。</p> <p>さらに、3法人の統合後においては、センター全体として、管理部門等の効率化を行い、統合メリットを発現することにより、中期目標期間の最終事業年度において、平成18年度予算における一般管理費比で10%相当額の抑制を行う。</p>	<p>の抑制</p> <p>業務運営の効率化による経費の抑制については、各事業年度の人件費を除く運営費交付金で行う事業について、検査業務等の合理化と効率化を図り、少なくとも対前事業年度比で一般管理費を3%、業務経費を1%抑制する。</p> <p>さらに、センター全体として、本部及び地方組織の再編・統合に伴う一般管理部門の統合等による管理部門の合理化及び効率化、検査等業務の重点化及び業務間の連携・調整の実施による効率化を行うなど、統合メリットを発現することにより、中期目標期間の最終事業年度において、平成18年度予算における一般管理費比で10%相当額の抑制を行う。</p>	<p>上記(1)～(4)に掲げる措置により、人件費を除く運営費交付金で行う事業について、少なくとも対前事業年度比で一般管理費を3%、業務経費を1%抑制する。</p> <p>さらに、センター全体として、本部及び地方組織の再編・統合に伴う一般管理部門の統合等による管理部門の合理化及び効率化、検査等業務の重点化及び業務間の連携・調整の実施による効率化を行うなど、統合メリットを発現することにより、中期目標期間の最終事業年度において、平成18年度予算における一般管理費比で10%相当額の抑制を行うため、本事業年度は平成18年度予算における一般管理費比で1.5%相当額の抑制を行う。</p>	<p>人件費を除く運営費交付金で行う事業に要した経費について、検査等業務の合理化及び効率化を図ること等により、対平成18年度比（注）で一般管理費を3.7%、業務経費を5.8%抑制した。</p> <p>注：平成18年度における一般管理費及び業務経費は、旧3法人の一般管理費及び業務経費をそれぞれ合算したものである。</p> <p>さらに、センター全体として、本部及び地方組織の再編・統合に伴う管理部門の合理化及び効率化、検査等業務の重点化及び業務間の連携・調整の実施による効率化を行うなど、統合メリットを発現することにより、平成19年度においては人件費を抑制し、平成18年度予算における一般管理費比で1.5%抑制した。</p>
<p>(6) 人件費の削減</p> <p>簡素で効率的な政府を実現するための行政改革の推進に関する法律（平成18年法律第47号）に基づき、平成18年度以降の5年間に於いて、センター全体の人件費（退職金及び福利厚生費（法定福利費及び法定外福利費）並びに非常勤役員給与及び人事院勧告を踏まえた給与改定部分を除く。）について5%以上の削減を行うとともに、(5)の10%相当額の抑制を行うに当たり、一般管理部門の統合等による管理部門の合理化等の統合メリットを発現することにより、更なる人件費の削減を</p>	<p>(6) 人件費の削減</p> <p>簡素で効率的な政府を実現するための行政改革の推進に関する法律（平成18年法律第47号）に基づき、平成18年度以降の5年間に於いて、センター全体の人件費（退職金及び福利厚生費（法定福利費及び法定外福利費）並びに非常勤役員給与及び人事院勧告を踏まえた給与改定部分を除く。）について5%以上の削減を行うとともに、(5)の10%相当額の抑制を行うに当たり、一般管理部門の統合等による管理部門の合理化等の統合メリットを発現することにより、更なる人件費の削減を行う。</p>	<p>(6) 人件費の削減</p> <p>業務の効率化を図り、人員を削減することにより、人件費（退職金及び福利厚生費（法定福利費及び法定外福利費）並びに非常勤職員給与及び人事院勧告を踏まえた給与改定部分を除く。）について、平成17年度決算額を基準として2%以上の削減を行うとともに、(5)の1.5%相当額の抑制を行うに当たり、一般管理部門の統合等による管理部門の合理化等の統合メリットを発現することにより、更なる人件費の削減を行う。</p>	<p>(6) 人件費の削減</p> <p>業務の効率化を図り、人員を平成18年1月1日時点（注）の常勤職員722名から688名（平成20年1月1日時点）と34名削減することにより、平成17年度決算額を基準として人件費（退職金及び福利厚生費（法定福利費及び法定外福利費）並びに非常勤職員給与及び人事院勧告を踏まえた給与改定部分を除く。）を4.8%削減した。</p> <p>注：独立行政法人通則法第60条の規定による常勤職員数の国会報告基準日である。なお、平成18年1月1日における職員数は旧3法人の職員数を合算したものである。</p> <p>なお、平成19年度において、センターの給与体系は国と同一であったものの、国に比べて地域手当の異動保障を受給する者の割合が高かったことから、給与水準が国と比べて高くなった（ラスパイレス指数100.1）ところであるが、人件費抑制に向けた人員削減を行っていき、組織の見直しの際に併せて管理職数も合理化していくことで、今後解消を</p>

<p>行う。</p> <p>また、国家公務員の給与構造改革に併せ、人事院勧告を踏まえた給与体系の見直しを進める。更に、「経済財政運営と構造改革に関する基本方針2006」（平成18年7月7日閣議決定）に基づき、国家公務員の給与構造改革を踏まえ、人件費改革を平成23年度まで継続する。</p>	<p>また、国家公務員の給与構造改革に併せ、人事院勧告を踏まえて、役職員の給与について必要な見直しを進める。更に、「経済財政運営と構造改革に関する基本方針2006」（平成18年7月7日閣議決定）に基づき、国家公務員の給与構造改革を踏まえ、人件費改革を平成23年度まで継続する。</p>	<p>また、国家公務員の給与構造改革に併せ、人事院勧告を踏まえて、役職員の給与について必要な見直しを進める。更に、「経済財政運営と構造改革に関する基本方針2006」（平成18年7月7日閣議決定）に基づき、国家公務員の給与構造改革を踏まえ、人件費改革を進めるものとする。</p>	<p>図る見通しである。</p> <p>また、国家公務員の給与構造改革に併せ、人事院勧告及び「経済財政運営と構造改革に関する基本方針2006」を踏まえ、平成18年度において見直した俸給表を引き続き職員給与規程に適用するとともに、地域手当の支給割合の改定等を行い、人件費改革を進めた。</p>
<p>2 業務の重点化・効率化</p> <p>(1) 生産段階における安全性等の確保に関する業務</p> <p>① 肥料関係業務</p> <p>ア 肥料の検査等業務</p> <p>調査結果の報告については、肥料の安全性の確保の効率的かつ効果的な推進に資するため、その申請に係る調査の質を確保しつつ、業務の効率化、職員の資質の向上等を図ることにより、中期目標期間中に、農林水産大臣の指示から報告までに要する期間を、現行の目標期間（新規登録申請：30日）に対して5%削減する。</p>	<p>2 業務の重点化・効率化</p> <p>(1) 生産段階における安全性等の確保に関する業務</p> <p>① 肥料関係業務</p> <p>ア 肥料の検査等業務</p> <p>再生資源の利用促進により、汚泥等有害成分を含むおそれの高い肥料の銘柄の登録申請数が依然として高水準で推移することが見込まれる中で、肥料の安全性の確保と食の安全の効率的かつ効果的な推進に資するため、その申請に係る調査の質を確保しつつ、中期目標期間中に、当該調査結果の報告までの期間を5%削減することができるよう、次に掲げる事項を推進する。</p> <p>(7) 登録申請マニュアル及び登録Q&Aの改訂・配布並びにこれらのホームページへの掲載を行うとともに、職員の問い合わせ対応能力の向上を図ることにより、肥料の登録申請に関する問い合わせ事務の合理化を図る。</p>	<p>2 業務の重点化・効率化</p> <p>(1) 生産段階における安全性等の確保に関する業務</p> <p>① 肥料関係業務</p> <p>ア 肥料の検査等業務</p> <p>再生資源の利用促進により、汚泥等有害成分を含むおそれの高い肥料の銘柄の登録申請数が依然として高水準で推移することが見込まれる中で、肥料の安全性の確保と食の安全の効率的かつ効果的な推進に資するため、その申請に係る調査の質を確保しつつ、中期目標期間中に、当該調査結果の報告までの期間を5%削減することができるよう、次に掲げる事項を推進する。</p> <p>(7) 登録申請に関する問合せ事務の合理化を図るため、その申請マニュアル及び登録Q&Aを改訂し要請に基づき配布するとともに、ホームページに掲載した登録申請マニュアル等の活用促進に努める。</p> <p>また、併せて接遇研修等を実施し職員の問合せ対応能力の向上を図る。</p>	<p>2 業務の重点化・効率化</p> <p>(1) 生産段階における安全性等の確保に関する業務</p> <p>① 肥料関係業務</p> <p>ア 肥料の検査等業務</p> <p>登録申請1,133件に係る調査の質を確保しつつ、結果報告に要する期間を削減するため、次に掲げる事項に取組み、年間平均で27.7日と目標期間に対して7.7%削減し、肥料の安全性の確保と食の安全の効率的かつ効果的な推進を図った。</p> <p>(7) 登録申請マニュアル及び登録Q&Aを改訂し、要請に基づき配布するとともに、ホームページに肥料登録申請手続きの概要及び諸手続き等を掲載し、最新情報の活用を促進した。</p> <p>また、窓口業務に係る職員10名に対して接遇研修を実施し、問合せ対応能力の向上を図った。</p>

また、収去品の検査については、重金属等肥料中に含まれる有害成分の含有量等の分析を重点的に行うとともに、分析技術の高度化、分析技術の向上、分析機器の有効活用及び効率的な運用を図ること等により、中期目標期間中に、成分1点あたりに要する分析時間を、平成17年度を基準として5%削減する。

(イ) 肥料用原材料のデータベースを、LANを用いて本部及び地方組織で共有化することにより、登録申請時における安全性の可否の判断の迅速化を図る。

(ウ) 最新の分析・鑑定手法の導入に努め、分析・鑑定業務の効率化等を図る。

また、平成12年度から汚泥肥料の検査を始めたところであるが、安全性に係る有害成分の基準値を超える違反が多数確認されるとともに、輸入肥料についても同様な事例が認められる中で、これら成分の検査結果を迅速に判定することが求められている。このため、中期目標期間中に、成分1点あたりに要する分析時間を5%削減することができるよう、次に掲げる事項を推進する。

(7) 有害成分ごとに集中的に分析・鑑定を行うこと等により、検査の効率化を図る。

(イ) 専門技術的知見の必要性が低い作業等についてアウトソーシングを推進することにより、業務の合理化を図る。

(ウ) 最新の分析・鑑定手法の導入等分析技術の高度化に努め、分析・鑑定業務の効率化

(イ) 新たな製法による銘柄の登録申請があった場合には、LAN等を用いて本部及び地方組織で情報を共有化し、登録申請時における安全性の可否の判断の迅速化を図るとともに、肥料用原材料のデータベース化を引き続き行う。

(ウ) 分析・鑑定業務の効率化等を図るため、最新の分析・鑑定手法に関する文献・報文の収集を行う。

また、平成12年度から汚泥肥料の検査を始めたところであるが、安全性に係る有害成分の基準値を超える違反が多数確認されるとともに、輸入肥料についても同様な事例が認められる中で、これら成分の検査結果を迅速に判定することが求められている。このため、中期目標期間中に、成分1点あたりに要する分析時間を5%削減することができるよう、次に掲げる事項を推進する。

(7) 有害成分ごとに集中的に分析・鑑定を行うこと等により検査の効率化を図る。また、汚泥肥料の原料の溶出試験を本部に集中して実施する。

(イ) 専門技術的知見の必要性が低い作業等について整理・検討することにより、アウトソーシングを推進し、業務の合理化を図る。

(ウ) 分析・鑑定業務の効率化を図るため、最新の分析・鑑定手法に関する文献・報文の収集を行う。

(イ) 新規に登録申請があった1,133件について、登録申請書を電子データ(PDF)化し、インターネットVPNを用いて事務所間で情報の共有化を行った。

また、新たな製法の肥料の原料や材料のデータベース化を引き続き行い、原料47件、材料151件を集積した。

(ウ) 日本土壤肥料学会等9件に延べ16名参加し、最新の分析・鑑定手法に関する文献・報文の収集を行った。

また、平成12年度から汚泥肥料の検査を始めたところであるが、安全性に係る有害成分の基準値を超える違反が多数確認されるとともに、輸入肥料においても同様な事例が認められる中、これら成分の検査結果を迅速に判定するため、次に掲げる事項を推進することにより検査等の効率化、合理化を図り、分析時間を2.0%削減した。

(7) 収去品の検査については、有害成分ごとに集中的に分析・鑑定を行い、成分分析点数として12,044点実施した。このうち、汚泥肥料の原料の溶出試験(51試料、969点)を本部で集中して実施した。

(イ) ICP質量分析法用標準液の調製のアウトソーシングを実施した。

(ウ) 日本土壤肥料学会等9件に延べ16名が参加し、最新の分析・鑑定手法に関する文献・報文の収集を行った。

<p>さらに、調査研究等業務については、肥料中の人畜に被害を生じさせる農産物が生産されるおそれのある有害成分の評価手法の開発等安全性の確保に資する分野に重点化する。</p>	<p>を図る。</p> <p>(I) 機器分析研修等を積極的に受講させ、職員の分析技術の向上に努め、分析・鑑定業務の効率化を図る。</p> <p>さらに、調査研究等業務については、次に掲げる分野を始め、肥料の施用による人畜に有害な農産物の生産の未然防止及び国民の健康の確保に資する分野に重点化する。</p> <p>(7) 産業廃棄物や汚泥を原料とした肥料の経年施用による有害成分の土壌への蓄積量や農産物への残留量の調査等、公定規格の設定の検討に資する調査</p> <p>(4) 肥料中の有害成分の適正な評価手法の開発</p> <p>なお、農林水産省から要請のあった事項については、最重点課題として対応する。</p>	<p>(I) 機器分析研修等を積極的に受講させ、職員の分析技術の高度化に努め、分析・鑑定業務の効率化を図る。</p> <p>さらに、調査研究等業務については、次に掲げる分野を始め、肥料の施用による人畜に有害な農産物の生産の未然防止と国民の健康の確保に資する分野に重点化する。</p> <p>(7) 産業廃棄物や汚泥を原料とした肥料の経年施用による有害成分の土壌への蓄積量や農産物への残留量の調査等、公定規格の設定の検討に資する調査</p> <p>(4) 肥料中の有害成分の適正な評価手法の開発</p> <p>なお、農林水産省から要請のあった事項については、最重点課題として対応する。</p>	<p>(I) 環境省主催の機器分析研修に職員（3名）を参加させ、分析技術の高度化に努めた。</p> <p>さらに、調査研究等業務について、肥料の施用による人畜に有害な農産物の生産の未然防止と国民の健康の確保に資する分野に重点化し、次の調査研究等を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・汚泥肥料の連用によるカドミウム等の土壌への蓄積及び作物への吸収試験 ・カドミウムの土壌中における形態の変化に関する調査 ・産業廃棄物中の有害物質の含有実態調査 ・汚泥肥料中の重金属の分析法の検討 <p>なお、農林水産省からの要請があった、肥料中のメラミンの定量法及び定性法の開発については、最重点課題として対応し、ホームページに掲載した。</p>
<p>イ 肥料取締法に基づく立入検査、質問及び収去等業務</p> <p>肥料取締法（昭和25年法律第127号）に基づく立入検査については、有害成分を含むおそれの高い肥料の生産業者への重点化を図ることとし、中期目標期間中に、全体の立入検査事業所数に占める割合を、平成17年度を基準として、30%増加させる。また、立入検査時の収去については、有害成分を含むおそれの高い肥</p>	<p>イ 肥料取締法に基づく立入検査、質問及び収去等業務</p> <p>肥料取締法（昭和25年法律第127号）に基づく立入検査については、有害成分を含むおそれの高い肥料の生産業者への重点化を図ることとし、全体の立入検査事業所数に占める割合を、平成17年度を基準として、中期目標期間中に30%増加させる。また、立入検査時の収去については、有害成分を含むおそれの高い肥料について重点的に行う</p>	<p>イ 肥料取締法に基づく立入検査、質問及び収去等業務</p> <p>肥料取締法（昭和25年法律第127号）に基づく立入検査については、有害成分を含むおそれの高い肥料の生産業者への重点化を図ることとし、全体の立入検査事業所数に占める割合を、平成17年度を基準として、中期目標期間中に30%増加させる。また、立入検査時の収去については、有害成分を含むおそれの高い肥料について重点的に行うこととし、全体の収去点数に占める割合を、平成17年度を基準として、</p>	<p>イ 肥料取締法に基づく立入検査、質問及び収去等業務</p> <p>肥料取締法に基づく立入検査については、各月毎の集中検査や集中分析により、効果的かつ効率的な検査の実施に努めた。また、立入検査及び立入検査時の収去について、次に掲げる事項を推進し、有害成分を含むおそれの高い肥料の生産業者への重点化を図ることにより、汚泥肥料等の生産事業場への立入検査及び収去点数の占める割合を平成17年度に対してそれぞれ27.3%及び61.5%増加させ、安全性確保の充実を図った。</p> <p>表1 有害成分を含むおそれの高い肥料の全体の立入検査事業所及び収去点数に占める割合</p>

料を重点的に行うこととし、中期目標期間中に、全体の収去点数に占める割合を、平成17年度を基準として、50%増加させる。

こととし、全体の収去点数に占める割合を、平成17年度を基準として、中期目標期間中に50%増加させる。以上の目標を達成するため、次に掲げる事項を推進する。

(7) 汚泥肥料等、有害成分を含有するおそれが高い肥料以外の普通肥料の生産事業場については、過去5か年の立入検査の結果に基づき、食品工業、化学工業等の副産物を原料に使用する生産事業場等に対して立入検査の重点化を図ることにより、立入検査件数と収去点数を中期目標期間中にいずれも30%以上削減するとともに、

(4) 汚泥肥料等、有害成分を含有するおそれが高い肥料の生産事業場に対する立入検査件数と収去点数を、中期目標期間中に、それぞれ30%、50%以上増加させることとする。

立入検査の結果の報告については、中期目標期間中に、農林水産大臣の指示から報告までに要する期間を、現行の目標期間（40業務日）に対して10%削減する。

また、立入検査の結果の報告については、中期目標期間中に、農林水産省の指示から報告までに要する期間を、現行の目標期間（40業務日）に対して10%削減させるため、次に掲げる事項を推進する。

(7) 有害成分ごとに集中的に分析・鑑定を行うことにより、検査の効率化を図る。

中期目標期間中に50%増加させる。以上の目標を達成するため、次に掲げる事項を推進する。

(7) 汚泥肥料等、有害成分を含有するおそれが高い肥料以外の普通肥料の生産事業場については、過去5か年の立入検査の結果に基づき、食品工業、化学工業等の副産物を原料に使用する生産事業場等に対して立入検査の重点化を図ることにより、立入検査件数と収去点数をいずれも10%以上削減するとともに、

(4) 汚泥肥料等、有害成分を含有するおそれが高い肥料の生産事業場に対する立入検査件数と収去点数をそれぞれ15%、25%以上増加する。

また、立入検査の結果の報告については、農林水産省の指示から報告までに要する期間を、現行の目標期間（40業務日）に対して10%削減させるため、次に掲げる事項を推進する。

(7) 有害成分ごとに集中的に分析・鑑定を行うことにより、検査の効率化を図る。また、汚泥肥料の原料の溶出試験を本部に集中して実施する。

	H19実績	H17実績	増減率
立入検査件数	45.7%	35.9%	27.3%
収去点数	30.2%	18.7%	61.5%

(7) 汚泥肥料等、有害成分を含有するおそれが高い肥料以外の普通肥料の生産事業場については、過去5か年の立入検査の結果に基づき、食品工業、化学工業等の副産物を原料に使用する生産事業場等に対して立入検査の重点化を図ることにより、立入検査件数と収去点数を平成17年度に対してそれぞれ15.0%、20.2%削減した。

表2 汚泥肥料等以外の普通肥料の立入検査件数及び収去点数

	H19実績	H17実績	増減率
立入検査件数	369件	434件	△15.0%
収去点数	733点	919点	△20.2%

(4) 汚泥肥料等、有害成分を含有するおそれが高い肥料の生産事業場に対する立入検査件数と収去点数を平成17年度に対してそれぞれ28.0%、49.5%増加した。

表3 汚泥肥料等の立入検査件数及び収去点数

	H19実績	H17実績	増減率
立入検査件数	311件	243件	28.0%
収去点数	317点	212点	49.5%

また、立入検査の結果の報告については、次に掲げる事項を推進することにより、検査等の効率化、合理化を図り、農林水産省の指示から報告までに要する期間を現行の目標期間（40業務日）に対して5%（2業務日）削減した。

(7) 立入検査において収去した汚泥肥料の原料の溶出試験（51試料、969点）を本部に集中して実施した。

	<p>(イ) 専門技術的知見の必要性が低い作業等についてアウトソーシングを推進することにより、業務の合理化を図る。</p> <p>(ウ) 最新の分析・鑑定手法の導入に努め、分析・鑑定業務の効率化を図る。</p> <p>(エ) LANの活用により、本部への報告等事務処理の効率化を図る。</p>	<p>(イ) 専門技術的知見の必要性が低い作業等について整理・検討することにより、アウトソーシングを推進し、業務の合理化を図る。</p> <p>(ウ) 分析・鑑定業務の効率化等を図るため、最新の分析・鑑定手法に関する文献・報文の収集を行う。</p> <p>(エ) 本部への報告等事務処理の効率化を図るためLAN等の活用を実施する。</p>	<p>(イ) ICP質量分析法用標準液の調製のアウトソーシングを実施した。</p> <p>(ウ) 日本土壤肥料学会等9件に延べ16名が参加し、最新の分析・鑑定手法に関する文献・報文の収集を行った。</p> <p>(エ) 立入検査実施計画等について、インターネットVPNへの掲載様式を定め、活用した。</p>
<p>② 農薬関係業務 ア 農薬の検査等業務 農薬の登録申請に係る検査の実施については、GLP (Good Laboratory Practice : 優良試験所規範) 制度に基づいて実施することを求めている試験項目について、当該試験の信頼性に係る検査を定型化することにより、検査精度の維持を図りつつ検査を効率的かつ効果的に実施することとする。これにより、旧農薬検の前中期目標において目標とした検査期間を、中期目標期間中に更に5%程度短縮することとし、具体的には、次に掲げる目標期間内^(注)に検査を完了させる。 (7) 農薬取締法(昭和23年法律第82号)第3条第1項第4号から第7号までのいずれかに掲げる場合に該当するかどうかの基準の設定が必要な農薬の検査については、1年4か月以内</p>	<p>② 農薬関係業務 ア 農薬の検査等業務 農薬の登録申請に係る検査の実施については、GLP (Good Laboratory Practice : 優良試験所規範) 制度に基づいて実施することを求めている試験項目の検査について、当該試験の信頼性に係る検査項目等の定型化を図る等、効率的かつ効果的に実施することにより、旧農薬検の前中期目標において目標とした検査期間を、中期目標期間中に更に5%程度短縮することとし、具体的には、次に掲げる目標期間内^(注)に検査を完了させるため、次の(7)から(イ)までの措置を講じる。 a 農薬取締法(昭和23年法律第82号)第3条第1項第4号から第7号までのいずれかに掲げる場合に該当するかどうかの基準の設定が必要な農薬については、1年4か月以内 b a以外の農薬の検査については、10.5か月以内</p>	<p>② 農薬関係業務 ア 農薬の検査等業務 農薬の登録申請に係る検査の実施については、GLP (Good Laboratory Practice : 優良試験所規範) 制度に基づいて実施することを求めている試験項目の検査について、当該試験の信頼性に係る検査項目等の定型化を図る等、効率的かつ効果的に実施することにより、独立行政法人農薬検査所(以下「旧農薬検」という。)の前中期目標において目標とした検査期間を、中期目標期間中にさらに5%程度短縮することとし、具体的には、次に掲げる目標期間内^(注)に検査を完了させるため、次の(7)から(イ)までの措置を講ずる。 a 農薬取締法(昭和23年法律第82号)第3条第1項第4号から第7号までのいずれかに掲げる場合に該当するかどうかの基準の設定が必要な農薬については、1年4か月以内 b a以外の農薬の検査については、10.5か月以内 (注) 検査の過程で追加試験成績等の提</p>	<p>② 農薬関係業務 ア 農薬の検査等業務 農薬の登録申請に係る検査の実施については、GLP制度に基づいて実施することを求めている試験項目の検査について、当該試験の信頼性に係る検査項目等について平成18年度に作成したチェックリストを活用し効率化を図るとともに、次の(7)から(イ)までの措置を講じた。 平成19年度は、農林水産大臣から継続分を含め3,012件(平成18年度比16.2%減)の検査指示があった。 このうち、基準設定必要農薬の検査指示は321件(平成18年度比19.3%増)であったが、平成19年度内に検査が完了した105件のうち、迅速化に係る目標期間である1年4か月以内に検査を完了したものは97件(検査完了件数に対する割合: 92.4%)であった。 基準必要農薬で目標を達成できなかった8件は、同じ有効成分で先行して申請している農薬がある場合においては、当該農薬の残留農薬基準が告示(あるいは確定)されるまでの間は、関係資料を農林水産省に送付できないこととなっているためである。 また、基準設定不要農薬の検査指示は2,691件(平成18年度比19.1%減)であったが、平成19年度内に検査を完了した1,592件のうち、迅速化に係る目標期間である10.5か月以内に検査を完了したものは1,524件(検査完了件数に対する割合: 95.7%)であった。 基準設定不要農薬で目標を達成できなかった68件は、防除現場での混乱を防止し、円滑な防除指導を行うため、異なる</p>

(イ) (7)以外の農薬の検査については、10.5か月以内
 (注) 検査の過程で追加試験成績等の提出が必要な場合における当該追加試験成績等が提出されるまでの期間及び登録申請された農薬のADI (Acceptable Daily Intake : 体重1kg当たりの1日摂取許容量) 等が設定されるまでに要する期間は、検査期間に含まないものとする。

(注) 検査の過程で追加試験成績等の提出が必要な場合における当該追加試験成績等が提出されるまでの期間及び登録申請された農薬のADI (Acceptable Daily Intake : 体重1kg当たりの1日摂取許容量) 等が設定されるまでに要する期間は、検査期間に含まないものとする。

(7) 検査項目の重点化
 GLP試験成績の信頼性に係る項目についてチェックリストを作成し、農薬の登録申請に係る検査を効率的かつ効果的に実施する。

(イ) 検査業務の進行管理の充実
 検査を行うに当たり、検査進行管理表に基づき各検査の進捗状況を総合的かつ定期的に点検し、検査の遅延の要因を分析して、検査の迅速化を図る。

具体的には、
 a 検査全体の進捗状況を検査職員全員が随時把握できるよう、LANシステムを改良する。
 b 農薬取締法第3条第1項第4号から第7号までのいずれかに掲げる場合に該当するかどうかの基準の設定が必要な農薬の検査については、

(a) 農林水産大臣からの検

出が必要な場合における当該追加試験成績等が提出されるまでの期間及び登録申請された農薬のADI (Acceptable Daily Intake : 体重1kg当たりの1日摂取許容量) 等が設定されるまでに要する期間は、検査期間に含まないものとする。

(7) 検査項目の重点化
 GLP試験成績の信頼性に係る項目について前事業年度に作成したチェックリストを活用する。

(イ) 検査業務の進行管理の充実
 登録検査に係る農薬について、検査進行管理表を作成し、これに基づき概ね3か月に1回の頻度で検査進行管理会議を開催し、検査の遅延の要因を分析し、適切な措置を講ずる。

また、検査遅延防止のため、毎月1回、各検査担当課において検査進行状況を確認し、遅延がある場合は適切な措置を講ずる。さらに、
 a 検査進行状況の把握及び管理の効率化を図るため、現状を分析の上システム化を検討する。

b 検査進行状況の把握及び遅延の要因分析に資するため、検査期間を検査指示から食品安全委員会送付までの検査期間及び全検査期間別に把握、整理する。

時期の申請について登録時期を合わせる必要があったこと等によるものであった。

表4 平成19年度における目標期間の達成状況

	指示件数 (注1)	検査完了 件数	目標達成 件数	目標達成 率(注2)	目標期間
基準必要	321	105	97	92.4%	16月
基準不要	2,691	1,592	1,524	95.7%	10.5月

注1) 平成19年度+継続分。

注2) 対検査完了件数比。

その他、1,129件の農薬について再登録に係る検査を行った。

(7) 検査項目の重点化
 平成18年度に作成したGLP試験成績の信頼性に係る項目についてチェックリストを活用し、定型的な検査項目の簡略化を図った。

(イ) 検査業務の進行管理の充実
 「検査進行管理表」は毎月2回作成し、その結果を踏まえ、検査進行管理会議を3か月毎(5・8・11・2月)に行うことにより検査進行状況の定期的点検及び検査の遅延要因把握を行うとともに、検査遅延防止のため、毎月1回、各検査担当課において検査進行状況を確認するなどにより検査の迅速化に努めた。なお、検査に遅延は見られなかった。

さらに、
 a 現状を分析し、現行システムの改良すべき点を明らかにした。
 b 四半期ごとに検査が完了した農薬について検査期間を検査指示から食品安全委員会送付までの検査期間及び全検査期間別に把握、整理を行った。

	<p>査指示から、基準の設定等を行う厚生労働省、環境省及びリスク評価を行う食品安全委員会に対して必要な資料を送付するまで</p> <p>(b) 農林水産大臣からの検査指示から、同大臣に対する検査結果の報告までの検査期間について、きめ細かく検査の進捗状況を把握し、検査期間の削減を図る。</p> <p>(ウ) 機動的な人員配置の強化 検査の進行状況を踏まえ、必要に応じて検査職員を機動的に配置する。</p> <p>(イ) 職員に対する研修のカリキュラムの策定及び研修の実施 業務内容の高度化及び専門化に対応しつつ、検査の迅速化を図るため、新たに体系的な研修カリキュラムを策定し、これに基づく研修を実施する。</p>	<p>(ウ) 機動的な人員配置の強化 機動的な人員配置を行うため、本事業年度から拡充されたスタッフ制を活用し、部長及び課長は、必要に応じて職員の業務内容を調整する。</p> <p>(イ) 職員に対する研修の実施 前事業年度に策定した体系的な研修カリキュラムを見直すとともに、見直されたカリキュラムに基づいて研修を実施する。</p>	<p>(ウ) 機動的な人員配置の強化 魚介類に対する残留農薬基準の設定に対する協力及び農薬の疑いのある資材（疑義資材）の分析に関して、職員を機動的に配置した。</p> <p>(イ) 職員に対する研修の実施 登録検査に要求される毒性及び残留性等に関する高度の専門知識の涵養を行うため、平成18年度に策定した体系的な研修カリキュラムを見直すとともに、見直されたカリキュラムに基づき13回（80名）の研修を実施した。また、内部研修で習得が難しい技術、知識等については9件の外部研修を活用し、19名の職員を参加させた。</p>
<p>イ アの業務に附帯する業務 調査研究等、これまで附帯業務として実施してきた業務については、検査検定を主たる業務として実施する法人にふさわしいものに特化・重点化する。</p>	<p>イ アの業務に附帯する業務 調査研究等、これまで附帯業務として実施してきた業務については、検査検定を主たる業務として実施する法人にふさわしいものに特化・重点化する（具体的措置は、第2の2(2)の②のウにおいて後述）。</p>	<p>イ アの業務に附帯する業務 調査研究等、これまで附帯業務として実施してきた業務については、検査検定を主たる業務として実施する法人にふさわしいものに特化・重点化する（具体的措置は、第2の2(2)の②のウにおいて後述）。</p>	<p>イ アの業務に附帯する業務 (7) 調査研究課題の選定等 全調査研究費41百万円のうち、a及びbに該当する調査研究経費は、39百万円であり、全調査研究費の95.1%をこれらに配分した。 a 農薬登録に係るOECDテストガイドライン等の国際的枠組の策定に当たり、これが我が国へ導入された場合の可否の検証 b 残留農薬基準の対象品目の拡大等に対応した新たな検査手法の開発 c その他研究課題</p>

<p>③ 飼料及び飼料添加物関係業務</p> <p>ア 飼料中の飼料添加物及び有害物質のモニタリング検査業務</p> <p>分析試験業務の効率化を図り、中期目標期間中に、試験に従事する職員1人当たりの試験成分点数を平成17年度の実績に対して少なくとも5%増加させ、もって輸入飼料等のモニタリング検査を充実・強化する。</p> <p>また、モニタリング検査については、輸入飼料中の有害物質の混入等、飼料等の安全性に関する課題を勘案し、検査の必要性に応じて重点化して実施する。</p> <p>さらに、分析法の開発・改良、調査研究等の業務については、飼料等の安全性に関する課題を勘案し、毎事業年度、適正な評価を図りつつ、重点化して実施する。</p>	<p>③ 飼料及び飼料添加物関係業務</p> <p>ア 飼料中の飼料添加物及び有害物質のモニタリング検査について、試験に従事する職員1人当たりの試験成分点数を増加させるために当該事業年度中に取り組むべき課題及び職員1人当たりの目標とする試験成分点数を年度計画に定め、分析法の改良、分析技術の高度化等による分析業務の効率化を図り、中期目標期間の最終事業年度において試験に従事する職員1人当たりの試験成分点数を平成17年度の実績に対して5%増加させる。</p> <p>また、モニタリング検査については、輸入飼料中の有害物質の混入等、飼料の安全性に関する課題を勘案し、検査の必要性に応じて重点化して実施する。</p> <p>さらに、分析法の開発・改良、調査研究等の業務については、飼料の安全性に関する課題を勘案し、かつ、飼料分析基準検討会等における適正な評価を図りつつ、効率的に重点化して実施する。</p>	<p>③ 飼料及び飼料添加物関係業務</p> <p>ア 飼料中の飼料添加物及び有害物質のモニタリング検査について、試験に従事する職員1人当たりの試験成分点数を増加させるために、試験の精度管理を的確に実施しつつ平成18年度に導入されたポジティブリスト制度に対応し、GC-MS、LC-MSによる一斉分析法の開発及び収去品分析への適用により分析業務の効率化を図り、職員1人当たりの目標とする試験成分点数を年間2,000点とし、平成17年度の実績に対して5%以上増加させる。</p> <p>また、モニタリング検査については、輸入飼料中の有害物質の混入等、飼料の安全性に関する課題を勘案し、検査の必要性に応じて重点化して実施する。</p> <p>さらに、分析法の開発・改良、調査研究等業務については、飼料の安全性に関する課題を勘案し、かつ、飼料分析基準検討会等における適正な評価を図りつつ、効率的に重点化して実施する。</p>	<p>③ 飼料及び飼料添加物関係業務</p> <p>ア 飼料中の飼料添加物、有害物質のモニタリング検査について、試験の精度管理を的確に実施しつつ、平成18年度に開発したGC-MS、LC-MSによる有害物質等の一斉分析法を活用することにより、試験に従事する職員1人当たりの分析成分点数を平成19年度の目標値2,000点に対して3,541点実施した。</p> <p>また、モニタリング検査については、飼料等による家畜等への被害を未然に防止する観点から、飼料原料の大部分を占める輸入飼料を中心とした飼料中の有害物質等に重点化し、飼料等の安全性の確保の充実を図った。</p> <p>さらに、分析法の開発・改良、調査研究等業務については、農林水産省からの要請や飼料等の安全性に関する課題を勘案し、重点化して10課題（20成分）について実施した。</p> <p>これらの分析法は、「飼料分析基準検討会」において学識経験者による評価を受けた上で農林水産省に報告した。</p>
<p>イ 飼料の安全性の確保及び品質の改善に関する法律（昭和28年法律第35号。以下「飼料安全法」という。）に基づく立入検査等業務</p> <p>(7) 検査の重点化</p> <p>各事業年度における飼料の流通状況を勘案して、輸入飼料中の動物由来たん</p>	<p>イ 飼料の安全性の確保及び品質の改善に関する法律（昭和28年法律第35号。以下「飼料安全法」という。）に基づく立入検査等業務</p> <p>(7) 検査の重点化</p> <p>立入検査等については、年間600箇所以上を目途とし、各事業年度における飼料の流</p>	<p>イ 飼料の安全性の確保及び品質の改善に関する法律（昭和28年法律第35号。以下「飼料安全法」という。）第57条第1項の規定に基づく立入検査等については、次に掲げる事項を実施する。</p> <p>(7) 検査の重点化</p> <p>立入検査等については、牛海綿状脳症の発生の防止、飼料の有害物質による汚染防止、未承認遺伝子組換</p>	<p>イ 飼料の安全性の確保及び品質の改善に関する法律（以下「飼料安全法」という。）第57条第1項の規定に基づく立入検査等については、次に掲げる事項を実施した。</p> <p>(7) 検査の重点化</p> <p>立入検査等については、農林水産省から示された「平成19年度飼料等立入検査等実施の方針について（平成19年1月24日付け18消安第11337号農林水産省消費・安全局長通</p>

<p>白、安全性未確認遺伝子組換え体を含むおそれのある飼料、農薬が残留しているおそれのある飼料等によりリスクの高い飼料等に検査対象を重点化して効率的かつ効果的に実施する。</p> <p>(イ) 検査結果報告の迅速化 立入検査等の結果及び収去対象飼料の試験結果の報告については、事務手続の見直し等を行い、中期目標期間中に、現行の報告に要する日数から少なくとも5業務日短縮し、立入検査結果にあつては立入検査の日から25業務日以内に、また、収去品の試験結果にあつては試験を終了した日から15業務日以内に報告する。</p>	<p>通状況を勘案して、重点化する検査対象を年度計画に定めて、効率的かつ効果的に検査を実施する。</p> <p>(イ) 検査結果報告の迅速化 立入検査等の結果及び収去対象飼料の試験結果の報告については、事務手続の見直し等を行い、中期目標期間中に、現行の報告に要する日数から少なくとも5業務日短縮し、立入検査結果にあつては立入検査の日から25業務日以内に、また、収去品の試験結果にあつては試験を終了した日から15業務日以内に報告する。</p>	<p>え体の流通防止等に重点化して飼料倉庫、サイロ、飼料等製造事業場等に、年間600箇所以上を目途とし、効率的かつ効果的に検査を実施する。</p> <p>(イ) 検査結果報告の迅速化 立入検査等の結果及び収去対象飼料の試験結果の報告については、農林水産大臣への報告に要する期間を短縮することができるよう、LAN等を活用して本部及び各地方組織間の報告を簡素化する。</p>	<p>知)」に基づき、牛海綿状脳症の発生防止、飼料の有害物質による汚染防止、未承認遺伝子組換え体の流通防止等を目的としたものに重点化して、624箇所に対して実施した。また、検査の実施に当たっては、各月毎の集中検査や集中分析による、効率的かつ効果的な検査の実施に努めた。</p> <p>(イ) 検査結果報告の迅速化 立入検査等の結果及び収去対象飼料の試験結果の農林水産大臣への報告については、事務処理に係る既存の規程の改訂を行い、インターネットVPNを活用した本部及び各事務所間における報告事務の簡素化等を図り、報告に要する期間の短縮に努めた。</p>								
<p>④ 土壤改良資材関係業務 ア 集取品の検査業務 集取品の検査については、集中的な検査を行うこと等により、中期目標期間中に、平成17年度を基準として、集取品1点当たりに要する試験時間を約10%削減する。</p>	<p>④ 土壤改良資材関係業務 ア 集取品の検査業務 集取品の検査については、集中的な検査等による迅速化等を図り、中期目標期間中に、平成17年度を基準として、集取品1点当たりに要する試験時間を10%削減する。</p>	<p>④ 土壤改良資材関係業務 ア 集取品の検査業務 集取品の検査については、集中的な検査等による迅速化を図り、平成17年度を基準として、集取品1点当たりに要する試験時間を10%削減する。</p>	<p>④ 土壤改良資材関係業務 ア 集取品の検査業務 集取品（29点）の検査については、集中的な検査と集中試験による迅速化を行い、平成17年度を基準として、集取品1点当たりに要する試験時間を11.8%削減した。</p> <p>表5 集取品1点当たりに要する試験時間</p> <table border="1" data-bbox="1451 1093 2056 1157"> <thead> <tr> <th></th> <th>H19実績</th> <th>H17実績</th> <th>増減率</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>試験時間</td> <td>7.85時間</td> <td>8.90時間</td> <td>△11.8%</td> </tr> </tbody> </table>		H19実績	H17実績	増減率	試験時間	7.85時間	8.90時間	△11.8%
	H19実績	H17実績	増減率								
試験時間	7.85時間	8.90時間	△11.8%								
<p>イ 地力増進法（昭和59年法律第34号）に基づく立入検査業務 地力増進法に基づく立入検査については、表示が不適切な製造業者、新規業者等に重点化を図るとともに、立入検査</p>	<p>イ 地力増進法（昭和59年法律第34号）に基づく立入検査業務 効率的かつ効果的な立入検査を行うため、過去5か年間の立入検査の結果を踏まえ、表示が不適切な製造業者、新規業者等</p>	<p>イ 地力増進法（昭和59年法律第34号）に基づく立入検査業務 効率的かつ効果的な立入検査を行うため、過去5か年間の立入検査の結果を踏まえ、表示が不適切な製造業者、新規業者等に対する立入検査業務の重</p>	<p>イ 地力増進法（昭和59年法律第34号）に基づく立入検査業務 過去5か年間の立入検査結果を踏まえ、表示が不適切な製造業者、新規業者等32件に対する立入検査業務の重点化を図り、効率的かつ効果的に実施した。また、結果の報告については、電子媒体を用いた各地域センターからの報告事務の簡</p>								

<p>査の結果の報告については、中期目標期間中に、農林水産大臣の指示から報告までに要する期間を、VA菌根菌資材を除き、30業務日に短縮する。</p>	<p>に対する立入検査業務の重点化を図るとともに、立入検査の結果の報告については、集中的な検査等による迅速化、稟議手続等の合理化等事務処理の効率化を図ることにより、中期目標期間中に、農林水産大臣の指示から報告までに要する期間を、VA菌根菌資材を除き、30業務日に短縮する。</p>	<p>点化を図るとともに、立入検査の結果の報告については、中期目標期間中に、農林水産大臣の指示から報告までに要する期間を、VA菌根菌資材を除き、30業務日に短縮するため、稟議手続きの合理化等事務処理の効率化を図ることにより、現行の目標期間（40業務日）に対して7業務日短縮する。</p>	<p>素化等の事務処理の効率化を図り、平成17年度を基準として7業務日短縮し33業務日以内に農林水産大臣へ報告した。</p>
<p>(2) 農林水産物等の品質及び表示の適正化に関する業務 ① 食品表示監視業務については、国（地方農政局）、地方公共団体等との役割分担を踏まえ、センターの有する農林物資の分析技術とその活用によって蓄積された専門技術的知見が必要とされる検査等に重点化を図るとともに、平成17年度を基準として、検査に要する時間を中期目標期間中に10%削減し、検査の効率化を図る。</p>	<p>(2) 農林水産物等の品質及び表示の適正化に関する業務 ① 食品表示監視業務については、国、地方公共団体等との役割分担を踏まえ、センターの有するDNA解析技術及び微量成分の検査分析技術等の食品等に関する分析技術とその活用によって蓄積された専門技術的知見が必要とされる検査等に重点化を図るとともに、検査の方法又は工程の見直し、新たな検査方法の導入等による効率的な検査の実施により、平成17年度を基準として、検査に要する時間を中期目標期間中に10%削減し、検査の効率化を図る。</p>	<p>(2) 農林水産物等の品質及び表示の適正化に関する業務 ① 品質表示基準の遵守状況の確認のための食品表示の監視業務（以下「食品表示監視業務」という。）について、農林水産物、飲食物品及び油脂（以下「食品等」という。）に関する分析技術とその活用によって蓄積された専門技術的知見が必要とされる検査等に重点化を図るため、センターの調査研究等によって得られた成果を活用した特定品目に係る重点的な検査を2回以上行う。</p> <p>また、食品表示監視業務に係る検査に要する時間を平成17年度を基準として中期目標期間中に10%削減するため、前事業年度に引き続き、分析試験ごとに分析実施センターの集約化等について検討し、総検査時間を4%程度削減する。</p>	<p>(2) 農林水産物等の品質及び表示の適正化に関する業務 ① 品質表示基準の遵守状況の確認のための検査の実施に当たっては、試験研究機関等と連携して実施したセンターの調査研究の成果を活用し、次のとおりアサリ及び食肉加工品の重点的な検査を実施した。</p> <p>〔アサリの地域系統群判別〕 ・アサリの表示に関する特別調査 52件 〔食肉加工品の肉種鑑別〕 ・牛挽肉加工品の表示に関する緊急調査 110件 ・上記以外の食肉加工品の調査 50件（注）</p> <p>注：食肉加工品に関する調査としては、110件の緊急調査以外に2回（300件）実施したが、そのうち、センターの調査研究の成果を活用したDNA分析によるものが50件で、他は既存のエライザ分析を活用した。</p> <p>また、同一品目の分析試験を集中的に実施する等により、食品表示監視業務に係る検査に要する時間を平成17年度を基準として4.4%削減した。</p>
<p>② 農林物資の検査技術に関する調査及び研究業務については、食品表示の真正性確認に</p>	<p>② 農林物資の検査技術に関する調査及び研究業務については、食品表示の真正性確認に係る調</p>	<p>② 農林物資の検査技術に関する調査及び研究の重点化を図るため、全調査研究課題のうち、表示の真正性確認に係</p>	<p>② 平成19年度中に実施した調査研究課題24課題のうち、表示の真正性確認に係る調査研究を22課題実施し、全体に占める比率を91.7%とした。また、調査及び研究については、引き</p>

<p>係る調査及び研究を重点的に 行うため、表示の真正性確認 に係る調査及び研究課題の比 率を全体の80%以上とすると ともに、その実施体制の強化 を図る。</p>	<p>査及び研究を重点的に行うた め、表示の真正性確認に係る調 査及び研究課題の比率を全体の 80%以上とするとともに、各地 方組織で実施していた調査及び 研究を本部及び特定の地方組織 に集約して行う。</p>	<p>る調査及び研究課題の比率を全体の80 %以上とするとともに、調査及び研究 については本部（横浜事務所を含む。） 及び神戸センターに集約して行う。 なお、年度途中で実施すべき課題が 発生した場合には、この割合に留意し、 必要に応じて課題の調整を行う。</p>	<p>続き本部、横浜事務所及び神戸センターに集約して行った。 なお、年度途中に追加して実施すべき課題は生じなかった。</p>
<p>③ 登録認定機関の登録及びそ の更新時における調査につい ては、農林水産省の調査指示 から報告までの目標期間（30 業務日（ただし、申請者に対 し、照会、追加・補足資料等 が必要とされ、事務処理を行 うことができなかった等の期 間を除く。以下同じ。))を中 期目標期間中に10%削減す る。</p>	<p>③ 登録認定機関の登録及びそ の更新時における調査につい ては、検査員の能力向上と適切 な進行管理により、農林水産省 の調査指示から報告までの目 標期間（30業務日（ただし、 申請者に対し、照会、追加・ 補足資料等が必要とされ、事 務処理を行うことができなかつ た等の期間を除く。第2の3に おいて同じ。))を中期目標期 間中に10%削減する。</p>	<p>③ 登録認定機関（登録外国認定機関を 含む。以下同じ。）の登録及び登録の 更新時における調査（以下「技術上の 調査」という。）については、中期目 標期間中に農林水産省の調査指示から 報告までの目標期間（30業務日（た だし、申請者に対し、照会、追加・補 足資料等が必要とされ、事務処理を行 うことができなかった等の期間につ いては除く。第2の3において同じ。)) を10%削減することができるよう、次 に掲げる措置を講ずる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 目標期間の削減を図るため、事務処 理の簡素・合理化等について検討を行 う。 ○ 登録認定機関の技術上の調査に係る 基準文書を必要に応じて見直すとも に、検査員への周知徹底及び教育訓練 を行うことにより検査員の能力向上を 図る。 	<p>③ 技術上の調査については、次に掲げる取組を行うことによ り、調査を行った436件すべての案件について、農林水産省 の調査指示から27業務日以内に報告した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 事務処理の簡素化・合理化等について検討を行い、検査員 （調査員又は調査員補）の資格所有者が調査を実施するた めの決裁手続きを簡素化する等、技術上の調査に係る基準文書 を改正した。 また、検査員に対し、これまでの技術上の調査等の実績を 事例演習に反映させた研修を2回（26名）実施し、検査員の 調査能力の向上を図った。
<p>④ 農林水産省が行うリスク管 理に資するための有害物質の 分析業務については、平成17 年度を基準として、試料の分 析に要する時間を中期目標期 間中に10%削減し、年間を通 じた均等な業務の実施に努 め、効率化を図る。</p>	<p>④ 農林水産省が行うリスク管 理に資するための有害物質の分 析業務については、同一品目の集 中的な実施、分析の作業工程の 最適化等による効率的な分析の 実施により、平成17年度を基準 として、試料の分析に要する時 間を中期目標期間中に10%削減 する。</p>	<p>④ 農林水産省が行うリスク管理に資す るための有害物質の分析業務につ いては、平成17年度を基準として、試料の 分析に要する時間を中期目標期間中に 10%削減するため、厚生労働省が通知 している一斉試験法の果実、野菜等へ の適用、個別に分析していた農薬の同 試験法への一体化等について検討し、 試料の分析に要する時間を4%程度削</p>	<p>④ 次に掲げる取組を行うことにより、農林水産省が行うリス ク管理に資するための有害物質の分析業務の効率化に努め た。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 厚生労働省が通知している一斉試験法の果実、野菜等への 適用、個別に分析していた農薬の同試験法への一体化等につ いて検討した結果、試験法が妥当であることが確認されたた め適用し、残留農薬の分析に要する時間を平成17年度を 基準として5.0%削減した。

<p>また、分析対象の選定や分析の実施に当たっては、生産資材の検査等業務との連携を図った上で、戦略的かつ重点的に行うものとする。</p>	<p>また、月別の分析業務量を平準化することにより、業務の効率化を図る。</p> <p>さらに、分析対象の選定や分析の実施に当たっては、生産資材の特性や使用実態、センターの有する残留農薬等のデータ等の情報に基づき、検査等業務が連携して検討した上で、比較的风险が高いおそれのある農作物等を対象に、戦略的かつ重点的に実施する。</p>	<p>減する。</p> <p>また、分析要員に対する教育訓練との実施時期の調整を図り、月別の分析業務量を平準化することにより、業務の効率化を図る。</p> <p>さらに、比較的风险が高いおそれのある農産物等の分析を戦略的かつ重点的に実施するため、分析対象や分析方法等の選定に当たっては、検査等業務を行う各部門が有するデータ等の情報に基づき、農林水産省関係部局と緊密に連携しつつ、検査関係各部門の協力の下、実施計画を策定し、適切に実施する。</p>	<p>○ 分析要員の教育訓練、技能試験等の実施時期を年度始め頃に調整し、月別の業務量の平準化を図った。</p> <p>○ 分析対象農薬の選定に当たっては、国内の登録農薬が400～500種類に及ぶことから、比較的风险の高いおそれのある農薬を重点的に実施するため、農薬検査部門が有する農薬の使用量等に関する情報に基づき120種類程度に絞り込み、農林水産省関係部局と緊密に連携しつつ、食品検査部門において実施計画を策定し、適切に実施した。</p>
<p>⑤ 生系のJAS規格による格付業務については、平成21年2月28日限りで廃止し、当該業務に係る要員及び経費の合理化を図る。</p>	<p>⑤ 生系のJAS規格による格付業務については、平成21年2月28日限りで廃止し、同日までの経過措置期間中は、受付、サンプリング等の一部の業務を除き、格付業務を神戸センターに集約することにより、要員及び経費の合理化を図る。</p>	<p>⑤ 生系のJAS規格による格付業務については、神戸センターへの業務の集約（受付、サンプリング等の業務を除く。）により不要となる横浜事務所の格付検査のための設備については、段階的に撤去等を行う。</p> <p>また、撤去等を行い不要となった専有部分については、早期に合同庁舎へ返還し経費の合理化が図られるよう、合同庁舎管理官庁と必要な調整を実施する。</p>	<p>⑤ 生系のJAS規格による格付業務については、神戸センターへの集約により不要となった横浜事務所の格付検査のための設備の段階的な撤去等を行った。</p> <p>撤去等を行った専有部分の一部については、合同庁舎管理官庁と返還工事内容の確認を経て、平成20年3月31日付けで専有面積の返還申請を行い、平成20年度から合同庁舎負担金の軽減が図られることとなった。</p>
<p>(3) 情報提供業務</p> <p>食品等の品質及び表示、肥料、農薬、飼料及び飼料添加物並びに土壤改良資材の品質及び安全性等に係る情報提供業務について、その一元化を図るとともに、食の安全と消費者の信頼の確保の観点から重点化を図る。</p>	<p>(3) 情報提供業務</p> <p>① 食品等の品質及び表示、肥料、農薬、飼料及び飼料添加物並びに土壤改良資材の品質及び安全性等に関する情報を一元的に収集・発信するため、検査及び調査並びに法令に基づく業務との連携を図りつつ、これらの業務により作成された情報のデータベースや情報システムの的確な管理のための要員を平成19年度から配置するとともに、これらのデータベース等を活用した一</p>	<p>(3) 情報提供業務</p> <p>① センターが有する専門的知見を活用しつつ、食品等の品質及び表示、肥料、農薬、飼料及び飼料添加物並びに土壤改良資材の品質及び安全性等、食の安全と消費者の信頼の確保に関する情報を重点的に収集・整理し、インターネット（ホームページ及びメールマガジンを含む。以下同じ。）による効率的かつ迅速な情報発信、講習会等を通じた的確な情報の提供を行うため、次に掲げる措置を講ずる。</p>	<p>(3) 情報提供業務</p> <p>① 次に掲げる措置を講ずることにより、センターが有する専門的知見を活用しつつ、食品等の品質及び表示、肥料、農薬、飼料及び飼料添加物並びに土壤改良資材の品質及び安全性等、食の安全と消費者の信頼の確保に関する情報を重点的に収集・整理し、インターネットによる効率的かつ迅速な情報発信、講習会等を通じた的確な情報の提供に努めた。</p>

	<p>元的な対応を図るため、CIO（Chief Information Officer：情報化統括責任者）を設置する等の体制を構築する。</p> <p>② 食の安全と消費者の信頼の確保の観点から情報提供を行う内容の重点化を図るため、情報提供業務により収集・整理する情報については、必要に応じて外部の有識者を含む委員会において検討・評価を行うとともに、消費者、生産者及び事業者等に対するアンケート調査の実施により、随時、提供内容等の見直しを図る。</p>	<p>○ 食品等、肥料、農薬、飼料及び飼料添加物並びに土壌改良資材の検査及び調査の結果や、肥料取締法、農薬取締法、飼料安全法及び地力増進法に基づく業務により蓄積されたデータベースや情報システムを一元的に管理する体制を構築し、そのための要員を配置する。</p> <p>○ CIO（Chief Information Officer：情報化統括責任者）を設置し、その指導のもとデータベースや情報システムのあり方を検討し、必要な改善を図る。</p> <p>② 食の安全と消費者の信頼の確保の観点から情報提供を行う内容の重点化を図るため、次に掲げる措置を講ずる。</p> <p>○ 外部の有識者を含む委員会を設置し、次の事業年度に重点的に収集・整理する情報分野を検討する。また、この委員会において、情報の収集、整理、提供に関する業務の実施状況を点検・評価し、必要な改善を図る。</p> <p>○ 消費者、生産者及び事業者等の関心の高い情報を重点的に収集するためのアンケート調査等を実施し、随時、提供内容の見直しを図る。</p>	<p>○ 各業務により蓄積されたデータベースや情報システムを一元的に管理する体制の構築について情報提供推進委員会で検討し、提供可能な情報を把握するため既存のデータベースを調査するとともに、一元的管理を行うために必要な各データベースごとの的確な管理のための要員として、管理責任者及び所定の期間内のデータ入力状況を確認する進行管理者を配置した。</p> <p>○ CIOを設置し、その指導のもと情報提供推進委員会においてデータベース等のあり方についての検討を行い、その結果をCIOへ報告するとともに、CIOを委員長とする業務・システム最適化推進委員会を平成20年3月に開催し、データベースや情報システムの現状について検討した。 また、センター業務情報化システムのプログラムについて、入力フォームの変更等の必要な改善を実施した。</p> <p>② 次に掲げる措置を講ずることにより、食の安全と消費者の信頼の確保の観点から情報提供を行う内容の重点化を図った。</p> <p>○ 外部の有識者を含む情報提供業務検討・評価委員会を平成20年3月に開催し、平成19年度の情報提供業務の実施状況を点検・評価した。その結果、平成20年度に重点的に収集・整理する情報分野として、話題性の高い情報に重点化するとともに、また、センターにおいて実施した業務をPRすべきとの指摘を受け、提供情報にあたっては、センターとしての取組を可能な限り関連づけて提供する等の改善を図ることとした。</p> <p>○ 消費者、生産者及び事業者等の関心事項を把握するためのアンケート調査等を、次のとおり実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ホームページ、広報誌及びメールマガジンの利用者に対し、アンケート調査を行った。 ・ ホームページに関する意見要望等を随時受け付けるコンテンツを引続き設置した。 ・ 講習会及び研修会の課題等の選定に資するため、センターが開催する講習会の際に、アンケート調査を行った。
--	--	---	---

<p>第3 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する事項</p> <p>1 共通事項</p> <p>センターは、農場から食卓までの一連の過程を対象に、検査等業務を一体的に実施することにより、技術を通じて食の安全と消費者の信頼の確保に貢献する機関として、統合メリットを発揮し、国民に対して提供するサービスの質の向上に努めることとし、以下の取組を実施する。</p>	<p>第2 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためとるべき措置</p> <p>1 共通事項</p>	<p>第2 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためとるべき措置</p> <p>1 共通事項</p>	<p>第2 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためとるべき措置</p> <p>1 共通事項</p>
<p>(1) 食の安全と消費者の信頼の確保に向けた取組</p> <p>検査等業務に関する知見やノウハウの結集、検査等職員や分析機器の機動的かつ重点的な投入など、統合メリットを最大限活用し、食の安全と消費者の信頼の確保に資するため、以下の取組を実施する。</p> <p>① 食の安全と消費者の信頼の確保に資するため、次に掲げる4つの分野を対象に8課題を設定し、センターが有する知見やノウハウを結集し、改善・解決を図るものとする。</p> <p>ア 検査・分析能力の向上 イ 情報提供能力の強化 ウ 生産資材由来のリスクの低減 エ 食品表示等の信頼性の向上</p>	<p>(1) 食の安全と消費者の信頼の確保に向けた取組</p> <p>食の安全と消費者の信頼の確保に資するため、①から③までの取組を行う。</p> <p>① 食の安全と消費者の信頼の確保に資するため、中期目標期間中に次に掲げるような8課題について検討し、結論を得る。</p> <p>ア 職員の分析能力の向上及び平準化に向けた定期的な技能試験の実施方法の検討及び試験結果に基づく研修プログラムの作成 イ 検査結果の信頼度を向上させるための業務改善プログラムの作成及び当該プログラムに基づく業務の改善 ウ 海外における生産資材に係るリスク管理情報や農薬等の</p>	<p>(1) 食の安全と消費者の信頼の確保に向けた取組</p> <p>新たなリスクへの対応などセンター全体として取り組む課題の解決を図る場合や、緊急時における迅速な食品の安全性の確保等に資するため、次に掲げる事項について適切な取組を行う。</p> <p>① 食の安全と消費者の食に対する信頼性を確保する観点から、センター全体として取り組むべき課題を次に掲げるような課題の中から、年度当初に2課題以上選定し、専門技術的知見を有する職員から構成するプロジェクトチームを設置し、調査分析等を効率的かつ効果的に実施する。</p> <p>また、外部の有識者を含む委員会を設置し、取組内容の評価改善を図る。</p> <p>ア 職員の分析能力の向上及び平準化に向けた定期的な技能試験の実施方法の検討及び試験結果に基づく研修プログラムの作成 イ 検査結果の信頼度を向上させるた</p>	<p>(1) 食の安全と消費者の信頼の確保に向けた取組</p> <p>次に掲げる事項について適切な取組を行うことにより、新たなリスクへの対応などセンター全体として取り組む課題の解決を図る場合や、緊急時における迅速な食品の安全性の確保等に努めた。</p> <p>① 食の安全と消費者の食に対する信頼性を確保する観点から、センター全体として取り組むべき課題を次のとおり2課題選定し、専門技術的知見を有する職員から構成するプロジェクトチームを設置し、調査分析等を効率的かつ効果的に実施した。</p> <p>・牛挽肉加工品緊急調査プロジェクトチーム 牛挽肉加工製品及びその表示についての国民の信頼を早急に回復することを目的として、食品検査部門及び飼料検査部門によるプロジェクトチームを設置し、飼料検査部門が特許を有するDNA検査用試薬（プライマー）を含む肉骨粉の動物種を判別する分析技術を食品の肉種鑑別に利用するなど、両部門の連携のもと迅速に効率的かつ効果的な検査を実施した。</p> <p>・前作に使用された農薬の残留分析プロジェクトチーム</p>

安全性に係る情報等、消費者等の関心が高く、重点的に収集すべき情報に係る収集方法の検討

エ 広報誌、メールマガジン等の情報提供媒体の活用方策やプレゼンテーション方法等に関する情報提供能力の向上のためのプログラムの策定及び当該プログラムに基づく業務の改善

オ 肥飼料や農薬に由来する食品中の危害要因に係る情報の収集・分析

カ 肥飼料や農薬の使用実態及び特性を踏まえた食品中の有害物質の実態調査

キ 有機農産物の表示等の新たな表示に対応した検査技術や検査方法の改善・改良

ク アからキまでに掲げるもののほか、食の安全と消費者の信頼の確保の観点から特に必要な課題

上記の課題の取組に当たっては、外部の有識者を含む委員会を設置し、毎事業年度、取組内容の評価・改善を図るとともに、専門技術的知見を有する職員により構成されるプロジェクトチームの設置等により、各業務の連携・調整を図りつつ、効率的・効果的に実施する。

② 肥料、農薬、飼料及び飼料添加物並びに土壌改良資材への有害な物質等の混入等が原因となって食品への汚染が懸念される場合や、食品中の有

② 緊急時において、迅速な検査の実施による被害のまん延の防止及び原因の特定を行うための体制を確保するため、次に掲げる取組を実施する。

めの業務改善プログラムの作成及び当該プログラムに基づく業務の改善
ウ 海外における生産資材に係るリスク管理情報や農薬等の安全性に係る情報等消費者等の関心が高く、重点的に収集すべき情報に係る収集方法の検討

エ 広報誌、メールマガジン等の情報提供媒体の活用方策やプレゼンテーション方法等に関する情報提供能力の向上のためのプログラムの策定及び当該プログラムに基づく業務の改善

オ 肥飼料や農薬に由来する食品中の危害要因に係る情報の収集・分析

カ 肥飼料や農薬の使用実態及び特性を踏まえた食品中の有害物質の実態調査

キ 有機農産物の表示等の新たな表示に対応した検査技術や検査方法の改善・改良

ク アからキまでに掲げるもののほか、食の安全と消費者の信頼の確保の観点から特に必要な課題

② 緊急的にセンター一体となって被害のまん延の防止及び危害原因の特定に努める必要が生じた場合にあっては、プロジェクトチームの設置やスタッフ職員の活用などを行い、検査等に係る

ポジティブリスト制度が導入された中で、前作の作物に使用した農薬の作物残留に係るリスク低減に資するためのデータを得ることを目的として、食品検査部門及び農薬検査部門によるプロジェクトチームを設置し、農薬検査部門が有する土壌半減期の長い農薬等に関する知見を活用して分析対象農薬を選定し、両部門の連携のもと効率的かつ効果的な検査を実施した。

また、外部の有識者を含む業務評価委員会を平成20年3月に開催し、平成19年度の取組内容の評価を行うとともに、平成20年度のプロジェクト課題についての意見等を傾聴した。

② 次に掲げる取組を実施することにより、緊急的にセンター一体となって被害のまん延の防止及び危害原因の特定に努める必要が生じた場合にあっては、プロジェクトチームの設置やスタッフ職員の活用などを行い、検査等に係る知見やノウハウの結集を図りつつ、総力をあげて検査等を迅速かつ効果

<p>害な物質の汚染の原因がこれらの資材にあることが懸念される場合には、食の安全を確保するため、センターの総力を挙げて検査を迅速かつ効果的に実施し、被害のまん延防止及び原因の特定に努める。</p> <p>③ ①及び②以外についても、個々の業務の実施に当たっては、必要に応じて連携・調整を図ることにより、質の向上に努めるものとする。</p>	<p>ア リスクに応じて必要となる専門分野や分析機器の検証及び活用方策の検討並びに地方組織を含めた全国組織の連携方策及び緊急時における指示・連絡体制等の対応マニュアルの策定</p> <p>イ 対応マニュアルに基づく連絡体制、専門的知見を有する職員及び機器の登録・更新</p> <p>ウ 対応マニュアルに基づく訓練の実施、緊急時の事例の収集・解析、職員の専門的知見の向上のための研修の実施等の対応能力の向上</p> <p>③ ①及び②以外についても、個々の業務の実施に当たっては、必要に応じて連携・調整を図ることにより、質の向上に努めるものとする。</p>	<p>知見やノウハウの結集を図りつつ、総力をあげて検査等を迅速かつ効果的に実施するため、次に掲げる取組を実施する。</p> <p>ア リスクに応じて必要となる専門分野や分析機器の検証及び活用方策の検討並びに地方組織を含めた全国組織の連携方策及び緊急時における指示・連絡体制等の対応マニュアルの策定</p> <p>イ 対応マニュアルに基づく連絡体制、専門的知見を有する職員及び機器の登録・更新</p> <p>ウ 対応マニュアルに基づく訓練の実施、緊急時の事例の収集解析、職員の専門的知見の向上のための研修の実施等の対応能力の向上</p> <p>また、適切かつ正確な情報を消費者に分かり易く、かつ、迅速に提供し、消費者の被害及び生産者の風評被害の防止、消費者の不安の解消等を図るため、相談窓口の設置等を必要に応じて行う。</p> <p>③ ①及び②以外についても、個々の業務の実施に当たっては、必要に応じて連携・調整を図ることにより、質の向上に努める。</p>	<p>的に実施するための体制を整備した。</p> <p>ア リスクに応じて必要となる専門分野や分析機器について検証及び活用方策の検討並びに地方組織を含めた全国組織の連携方策を定めた規程を改正し、同規程に基づき緊急時における指示・連絡体制等の対応マニュアルを策定した。</p> <p>イ 対応マニュアルに基づき、連絡体制並びに想定される要因及びその内容別分類ごとに専門的知見を有する職員及び機器を登録した名簿を見直し、更新した。</p> <p>ウ 対応マニュアルに基づき、情報の収集を行い、緊急の事態の発生に備えるとともに、想定される調査の内容別分類に係る研修を4回（5名）実施した。</p> <p>また、輸入冷凍ギョウザによる薬物中毒事案の発生時には、消費者相談窓口を土日においても開設するなど輸入食品に関する相談400件に対応し、寄せられた健康危害に関連する情報20件については、保健所、農林水産省、国民生活センター等の関係機関に対して迅速に情報提供を行い、情報の共有化に努めた。</p> <p>③ ①及び②以外の個々の業務の実施に当たって、連携・調整を図る必要のある事案は生じなかった。</p>
<p>(2) 情報提供業務の一元化及び提供内容の充実</p> <p>① 情報提供業務については、利用者の利便性を向上させるため、消費者、生産者及び事業者を対象に、農場から食卓</p>	<p>(2) 情報提供業務の一元化及び提供内容の充実</p> <p>① 情報提供業務の一元化及び提供内容の充実を図るため、次に掲げる取組を実施する。</p>	<p>(2) 情報提供業務の一元化及び提供内容の充実</p> <p>① 情報提供業務の一元化を図り、また、消費者、生産者、事業者等の関心を把握するために行ったアンケート調査の結果を踏まえ提供内容の充実を図りつ</p>	<p>(2) 情報提供業務の一元化及び提供内容の充実</p> <p>① 情報提供業務の一元化を図り、また、消費者、生産者、事業者等の関心を把握するために行ったアンケート調査の結果を踏まえ提供内容の充実を図りつつ、次に掲げる取組により的確かつ迅速に情報提供を行った。</p>

までの一連の過程における食品に関する情報を一元的に提供する。

また、生産資材に由来する有害な物質等のリスクに関する正しい理解や、食品の成分や原材料等に由来する品質及び表示に関する信頼の確保の観点から、幅広くかつ適切に収集した情報をわかりやすく提供するなど、内容の充実を図ることとする。

ア 情報提供業務の一元化

情報の一元的な提供を行うため、検査等業務の終了後30業務日以内の結果等のデータベース化、検査等業務及び情報提供業務等に従事する職員から成る委員会を毎月1回以上開催する等により、検査等業務で得られた情報を適切に収集・整理するとともに、情報提供業務部門や相談窓口等に、肥料、農薬、飼料及び飼料添加物並びに土壤改良資材の品質及び安全性等に関して専門的知見を有する職員を配置する。

つ、次に掲げる取組によりの確かつ迅速に情報提供を行う。

ア 情報提供業務の一元化

○ 食品表示の監視業務などJAS法関係業務、肥料、飼料及び飼料添加物並びに土壤改良資材の検査等業務並びに農薬の登録業務等を通じて蓄積した情報を検査等業務の終了後30業務日以内にデータベースに登録する。

○ 幅広い情報の収集・整理・分析を行い、必要な取組を進めるため、検査等業務及び情報提供業務等に従事する職員から成る委員会を毎月1回以上開催する。

○ 情報提供業務部門や相談窓口等に肥料、農薬、飼料及び飼料添加物並びに土壤改良資材の品質及び安全性等に関して専門的知見を有する職員を配置し、これらと併せて食品の品質及び表示等に関する消費者、生産者、事業者等からの相談に適切に対応する。

ア 情報提供業務の一元化

○ 食品表示の監視業務などJAS法関係業務、肥料、飼料及び飼料添加物並びに土壤改良資材の検査等業務並びに農薬の登録業務等を通じて蓄積した情報を検査等業務の終了後30業務日以内にデータベースに登録した。

○ 検査等業務及び情報提供業務等に従事する職員を構成員とする情報提供業務推進委員会を毎月1回開催し、ホームページ、メールマガジン、広報誌等における提供情報の的確性及び分かりやすさ等について検討を行った。

○ 情報提供業務部門や相談窓口等に肥料、農薬、飼料及び飼料添加物並びに土壤改良資材の品質及び安全性等に関して専門的知見を有する職員を配置し、これらと併せて食品の品質及び表示等に関する消費者、生産者、事業者等からの相談に次のとおり適切に対応した。

○ 消費者相談専用電話及び食品表示110番を活用するとともに、消費生活展等において消費者相談窓口を開設し、消費者からの相談3,590件に対応した。

また、食品表示110番等を通じて収集した不正表示や違法なJASマーク表示に関する情報1,347件について、事務処理手順書に基づき農林水産省関係部局等へ通報する等、迅速かつ的確に対応した。

○ 事業者等からの食品表示、肥飼料等に関する相談27,138件に対応した。

・肥料	6,928件
・飼料及び飼料添加物	1,550件
・土壤改良資材	98件
・食品	18,562件
計	27,138件

また、情報の提供に当たっては、利用者のアクセスを改善するため、ホームページの適宜更新、メールマガジンの配信先の拡大（中期目標期間中に、平成17年度末を基準として10%増加）及び毎事業年度36回以上の発信等、ホームページやメールマガジンの積極的な活用を図るとともに、広報誌を毎事業年度6回以上発信し、最新の情報を提供できるように努める。

○ 製造業者等からの食品表示等に関する相談に対応するとともに、本部、名古屋及び神戸の各センターに設置した食品表示に関する一元的相談窓口を適切に運営する。

○ インターネット情報の内容を適宜更新することにより、食品表示に関する情報、JAS製品の品質に関する情報、遺伝子組換え食品、農産物の残留農薬、肥料、飼料、飼料添加物、土壌改良資材及び農薬の安全性に関する情報や企業、消費者等からの相談事例等を迅速に提供する。

また、インターネットを通じた食の安全と消費者の信頼確保に関する意見交換会として「電子フォーラム」を3回以上開催する。

○ 食品安全委員会等のリスク評価機関の動向や食品の安全と消費者の信頼の確保に関する情報の提供を迅速に行うため、希望者にメールマガジンを毎月3回以上配信し、併せて配信先を中期目標期間中に、平成17年度末を基

○ （社）日本食品衛生協会と連携して設置している3か所の食品表示に関する一元的相談窓口を適切に運営し、食品表示等に関する企業相談件数のうち2,196件の相談に対応した。

○ 食品表示に関する情報、JAS製品の品質に関する情報、遺伝子組換え食品、農産物の残留農薬、肥料、飼料、飼料添加物、土壌改良資材及び農薬の安全性に関する情報や企業、消費者等からの相談事例等を迅速にホームページに掲載した。（更新回数 244回、アクセス回数 657,896回）

〔ホームページの主な掲載内容〕

- ・ 行政情報（報道発表、パブリックコメント情報、JAS規格、食品表示等）
- ・ 食に関わる情報（Q&A、相談事例、個別リスク情報、国際規格関係情報、キッズページ、相談窓口等）
- ・ 食品等検査関係情報（調査研究報告、分析マニュアル、事業者の取組等）
- ・ 肥飼料検査関係情報（各種申請手続き、検査結果の公表等）
- ・ 農薬検査関係情報（登録・失効情報、農薬登録情報検索システム、農薬登録申請関係、GLP適合確認申請等）
- ・ センター情報（イベント情報、刊行物等）
- ・ 公表事項（独立行政法人通則法に基づく公表事項、調達情報等）

また、ホームページ上で、食の安全と消費者の信頼確保に関する意見交換の場としての電子フォーラムを、次の3テーマについて開催した。

- ・ 知っていますか？賞味期限と消費期限
- ・ もっともっと知りたい！有機食品
- ・ 漬物いろいろ、好きですつけもの

○ 電子メールマガジンを毎月3回以上、合計49回（延べ配信数201,445通）配信した。

〔メールマガジンの主な掲載内容〕

- ・ 食品の安全と消費者の信頼確保に関する情報
- ・ 行政情報（報道発表、パブリックコメント情報等）
- ・ 消費者向けイベント情報

さらに、センターの有する専門技術的知見を活用した講習会及び研修会を、毎事業年度30回以上開催するとともに、地方公共団体等からの依頼に基づく講習会への講師派遣については、センターの有する専門技術的知見を活用することができるものについて積極的に実施する。

準として10%増加させることができよう、その拡大に努める。

また、行政情報、各種調査結果及びセンター活動状況等についても情報提供を行う。

○ 広報誌を6回以上発行する。

○ 本部及び地方組織に設置した「消費者の部屋」又は「消費者コーナー」を活用して、展示物等による情報提供や利用者の相談等への対応を行うとともに、啓発の目的を明確にした特別展示を行う。

○ 地方公共団体の職員等に対する講習会及び研修会は、企業相談の実績を踏まえた食品の表示、検査分析技術等の専門技術的知見を活用した内容のものを中心に必要に応じて適時適切に、全センター合わせて30回以上開催する。

○ 地方公共団体等から消費者啓発に係る取組等への参加要請があった場合には、地方公共団体等の取組を支援するため、講習会等に役職員の派遣等センターの有する専門技術的知見を活用した対応を行う。

また、メールマガジンの案内チラシを講習会、消費生活展等の際に配布するなどPR活動に努めた結果、配信先は平成19年度末時点で4,245となり、平成17年度末（配信先3,421）を基準として24.1%増加させた。

○ 広報誌「新・大きな目小さな目」を6回（毎回6,500部）発行し、地方公共団体の消費生活センター等に配布した。

〔広報誌の主な掲載内容〕

- ・肥料、農薬、飼料等及び土壌改良資材に関する情報
- ・食のQ&A（消費者相談事例）、表示のQ&A
- ・行政情報
- ・食と農のサイエンス

○ 本部及び各地域センターに設置している「消費者の部屋」又は「消費者コーナー」において常設展示を行うとともに、本部においては、さいたま新都心インフォメーションセンターを活用し、消費者に対する情報提供に努めた。

また、期間を定めて、食品の表示等をテーマとした特別展示を、本部及び各地域センターで14回（来場者 1,321名）実施した。

○ 食品の表示、検査分析技術等の専門技術的知見を活用した内容を中心として、消費者、事業者及び地方公共団体職員等に対する講習会及び研修会を、次のとおり36回（2,238名）開催した。

- | | |
|---------------------|-----------|
| ・食品品質等知見活用講習会 | 10回（635名） |
| ・食品等リスク情報共有化講習会 | 9回（704名） |
| ・地方公共団体職員等研修会 | 8回（130名） |
| ・技術講習会 | 8回（709名） |
| ・消費者被害防止講習会 | 1回（60名） |
| （この他、飼料製造管理者資格取得講習会 | 1回（93名） |

○ 地方公共団体からの要請に応じて行う講習会（派遣講習）に36回（1,654名参加）、事業者等から依頼を受けて行う講習会（依頼講習）に298回（約18,200名参加）役職員を講師として派遣するとともに、消費生活展等への出展を12回（513,276名来場）実施した。

地方公共団体等からの参加要請に応じて、各種研修会及び

イ 提供内容の充実

肥料、農薬、飼料及び飼料添加物並びに土壌改良資材の検査結果、これらの生産資材に関する国内外の規制等の情報、食品等の検査結果並びに品質及び表示、遺伝子組換え食品、農産物の残留農薬、生産資材の安全性等の情報など、消費者の関心が高く、生産者等に対する生産資材の適正な利用方法等の啓発に資する情報を適切に収集・整理するため、外部の有識者を含む委員会の開催によるニーズの把握・検討、収集分野の設定・評価を行う。

また、わかりやすく情報提供を行うため、上記の委員会等により資料の内容や作成方法等に関して毎事業年度、検討・評価を行う。

さらに、迅速かつ的確に相談に対応するため、相談事例集の作成・更新、相談対応に関する基準文書に基づく適切な対応、職員の研修等を実施する。

イ 提供内容の充実

○ 提供情報の的確性、わかりやすさ等情報提供業務の質の向上に資する方策を検討するため、外部の有識者を含めた委員会を開催し、検討結果は情報提供業務の改善に活用する。

○ 消費者相談に迅速かつ的確に対応するため、農林水産省消費者の部屋、地方農政局、消費生活センター等関係機関と緊密に連携する。

○ 消費者、生産者及び事業者等からの相談への対応の質の向上を図るため、これに対応する専門技術的知見を有する者を養成するための研修を行うとともに、受け付けた相談を整理し、重要な事例を相談事例集に収録し、相談対応マニュアルの改善と併せてその充実を図る。

連絡会議等に職員を45回派遣し、事業者等からの要請に応じて、委員会等に役職員を委員として40回派遣した。

また、他機関の研究所等からの依頼に応じて、残留農薬分析等についての受入研修等を10回（63名参加）行った。

イ 提供内容の充実

○ 外部の有識者を含めた情報提供業務検討・評価委員会を平成20年3月に開催し、平成19年度の情報提供業務及び平成20年度の計画について評価及び検討を行った結果、子供にもわかりやすい情報提供をすべきとの指摘を受け、平成20年度の改善として、ホームページ上の子供向けのわかりやすい情報コンテンツの拡充を図ることとした。

○ 消費者相談において消費者被害情報を受け付けた場合には、保健所、農林水産省、国民生活センター等に連絡する等、迅速に対応した。

○ 相談業務に従事する職員に対して情報提供業務担当者研修を6回（29名）実施した。

○ 受け付けた相談を整理し、またホームページに掲載している相談事例集の内容を精査した結果、「企業相談事例集」に掲載している有機農産物の格付実績を平成18年度の実績に更新するとともに、「食のQ&A」に消費者相談の事例7件を追加掲載した。

<p>さらに、こうした取組の質的な向上を図るため、アンケート調査等の実施により、提供した情報や提供方法について顧客満足度を測定し、5段階評価で3.5以上の顧客満足度を確保する。</p>	<p>ウ 以上の取組により、アンケート調査結果等により顧客満足度を測定し、5段階評価で中期目標期間中の各事業年度を通じて3.5以上の顧客満足度を目標とし、個別の講習会等において、顧客満足度が3.5未満の場合には、情報提供の方法の見直し等、必要な改善措置を講ずる。</p>	<p>ウ 情報提供業務の改善を図るため、次の業務において提供した情報や提供方法の顧客満足度をアンケート調査等により測定する。</p> <p>また、個別の講習会等において顧客満足度が5段階評価で3.5未満の場合には、情報提供の方法の見直し等の必要な改善措置を速やかに講ずる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各種講習会及び研修会 ・講師派遣 ・ホームページ ・メールマガジン ・広報誌 	<p>○ 消費者相談対応マニュアル及び企業相談対応マニュアルの充実を図るため見直しを行ったが、改正を要する事項はなかった。</p> <p>ウ 提供情報の的確性、分かり易さ等の向上に資するため、講習会、研修会、講師派遣、ホームページ、広報誌等の業務について、利用者に対するアンケート調査による効果測定を実施した。顧客満足度（5段階評価）は、次のとおりであった。</p> <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td>・各種講習会及び研修会</td> <td></td> </tr> <tr> <td> 食品品質等知見活用講習会</td> <td style="text-align: right;">3.9</td> </tr> <tr> <td> 食品等リスク情報共有化講習会</td> <td style="text-align: right;">4.0</td> </tr> <tr> <td> 地方公共団体職員等研修会</td> <td style="text-align: right;">4.4</td> </tr> <tr> <td> 技術講習会</td> <td style="text-align: right;">3.7</td> </tr> <tr> <td> 消費者被害防止講習会</td> <td style="text-align: right;">3.9</td> </tr> <tr> <td>・講師派遣</td> <td></td> </tr> <tr> <td> 派遣講習</td> <td style="text-align: right;">4.8</td> </tr> <tr> <td> 依頼講習</td> <td style="text-align: right;">4.7</td> </tr> <tr> <td>・ホームページ</td> <td style="text-align: right;">3.9</td> </tr> <tr> <td>・メールマガジン</td> <td style="text-align: right;">4.1</td> </tr> <tr> <td>・広報誌</td> <td style="text-align: right;">3.9</td> </tr> </table> <p>また、個別の講習会等において顧客満足度が3.5未満であった5件の講習会及び講師派遣については原因究明を行い、今後は事前に対象者のレベル・会場の状況等を十分に把握しておく等の改善処置を講ずることとした。</p>	・各種講習会及び研修会		食品品質等知見活用講習会	3.9	食品等リスク情報共有化講習会	4.0	地方公共団体職員等研修会	4.4	技術講習会	3.7	消費者被害防止講習会	3.9	・講師派遣		派遣講習	4.8	依頼講習	4.7	・ホームページ	3.9	・メールマガジン	4.1	・広報誌	3.9
・各種講習会及び研修会																											
食品品質等知見活用講習会	3.9																										
食品等リスク情報共有化講習会	4.0																										
地方公共団体職員等研修会	4.4																										
技術講習会	3.7																										
消費者被害防止講習会	3.9																										
・講師派遣																											
派遣講習	4.8																										
依頼講習	4.7																										
・ホームページ	3.9																										
・メールマガジン	4.1																										
・広報誌	3.9																										
<p>② 肥料及び農薬の登録結果、食品、肥料、農薬、飼料及び飼料添加物並びに土壤改良資材中の有害な物質等の分析結果等については、消費者、生産者及び事業者への情報提供に資する観点から、データベース化を図る。</p> <p>このうち、肥料の登録情報</p>	<p>② 肥料及び農薬の登録結果、食品、肥料、農薬、飼料及び飼料添加物並びに土壤改良資材中の有害な物質等の分析結果等については、消費者、生産者及び事業者への情報提供に資する観点から、農業登録情報検索システム、センター業務情報化システム等によりデータベース化を図る。</p> <p>このうち、肥料の登録情報に</p>	<p>② 肥料及び農薬の登録結果、食品、肥料、農薬、飼料及び飼料添加物並びに土壤改良資材中の有害な物質等の分析結果等については、消費者、生産者及び事業者への情報提供を効果的に行うため、検査等結果をデータベース化するとともに、必要な改善を図る。</p> <p>また、肥料の登録情報については、</p>	<p>② 肥料及び農薬の登録結果、食品、肥料、農薬、飼料及び飼料添加物並びに土壤改良資材中の有害な物質等の分析結果等について、検査等結果をデータベース化するとともに、各データベースについて必要な改善を図ることにより、消費者、生産者及び事業者への効果的な情報提供に努めた。</p> <p>肥料の原材料等消費者の関心の高い情報を迅速かつ確実に</p>																								

<p>等については、登録後30業務日以内にデータベース化する。</p>	<p>については、登録後30業務日以内にこれをデータベース化し、要望に応じてその原材料等消費者の関心の高い情報を迅速かつ確実に提供する。</p>	<p>登録後30業務日以内にこれをデータベース化し、要望に応じてその原材料等消費者の関心の高い情報を、迅速かつ確実に提供する。</p>	<p>提供することを目的として、肥料登録1,133件について、登録後30業務日以内に登録情報等のデータベース化を行うとともに、ホームページにデータ提供している旨を掲載し、関係者からの要望に応じてデータを223件提供した。</p>
<p>③ 肥料、農薬、飼料及び飼料添加物並びに土壤改良資材の安全性等の確保に資するため、都道府県等の職員、検査関係機関、製造業者等に対して、法令に関する知識又はこれらの資材の検査技術等に関する研修又は講師の派遣を行う。特に、</p> <p>ア 農薬については、農薬の検査に係る技術的協力及び農薬取締法第2条第1項に規定する特定農薬の指定に係る検討等について、国からの要請に対し、適切に対応する。</p> <p>イ 飼料については、飼料製造管理者講習会を2年に1回以上</p>	<p>③ 肥料、農薬、飼料及び飼料添加物並びに土壤改良資材の安全性等の確保に資するため、研修又は講師の派遣を行う。このうち、</p> <p>ア 肥料の取締りを行う都道府県職員、生産業者等を対象とした法令に関する知識又は肥料の検査技術等に関する研修及び講師の派遣については毎事業年度20回以上実施する。</p> <p>イ 飼料の検査関係機関又は飼料製造業者等の担当者に対する法令に関する知識又は試験技術等の研修については、毎事業年度10回以上実施する。さらに、</p> <p>ウ 農薬取締法第2条第1項に規定する特定農薬の指定に係る検討については、農林水産大臣からの指示に基づく期限内に適切に報告する。</p> <p>エ 飼料製造管理者講習会については、2年に1回以上実施すると</p>	<p>③ 肥料、農薬、飼料及び飼料添加物並びに土壤改良資材の安全性等の確保に資するため、研修又は講師の派遣を行う。このうち、</p> <p>ア 肥料の取締りを行う都道府県職員の検査技術の向上、生産業者等における肥料の安全性管理技術の向上等を図るため、法令に関する知識又は肥料の検査技術等に関する研修及び講師の派遣を合わせて20回以上実施する。</p> <p>イ 飼料の検査関係機関又は飼料製造業者等の担当者に対して法令に関する知識又は試験技術等の研修を10回以上実施する。</p> <p>ウ 農薬取締法第2条第1項に規定する特定農薬の指定に係る検討については、農林水産大臣からの指示に基づく期限内に適切に行いその結果を報告する。</p> <p>エ 飼料製造管理者講習会の受講希望者数を勘案して、必要に応じ実施する。</p>	<p>③ 研修又は講師の派遣を次のとおり行うことにより、肥料、農薬、飼料及び飼料添加物並びに土壤改良資材の安全性等の確保に努めた。</p> <p>ア 農薬の安全性等の確保に資するための講師派遣について、東京都、京都府、(社)日本植物防疫協会ほか8団体、農林水産省横浜植物防疫所などから延べ16件(20名)の講師派遣依頼があり、そのすべてに対応した。 なお、土壤改良資材に関する製造業者及び分析業者等を対象とした研修又は講師派遣の要請はなかった。</p> <p>イ 都道府県職員、生産業者等に対して法令に関する知識又は肥料の検査技術等に関する研修及び講師の派遣を計31回(法令関係21回(1,013名)及び検査技術関係10回(193名))実施し、肥料の取締りを行う都道府県職員の法令に関する知識及び検査技術の向上と、生産業者等における肥料の安全性管理技術の向上等を図った。</p> <p>ウ 飼料の検査関係機関又は飼料製造業者等の担当者に対して法令に関する知識又は飼料の試験技術等に関する研修を30回(法令関係26回(943名)及び試験技術等の研修4回(15名))実施した。 また、都道府県等の要請に応じ、飼料の安全性の確保等に関する各種会議(19回)へ講師を延べ23名派遣した。</p> <p>エ 平成19年度においては該当がなかった。</p> <p>オ 受講希望者調査を実施し、その結果を基に飼料製造管理者資格取得講習会を1回(93名)行った。</p>

<p>実施するとともに、国、関連団体等が行う事業計画検討委員会等へ参画し、専門的・技術的見地からの協力をを行う。</p> <p>なお、研修等を実施した際には、必要に応じて研修の受講者等に対して、研修等の内容に関するアンケートを実施し、その結果を評価・分析することにより、研修等の内容の改善を図る。</p>	<p>とともに、国、関連団体等が行う事業検討委員会等への参画については、専門的・技術的見地からの協力をを行う。</p> <p>なお、研修等を実施した際には、必要に応じて研修受講者、会議主催者等に対して、研修又は講義の内容についてアンケート等を実施し、その結果を評価・分析することにより、研修又は講義の内容の改善を図る。</p>	<p>なお、必要に応じて研修受講者、会議主催者等に対して研修等の内容に関するアンケートを実施し、その結果を評価・分析することにより、研修又は講義の内容の改善を図る。</p>	<p>また、国、関連団体等が行う事業検討委員会等へ延べ83回参画し、専門的・技術的見地からの協力をを行った。</p> <p>研修等について適宜アンケートを実施し、その結果を基に必要な改善を図った。なお、顧客満足度（5段階評価）は3.7以上であった。</p>
<p>(3) 窓口業務の全国における実施</p> <p>肥料取締法、農薬取締法、飼料安全法等の法令に基づく届出及び登録証等の交付に係る窓口業務については、事業者等の利便性を向上させるため、本部及び全国の地方組織において処理する。また、消費者等からの食品表示に関する相談窓口を、全国の地方組織に設置する。</p>	<p>(3) 窓口業務の全国における実施</p> <p>窓口業務を全国で実施するため、次に掲げる取組を実施する。</p> <p>① 関係法令に基づく事務処理内容に係る所要の研修、食品表示に関する研修等を行う。</p> <p>② ホームページ等を活用して関係団体や関係者への周知を図る。</p> <p>③ 窓口業務に係る関係規程の整備、対応マニュアルの作成、職</p>	<p>(3) 窓口業務の全国における実施</p> <p>肥料取締法、農薬取締法、飼料安全法等の法令に基づく届出及び登録証等の交付に係る窓口業務並びに消費者等からの相談窓口業務を全国で実施するため、次に掲げる取組を実施する。</p> <p>① 関係法令に基づく事務処理内容に係る所要の研修、食品表示に関する研修等を行う。</p> <p>② 関係団体や関係者の利便性の向上等について、ホームページ等を活用して周知を図る。</p> <p>③ 窓口業務に係る関係規程、対応マニュアルの作成・見直しを行うととも</p>	<p>(3) 窓口業務の全国における実施</p> <p>次に掲げる取組を行うことにより、肥料取締法、農薬取締法、飼料安全法の法令に基づく届出及び登録証等の交付に係る窓口業務並びに消費者等からの相談窓口業務を全国で実施した。</p> <p>① 本部及び各地域センターの全窓口業務担当者に対し、関係法令に基づく事務処理内容に係る所要の研修として「窓口業務担当者研修」を10回（40名）実施するとともに、相談対応業務に従事する職員に対し、食品表示、肥料、飼料、農薬等の基礎知識に関する研修として「情報提供業務担当者研修」を6回（29名）実施した。</p> <p>② 次の届出の受付や登録証等の交付及び消費者等からの相談をすべての窓口で対応する旨をホームページ等を活用して周知した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・肥料登録証・仮登録証の交付 ・農薬登録票の交付 ・農薬取締法第6条第2項の規定に基づく農薬登録申請書記載事項の変更に係る届出 ・飼料製造管理者届出事項変更届出のうち飼料又は飼料添加物の種類及び名称の変更に係る届出 <p>③ 窓口業務に係る関係規程、対応マニュアルを作成した。なお、窓口業務に関する苦情等はなかった。</p>

	<p>員から成る委員会において苦情等があった場合の改善方策等の検討等を行うことにより、継続的に業務運営の改善を図る。</p>	<p>に、苦情等があった場合には、必要に応じ業務改善委員会（仮称）において、改善方策等の検討等を行う。また、処理結果等については、センター全体で情報を共有し、マネジメントレビューに反映させるものとする。</p>	
<p>(4) 検査・分析能力の継続的向上 検査等業務の実施に当たり、検査分析機関としての国際基準を導入するとともに、統合によるスケールメリットを活かし、</p> <p>① 分析の精度管理</p> <p>② 分析精度を向上させるための分析手法の開発及び妥当性の確認</p>	<p>(4) 検査・分析能力の継続的向上 検査分析に係る能力及び信頼性の向上を図るため、分析機関としての国際標準であるISO/IEC17025及びGLPの考え方による業務管理体制の確立、維持・改善を図り、検査分析業務に関する基準文書に基づき、分析機器及び試薬等の維持管理、記録等を適正に行うとともに、統合によるスケールメリットを活かし、</p> <p>① ISO/IEC17025（しょうゆアルコール分測定）の認定を維持するため、マニュアルに基づく適正な実験室の管理や分析を行うとともに、認定範囲の拡大を検討する。</p> <p>② 分析の精度管理のため、外部機関又はセンター主催による実験室間精度管理を毎事業年度5回以上実施し、その結果に基づき必要な措置を講ずる。</p> <p>③ 分析手法の開発又は改良については、中期目標期間中に、有害成分に関する分析方法、基準・規格の改善に対応する分析方法等30課題以上実施するとともに</p>	<p>(4) 検査・分析能力の継続的向上 職員の検査分析技術力の維持・向上を図り、検査分析結果の信頼性を確保するため、センターが行う検査分析業務全般について、ISO/IEC17025及びGLPの考え方に基づく分析試験業務管理を導入するため、引き続き関係規程、管理手順書等を整備するとともに、次に掲げる取組を実施する。</p> <p>① しょうゆのアルコール分の測定及び遺伝子組換え大豆の定性分析について、ISO/IEC17025の要求事項への適合性を維持するとともに、システムの継続的な改善に取り組む。さらに、認定範囲の拡大について検討する。</p> <p>② 分析精度の確認のため、外部機関又はセンター主催による実験室間精度管理を5回以上実施するとともに、不満足な結果であった場合には、原因を究明のうえ再試験、当該実験室の担当職員に対する教育訓練等の必要な措置を講ずる。</p> <p>③ 分析手法の開発又は改良については、地方組織を活用して、有害成分に関する分析方法、基準・規格の改善に対応する分析方法等5課題以上を実施し、併せて妥当性の確認を行う。</p>	<p>(4) 検査・分析能力の継続的向上 次に掲げる取組を行うことにより、職員の検査分析能力の維持・向上を図り、検査分析結果の信頼性を確保に努めた。</p> <p>分析試験業務運営委員会を1回、本部及び各地域センターで分析試験業務管理委員会を33回開催し、分析試験業務内部監査の結果をもとにした分析試験業務に係るマニュアル類の改正及び機器整備等、分析試験業務の管理に必要な事項を審議し決定した。</p> <p>① しょうゆのアルコール分の検査分析及び遺伝子組換え大豆の定性分析について、ISO/IEC17025の要求事項への適合性を維持するとともに、品質システムの継続的な改善に取り組み、認定継続の承認を受けた。なお、認定範囲の拡大について検討した結果、平成19年度においては、取得済みの認定について品質システムの充実を図ることとし、拡大しないこととした。</p> <p>② センター主催による実験室間精度管理を5回実施し、一部を除き満足な結果が得られた。なお、満足な結果が得られなかったセンターに対しては、原因究明のため分析機器及び分析方法等について確認する等の必要な是正処置を実施した。</p> <p>③ 飼料及び飼料添加物の分析法の公定法化に資するため分析法10課題（20成分）について開発又は改良するとともに、妥当性の確認を行い、結果を取りまとめた。</p>

に、妥当性の確認については、地方組織を活用する。

③ 分析技術及び分析能力を向上させるための研修及び技能試験

④ 分析技術及び分析能力の向上を図るため、分析担当者に対して分析技術に関する研修を毎事業年度20回以上行うとともに、外部機関又はセンターが主催する技能試験を毎事業年度5回以上実施し、検査に係る分析に従事する職員を参加させる。

④ 高度な技術を必要とする分析等を、個々の検査等業務におけるノウハウ・知見を共有化しつつ、組織横断的に一体的に実施し、検査・分析能力を継続的に向上する。

なお、①は実験室間精度管理を毎事業年度5回以上、②の分析手法の開発及び改良は中期目標期間中に30課題、③の研修は毎事業年度20回、③の技能試験は毎事業年度5回以上、実施する。

また、これらの取組の実施に当たっては、センター全体で検査・分析業務を平準化させるよう留意するものとする。

⑤ 高度な技術を必要とするダイオキシン類やDNA等の分析については、一層の技術力の向上を図るため、必要な研修を実施し、専門スタッフを育成する。

⑥ 試験研究機関との共同研究や人事交流等を実施し、計画的な人材の育成を行う。

また、これらの取組の実施に当たっては、月別の検査業務量の平準化の観点から、実施時期を適切に設定する。

④ 分析技術及び分析能力の向上を図るため、分析担当者に対して分析技術に関する研修を20回以上行うとともに、外部機関又はセンターが主催する技能試験を5回以上実施し、検査に係る分析に従事する職員を参加させる。なお、技能試験の結果が不満足であった場合には、原因を究明のうえ再試験、当該職員に対する教育訓練等の必要な措置を講ずる。

⑤ 高度な技術を必要とするダイオキシン類やDNA等の分析については、一層の技術力の向上を図るための研修を実施し、専門スタッフを育成する。

⑥ 試験研究機関との共同研究や人事交流等を実施し、計画的な人材育成を行う。

⑦ 上記①から⑥の取組の実施に当たっては、月別の検査業務量の平準化の観点から、適切な実施時期を設定する。

④ 分析担当者に対して分析技術に関する研修を次のとおり35回（233名）実施した。

・分析技術研修	19回（51名）
・分析技術向上研修	16回（182名）

また、分析試験業務以外の業務に関する専門的な知識の習得を図るための研修を56回（361名）実施した。

外部機関が主催する技能試験を14回、センターが主催する技能試験を8回、合計22回実施し、検査に係る分析に従事する職員（延べ206名）に参加させ、一部を除き満足な結果が得られた。なお、満足な結果が得られなかった試験者に対して原因究明を行った結果、センターで使用している分析法（検量線の作成方法）に問題があることが判明したため、分析法を変更する等の必要な措置を実施した。

⑤ 高度な技術を必要とするDNA等の分析については、一層の技術力の向上を図るための研修をDNA分析に従事する職員に対して1回（2名）実施し、専門スタッフを育成した。

⑥ 調査研究の年度計画に基づき試験研究機関との共同研究を18課題実施するとともに、共同研究のための人事交流として次のとおり職員を駐在させ、人材育成を行った。

・食品総合研究所	2名
・中央水産研究所	1名

⑦ 上記①から⑥の取組の実施に当たっては、月別の業務量の平準化の観点から実施時期の調整を行った。

<p>2 生産段階における安全性等の確保に関する業務</p> <p>(1) 肥料関係業務</p> <p>① 肥料の検査等業務</p> <p>ア 肥料の登録又は仮登録の申請に係る調査</p> <p>(7) 調査結果の報告については、肥料の安全性の確保の効率的かつ効果的な推進に資するため、その申請に係る調査の質を確保しつつ、業務の効率化、職員の資質の向上等を図ることにより、中期目標期間中に、農林水産大臣の指示から報告までに要する期間を、現行の目標期間（新規登録申請：30日）を5%削減する。</p>	<p>2 生産段階における安全性等の確保に関する業務</p> <p>(1) 肥料関係業務</p> <p>① 肥料の検査等業務</p> <p>ア 肥料の登録又は仮登録の申請に係る調査</p> <p>(7) 再生資源の利用促進により、汚泥等有害成分を含むおそれの高い肥料の登録申請数が依然として高水準で推移すると見込まれる中で、肥料の安全性の確保と食の安全の効率的かつ効果的な推進に資するため、その申請に係る調査の質を確保しつつ、中期目標期間中に、当該調査結果の報告までの期間を、現行の目標期間（新規登録申請：30日）に対して5%削減することができるよう、次に掲げる事項を推進する。</p> <p>a 登録申請マニュアル及び登録Q&Aの改訂・配布並びにこれらのホームページへの掲載を行うとともに、職員の問い合わせ対応能力の向上を図ることにより、肥料の登録申請に関する問い合わせ事務の合理化を図る。</p> <p>b 最新の分析・鑑定手法の導入に努め、分析・鑑定業務の効率化を図る。</p> <p>c 肥料用原材料のデータベースを、LANを用いて本部及び地方組織間で共有化する</p>	<p>2 生産段階における安全性等の確保に関する業務</p> <p>(1) 肥料関係業務</p> <p>① 肥料の検査等業務</p> <p>ア 肥料の登録又は仮登録の申請に係る調査</p> <p>(7) 再生資源の利用促進により、汚泥等有害成分を含むおそれの高い肥料の登録申請数が依然として高水準で推移すると見込まれる中で、肥料の安全性の確保と食の安全の効率的かつ効果的な推進に資するため、その申請に係る調査の質を確保しつつ、中期目標期間中に、当該調査結果の報告までの期間を、現行の目標期間（新規登録申請：30日）に対して5%削減することができるよう、次に掲げる事項を推進する。</p> <p>a 登録申請に関する問い合わせ事務の合理化を図るため、登録申請マニュアル及び登録Q&Aを改訂し要請に基づき配布するとともに、ホームページに掲載した登録申請マニュアル等の活用促進に努める。</p> <p>また、併せて接遇研修等を実施し、職員の問い合わせ対応能力の向上を図る。</p> <p>b 分析・鑑定業務の効率化等を図るため、最新の分析・鑑定手法に関する文献・報文の収集を行う。</p> <p>c 新たな製法による銘柄の登録申請があった場合には、LAN等を用いて本部及び地方組織で情報を共</p>	<p>2 生産段階における安全性等の確保に関する業務</p> <p>(1) 肥料関係業務</p> <p>① 肥料の検査等業務</p> <p>ア 肥料の登録又は仮登録の申請に係る調査</p> <p>(7) 登録申請1,133件に係る調査の質を確保しつつ、結果報告に要する期間を削減するため、次に掲げる事項に取組み、年間平均で27.7日と目標期間に対して7.7%削減し、肥料の安全性の確保と食の安全の効率的かつ効果的な推進を図った。</p> <p>a 登録申請マニュアル及び登録Q&Aを改訂し要請に基づき配布するとともに、ホームページに肥料登録申請手続きの概要及び諸手続き等を掲載し、最新情報の活用を促進した。</p> <p>また、窓口業務に係る職員10名に対して接遇研修を実施し、問合せ対応能力の向上を図った。なお、平成19年度の問合わせ件数は6,928件であった。</p> <p>b 日本土壤肥料学会等9件に延べ16名参加し、最新の分析・鑑定手法に関する文献・報文の収集を行った。</p> <p>c 新規に登録申請があった1,133件について、登録申請書を電子データ（PDF）化し、インターネットVPNを用いて事務所間で情報の共有化を実施した。</p>
---	---	--	--

<p>(イ) 業務運営の改善を図るため、肥料の登録等の申請者に対するアンケートを実施し、職員の窓口対応等についての顧客満足度を測定し、5段階評価で3.5以上の顧客満足度を中期目標期間中に達成する。</p> <p>(ウ) 仮登録肥料に係る肥効試験について申請者の利便等に供するため、原則として1年以内に試験結果を取りまとめ、農林水産大臣の設定する肥料の公定規格に関する基礎資料として農林水産大臣に報告する。</p>	<p>ることにより、登録申請時における安全性の可否の判断の迅速化を図る。</p> <p>(イ) 業務運営の改善を図るため、肥料の登録等の申請者に対するアンケートをその都度実施し、職員の窓口対応等についての顧客満足度を測定し、5段階評価で3.5以上の顧客満足度を中期目標期間中に達成する。 このため、現状の問題点とアンケート内容の改善策を網羅した業務運営改善マニュアル(仮称)を作成し、担当職員に配布する。 また、毎事業年度、担当者の研修会を開催するとともに、必要に応じてマニュアルの内容の見直しを行う。</p> <p>(ウ) 仮登録肥料に係る肥効試験について申請者の利便等に供するため、原則として1年以内に試験結果を取りまとめ、農林水産大臣の設定する肥料の公定規格に関する基礎資料として農林水産大臣に報告するものとし、当該試験について、施肥設計、土壌・気象条件等を考慮し、計画的な試験の推進により、一層の迅速化を図るものとする。</p>	<p>有化することにより、登録申請時における安全性の可否の判断の迅速化を図るとともに、肥料用原材料のデータベースの作成を引き続き行う。</p> <p>(イ) 業務運営の改善を図るため、肥料の登録等の申請者に対するアンケートをその都度実施し、職員の窓口対応等についての顧客満足度を測定し、5段階評価で3.5以上の顧客満足度を中期目標期間中に達成するため、現状の問題点とアンケート内容の改善策を網羅した肥料登録業務運営改善マニュアルを作成し、担当職員に配布する。 また、担当者の研修会を開催するとともに、必要に応じてマニュアルの内容の見直しを行う。</p> <p>(ウ) 仮登録肥料に係る肥効試験については、施肥設計、土壌条件等を考慮した計画的な試験の推進により、一層の迅速化を図り、本事業年度に開始した試験について、原則として1年以内に試験結果を取りまとめ、20年度末までに農林水産大臣に報告することができるようにする。</p>	<p>また、新たな製法の肥料の原料や材料のデータベース化を引き続き行い、原料47件、材料151件を集積した。</p> <p>(イ) 登録申請窓口に来所した申請者等に対し、職員の窓口対応等についてアンケート調査を四半期毎に実施した結果、平成19年については368件の回答があり、その結果は5段階評価で3.9であった。 また、担当者の研修会を開催するとともに、「肥料登録業務運営改善マニュアル」を見直し、肥料登録申請等の業務における窓口対応の質の向上に努めた。</p> <p>(ウ) 仮登録の申請で平成19年度内に試験結果を取りまとめるべきものはなかった。 なお、平成19年度に仮登録肥料の申請を4件受付けた。</p>
<p>イ 収去品の検査 (7) 有害成分を含む肥料の流</p>	<p>イ 収去品の検査 (7) 有害成分を含む肥料の流通</p>	<p>イ 収去品の検査 (7) 有害成分を含む肥料の流通による</p>	<p>イ 収去品の検査 (7) 収去品の検査について、次のとおり成分の内容に応じた</p>

通による被害の発生防止に資するため、成分の内容に応じて収去から分析結果を得るまでの標準処理期間を定め、中期目標期間中に当該標準処理期間を10%削減する。

による被害の発生防止に資するため、成分の内容に応じて収去から分析結果を得るまでの標準処理期間を次のとおり定め、中期目標期間中に当該標準処理期間をそれぞれ10%削減する。

- a 人畜に有害な成分
検査週後 10業務日
- b その他の有害な成分
検査週後 20業務日
- c 有害な成分以外の成分
検査週後 30業務日

被害の発生防止に資するため、成分の内容に応じて収去から分析結果を得るまでの標準処理期間を次のとおり定めるとともに、中期目標期間中に当該標準処理期間をそれぞれ10%削減する。

なお、「人畜に有害な成分」としては、特定普通肥料が指定されるまでの間、ひ素、カドミウム、水銀及び鉛を暫定的に定める。

- a 人畜に有害な成分
検査週後 10業務日
- b その他の有害な成分
検査週後 20業務日
- c 有害な成分以外の成分
検査週後 30業務日

区分けを行い、標準処理期間内に処理することにより、有害成分を含む肥料の流通による被害の防止に努めた。

- a 人畜に有害な成分として暫定的に設定した、ひ素、カドミウム、水銀及び鉛の4成分について2,080点の検査を行い、いずれの成分も検査週後の10業務日以内に結果を取りまとめた。
- b その他の有害な成分として、ひ素、カドミウム、水銀及び鉛以外の普通肥料の公定規格に定める有害成分について2,466点の検査を行い、いずれの成分も検査週後の20業務日以内に結果を取りまとめた。
- c 上記a及びb以外の成分について7,498点の検査を行い、いずれの成分も検査週後の30業務日以内に結果を取りまとめた。

成分の内容に応じて収去から分析結果を得るまでの期間を中期目標期間中に削減するため、汚泥肥料中の重金属(カドミウム、鉛、ニッケル及びクロム)の分析法について改良を行うとともに、それらの方法における信頼性の確保の調査・検討を実施し、分析・鑑定検査の迅速化に努めた。

(4) 分析結果の内部監査等を含む精度管理の向上を図るための取組を実施する。

(4) 分析結果の内部監査等を含む精度管理の向上を図るため、信頼性保証体制の構築等、信頼性の確保に関するシステムを整備するとともに、次に掲げる取組を行う。

- a 内部監査、マネジメントレビュー等、評価体制の整備

- b センター内の測定結果の評価方法等、内部精度管理に関する手順書の見直し・整備

- c 文書管理及び記録管理に関する手順書の見直し・整備

(4) 分析結果の内部監査等を含む精度管理の向上を図るため、信頼性保証体制の構築等、信頼性の確保に関するシステムを整備するとともに、次に掲げる取組を実施する。

- a 内部監査、マネジメントレビュー等、評価体制を整備し、内部監査、外部精度管理、内部品質管理等の結果を評価する。

- b センター内の測定結果の評価方法等、内部精度管理に関する手順書の見直し・整備のため、試験実施手順書に付随する標準作業書、試験機器管理手順書、標準物質管理手順書及び試験品取扱手順書を作成する。

- c 整備した文書管理手順書及び記録管理手順書に従って、文書及び

(4) 分析結果について、次に掲げる事項を実施することにより内部監査等を含む精度管理の向上を図った。

- a 内部監査手順書を作成し、1センターの内部監査及びマネジメントレビューを行い、内部監査、外部精度管理、内部品質管理等の結果を評価した。

- b 内部精度管理に関する肥料試験品質マニュアル及び文書管理手順書を見直し、試験実施手順書に付随する重金属及び水銀試験標準作業書、試験機器管理手順書、標準物質管理手順書及び試験品取扱手順書を作成した。

- c 整備した文書管理手順書及び記録管理手順書に従って、文書及び記録の作成、登録、保管等を実施した。

	備	記録の作成、登録、保管等を実施する。	
<p>ウ 肥料及びその原料の分析・鑑定等の受託</p> <p>有害成分を含む肥料の生産・流通の防止に資するため、都道府県、農業者等からの依頼を受けて、肥料等の有害成分に係る分析を実施することとし、センターにおいて検査の内容に応じて標準処理期間内に適切に処理する。</p>	<p>ウ 肥料及びその原料の分析・鑑定等の受託</p> <p>有害成分を含む肥料の生産・流通の防止に資するため、都道府県、農業者等からの肥料等の有害成分等の依頼分析については、ア、イ及びオ並びに③の業務に支障のない範囲内で実施することとし、次に掲げる標準処理期間内に適切に処理する。</p> <p>(7) 化学分析（(イ)を除く。） 30業務日</p> <p>(イ) ダイオキシン類分析 60業務日</p> <p>(ウ) 栽培試験（水稲等栽培期間の長い作物を用いた試験を除く。） 90業務日</p> <p>(エ) 鑑定（肉骨粉等のエライザ法による場合にあつては、化学分析として扱う。） 20業務日</p> <p>また、標準処理期間内に上記の依頼分析を適切に処理するため、次に掲げる取組を行う。</p> <p>(7) 専門技術的知見の必要性が低い作業等に係るアウトソーシングの推進により、検査業務全体の合理化を図る。</p> <p>(イ) 最新の分析・鑑定手法の導入に努め、分析・鑑定業務の効率化を図る。</p> <p>(ウ) 稟議手続の合理化による事務処理の効率化を図る。</p>	<p>ウ 肥料及びその原料の分析・鑑定等の受託</p> <p>有害成分を含む肥料の生産・流通の防止に資するため、都道府県、農業者等からの肥料等の有害成分等の依頼分析については、業務に支障のない範囲内で実施することとし、次に掲げる標準処理期間内に適切に処理する。</p> <p>(7) 化学分析（(イ)を除く。） 30業務日</p> <p>(イ) ダイオキシン類分析 60業務日</p> <p>(ウ) 栽培試験（水稲等栽培期間の長い作物を用いた試験は除く。） 90業務日</p> <p>(エ) 鑑定（肉骨粉等のエライザ法による場合にあつては、化学分析として扱う。） 20業務日</p> <p>また、標準処理期間内に上記の依頼分析を適切に処理するため、次に掲げる取組を実施する。</p> <p>(7) 専門技術的知見の必要性が低い作業等に係るアウトソーシングの推進により、検査業務全体の合理化を図る。</p> <p>(イ) 分析・鑑定手法の効率化等を図るため、最新の分析・鑑定手法の文献・報文の収集及び改良の取組を実施する。</p> <p>(ウ) 稟議手続の合理化による事務処理の効率化を図る。</p>	<p>ウ 肥料及びその原料の分析・鑑定等の受託</p> <p>都道府県からの依頼分析を1件（窒素全量の分析）実施するとともに、標準処理期間内に処理し、有害成分を含む肥料の生産・流通の防止に努めた。</p> <p>また、標準処理期間内に依頼分析を適切に処理するため、次に掲げる事項を実施した。</p> <p>(7) ICP質量分析法用標準液の調製をアウトソーシングして業務の合理化を図った。</p> <p>(イ) 日本土壤肥料学会等9件に延べ16名参加し、最新の分析・鑑定手法に関する文献・報文の収集を行い、分析・鑑定業務の効率化を図った。</p> <p>(ウ) 決裁等の事務の簡素化による事務処理の効率化を図った。</p>

<p>エ 公定規格の改正等に資する調査研究業務</p> <p>肥料の安全性の確保に資するため、肥料に含まれる有害成分の評価手法について、毎事業年度、適正な評価を図りつつ、有害成分を含有する肥料の連用による有害成分の土壌蓄積等、3課題を設定し、調査研究の結果を取りまとめて公表するとともに、速やかに検査・分析業務に導入する。</p>	<p>エ 公定規格の改正等に資する調査研究業務</p> <p>調査研究の実施に当たっては、必要に応じて4のリスク管理のための有害物質の分析業務等と連携を図りつつ、次のとおり行う。</p> <p>(7) 人畜に被害を生ずるおそれのある農産物の生産を防止し、食品の安全性の確保を万全なものとするため、肥料の施用による農産物への安全性の適正評価手法を確立し、もって肥料の安全性規格基準等の改正に資するため、カドミウム含有肥料等の連用による土壌へのカドミウムの蓄積等、肥料の安全性に関する課題を中心に調査を行い、毎事業年度開催される外部の有識者を構成員とする委員会の評価を踏まえ、適正な見直しを図りつつ、中期目標期間中に、中間報告を含め、次に掲げる3課題の調査結果を取りまとめて公表するとともに、農林水産省に報告する。</p> <p>a 有害成分を含有する肥料の連用によるカドミウム等有害成分の土壌への蓄積及び作物の吸収に関する調査</p> <p>b 有害成分の土壌中における変化及び作物吸収の相関に関する調査</p> <p>c 肥料の原料に使用される</p>	<p>エ 公定規格の改正等に資する調査研究業務</p> <p>(7) 人畜に被害を生ずるおそれのある農産物の生産を防止し、食品の安全性の確保を万全なものとするため、肥料の施用による農産物への安全性の適正評価手法を確立し、もって、肥料の安全性規格基準等の改正に資するため、次に掲げる調査を実施する。</p> <p>a 汚泥肥料の連用によるカドミウム等の土壌への蓄積及び作物への吸収試験</p> <p>b カドミウムの土壌中における形態の変化に関する調査</p> <p>c 産業廃棄物中の有害物質の含有</p>	<p>エ 公定規格の改正等に資する調査研究業務</p> <p>(7) 人畜に被害を生じるおそれのある農産物の生産を防止し、食品の安全性確保を万全なものとするため、肥料施用による農産物への安全性の適正評価手法を確立し、もって、肥料の安全性規格基準等の改正に資するため、次に掲げる試験・調査を実施した。</p> <p>a 汚泥肥料の連用によるカドミウム等の土壌への蓄積、農作物への吸収試験として、大豆へのカドミウム等の吸収・残留試験を実施した。この成果を基に平成20年度も大豆を用いたカドミウム等の吸収・残留調査を行うこととしている。</p> <p>b カドミウムの土壌中における形態の変化に関する調査として、肥料を施用した土壌を培養し、培養日数毎の土壌中のカドミウム全量、有機結合態カドミウム、ク溶性カドミウム、水溶性カドミウムを分析し、その変化を調査した。この成果を基に平成20年度も引き続き当該調査を行うこととしている。</p> <p>c 産業廃棄物中の有害物質の含有実態調査として、建築</p>
---	--	---	---

	<p>おそれのある産業廃棄物等に含まれる有害物質に関する調査</p> <p>(イ) 肥料の安全性の確保に資するための肥料等に含まれる有害成分の評価方法や、検査の迅速化・信頼性の確保に資する観点及び最新の科学的知見に基づく分析・鑑定手法の調査・検討を実施し、毎事業年度開催される外部の有識者を構成員とする委員会の評価を踏まえ、適正な見直しを図りつつ、調査結果を取りまとめる。</p> <p>なお、農林水産省から要請のあった課題については、他の調査に優先して対応し、指定された期間内に報告する。</p>	<p>実態調査</p> <p>(イ) 肥料の安全性の確保に資するための肥料等に含まれる有害成分の評価方法や、検査の迅速化・信頼性の確保に資する観点から、次に掲げる調査・検討を実施する。</p> <p>a 汚泥肥料中の重金属の分析法の検討</p> <p>b 汚泥肥料中の窒素の定量法の比較検討</p> <p>c 肥料中の垂りん酸の定量法の検討</p> <p>d 肥料中のダイオキシンの抽出方法の比較検討</p> <p>また、調査を効率的かつ的確に実施するため、外部の有識者を構成員とする肥料等技術検討会を開催し、本事業年度に実施した調査結果の評価とともに、次の事業年度の調査計画の検討を行う。</p> <p>なお、農林水産省から要請のあった課題については、他の調査に優先して対応し、指定された期間内に報告する。</p>	<p>廃材を原料に使用したたい肥中の重金属、農薬等を2か月毎に8か月間調査した。この成果を基に平成20年度もたい肥中の重金属、農薬等の追跡調査を行うこととしている。</p> <p>(イ) 肥料の安全性の確保に資するための肥料等に含まれる有害成分の評価方法や、検査の迅速化・信頼性の確保に資する観点から、次に掲げる調査・検討を行った。</p> <p>a 汚泥肥料中のカドミウム、鉛、ニッケル及びクロムの分析法について、測定時間の短縮を目的とした改良を行い、あわせて分析法の信頼性の確保の調査・検討を実施した。</p> <p>b 汚泥肥料中の窒素の定量法について、燃焼法による窒素全量の定量法により測定時間の短縮を目的とした改良を行い、あわせて信頼性の確保の調査・検討を実施した。</p> <p>c 肥料中の垂りん酸の定量法について、王水酸化法を検討し測定時間の短縮を目的とした改良を行い、あわせて信頼性の確保の調査・検討を実施した。</p> <p>d 肥料中のダイオキシンの定量法の抽出方法について、高速溶媒抽出装置を用いて測定時間の短縮を目的とした改良を行った。</p> <p>また、学識経験者等7名による「肥料等技術検討会」を平成20年3月に開催し、調査結果の評価を行うとともに、平成20年度の調査計画の検討を行い、調査の効率的かつ確かな実施に努めた。</p>
<p>オ 牛海綿状脳症のまん延の防止に係る業務</p> <p>牛海綿状脳症のまん延を防止するため、肥料用の肉骨粉等の家畜用飼料への誤用・流</p>	<p>オ 牛海綿状脳症のまん延の防止に係る業務</p> <p>我が国において牛海綿状脳症が発生したことを踏まえ、牛海綿状脳症の発生の防止を</p>	<p>オ 牛海綿状脳症のまん延の防止に係る業務</p> <p>我が国において牛海綿状脳症が発生したことを踏まえ、牛海綿状脳症の発生の防止を万全なものとするた</p>	<p>オ 牛海綿状脳症のまん延の防止に係る業務</p> <p>我が国において牛海綿状脳症が発生したことを踏まえ、牛海綿状脳症の発生防止を万全なものとするため、</p>

<p>用の防止等の観点から、肥料原料用の肉骨粉等について製造基準適合確認検査を行い、製造基準に適合するものであると認めた製造事業場を公表する。</p>	<p>万全なものとするため、 (7) 牛の部位を原料とする肥料について、せき柱等が混合していないことに関し、農林水産大臣から確認検査の指示があったものについては、適切に検査を実施し、農林水産大臣からの確認書の交付状況を公表する。</p> <p>(4) 肥料用の肉骨粉等の家畜用飼料への誤用・流用防止等の観点から、肥料原料用の肉骨粉等の製造基準適合確認検査を行い、製造基準に適合するものであると認めた製造事業場を公表する。</p>	<p>め、 (7) 牛の部位を原料とする肥料について、せき柱等が混合していないことに関し、農林水産大臣から確認検査の指示があったものについては、適切に検査を実施し、農林水産大臣からの確認書の交付状況を公表する。</p> <p>(4) 肥料用の肉骨粉等の家畜用飼料への誤用・流用防止等の観点から、肥料原料用の肉骨粉等の製造基準適合確認検査を行い、製造基準に適合するものであると認めた製造事業場を公表する。</p>	<p>(7) 牛の部位を原料とする肥料について、せき柱等が混合していないことに関し、農林水産大臣から確認検査の指示があった製造事業場（5事業場）については、適切に製造基準適合確認検査を実施し、農林水産大臣からの確認書の交付状況をホームページで公表した。</p> <p>(4) 肥料用の肉骨粉等の家畜用飼料への誤用・流用防止等の観点から、肥料原料用の肉骨粉等の製造事業場（41事業場）に対して製造基準適合確認検査を実施し、その結果をホームページで公表した。</p>
<p>② ①の業務に附帯する業務 ア 標準試料の配布 有害成分を含む肥料の生産・流通の防止に資するため、肥料分析の正確性及び精度の維持に必要な標準試料を2年に1回作成して保管する。 また、標準試料の配布は、申請を受理した日から7業務日以内に行う。</p>	<p>② ①の業務に附帯する業務 有害成分を含む肥料の生産・流通の防止に資するため、肥料分析の正確性及び精度の維持に必要な標準試料を2年に1回作成して保管する。 また、標準試料の配布は、稟議手続の合理化、発送資材の常備等により、処理の迅速化を図り、申請を受理した日から7業務日以内に行う。 さらに、従来から作成している標準試料とは異なる成分の標準試料について、作成の可否を検討し、必要であれば同様に作成する。</p>	<p>② ①の業務に附帯する業務 有害成分を含む肥料の生産・流通の防止に資するため、肥料分析の正確性及び精度の維持に必要な標準試料として2種類の肥料認証標準物質を適切に保管する。 また、標準試料の配布は、稟議手続の合理化、発送資材の常備等により、処理の迅速化を図り、申請を受理した日から7業務日以内に行う。</p>	<p>② ①の業務に附帯する業務 有害成分を含む肥料の生産・流通の防止に資するため、肥料分析の正確性及び精度の維持に必要な標準試料として平成18年度に作成した2種類の標準試料（高度化成肥料及び普通化成肥料）の保管管理を適切に実施した。 また、標準試料の配布は、部内決裁の簡素化と発送資材の常備等、処理の迅速化を図り申請のあった38本について、申請を受理した日から7業務日以内に行った。</p>
<p>③ 肥料取締法に基づく立入検査、質問及び収去等業務 ア 肥料取締法に基づく立入検査については、有害成分を含むおそれの高い肥料の生産業</p>	<p>③ 肥料取締法に基づく立入検査、質問及び収去等業務 ア 肥料取締法に基づく立入検査については、有害成分を含むおそれの高い肥料の生産業者への</p>	<p>③ 肥料取締法に基づく立入検査、質問及び収去等業務 ア 肥料取締法に基づく立入検査については、有害成分を含むおそれの高い肥料の生産業者への重点化を図ることと</p>	<p>③ 肥料取締法に基づく立入検査、質問及び収去等業務 ア 肥料取締法に基づく立入検査については、各月毎の集中検査や集中分析による、効果的かつ効率的な検査の実施に努めた。また立入検査及び立入検査時の収去について、次に掲げ</p>

者に重点化することとし、中期目標期間中に、全体の立入検査事業所数に占める割合を、平成17年度を基準として、30%増加させる。また、立入検査時の収去については、有害成分を含むおそれの高い肥料に重点化することとし、中期目標期間中に、全体の収去点数に占める割合を、平成17年度を基準として、50%増加させる。

重点化を図ることとし、中期目標期間中に、全体の立入検査事業所数に占める割合を、平成17年度を基準として、30%増加させる。また、立入検査時の収去については、有害成分を含むおそれの高い肥料に重点化することとし、中期目標期間中に、全体の収去点数に占める割合を、平成17年度を基準として、50%増加させる。このため、次に掲げる事項を推進する。

(7) 汚泥肥料等、有害成分を含有するおそれの高い肥料以外の普通肥料の生産事業場については、過去5か年の立入検査の結果に基づき、食品工業、化学工業等の副産物を原料に使用する生産事業場等に対して立入検査の重点化を図ることにより、立入検査件数及び収去点数を、中期目標期間中に、いずれも30%以上削減するとともに、

(4) 汚泥肥料等、有害成分を含有するおそれの高い肥料の生産事業場に対する立入検査件数及び収去件数を、中期目標期間中に、それぞれ30%、50%以上増加させることとする。

立入検査の結果の報告については、中期目標期間中に、農林水産大臣の指示から報告までに要する期間を、現行の目標期間（40業務日）に対し

また、立入検査の結果の報告については、中期目標期間中に、農林水産省の指示から報告までに要する期間を、現行の目標期間（40業務日）に対して10%短

し、中期目標期間中に、全体の立入検査事業所数に占める割合を、平成17年度を基準として、30%増加させる。

また、立入検査時の収去については、有害成分を含むおそれの高い肥料に重点化することとし、中期目標期間中に、全体の収去点数に占める割合を平成17年度を基準として、50%増加させる。このため、次に掲げる事項を推進する。

(7) 汚泥肥料等、有害成分を含有するおそれの高い肥料以外の普通肥料の生産事業場については、過去5か年の立入検査の結果に基づき、食品工業、化学工業等の副産物を原料に使用する生産事業場等に対して立入検査の重点化を図ることにより、立入検査件数及び収去点数を、いずれも10%以上削減するとともに、

(4) 汚泥肥料等、有害成分を含有するおそれの高い肥料の生産事業場に対する立入検査件数と収去点数を、それぞれ15%、25%以上増加する。

また、立入検査の結果の報告については、中期目標期間中に、農林水産省の指示から報告までに要する期間を、現行の目標期間（40業務日）に対して10%短縮させるため、次に掲げる事項

る事項を推進し、有害成分を含むおそれの高い肥料の生産業者への重点化を図ることにより、汚泥肥料等の生産事業場への立入検査及び収去点数の占める割合を平成17年度に対してそれぞれ、27.3%及び61.5%増加させ、安全性確保の充実に図った。

表1 有害成分を含むおそれの高い肥料の全体の立入検査事業所及び収去点数に占める割合（再掲）

	H19実績	H17実績	増減率
立入検査件数	45.7%	35.9%	27.3%
収去点数	30.2%	18.7%	61.5%

(7) 汚泥肥料等、有害成分を含有するおそれの高い肥料以外の普通肥料の生産事業場については、過去5か年の立入検査の結果に基づき、食品工業、化学工業等の副産物を原料に使用する生産事業場等に対して立入検査の重点化を図ることにより、立入検査件数と収去点数を平成17年度に対してそれぞれ15.0%、20.2%削減した。

表2 汚泥肥料等以外の普通肥料の立入検査件数及び収去点数（再掲）

	H19実績	H17実績	増減率
立入検査件数	369件	434件	△15.0%
収去点数	733点	919点	△20.2%

(4) 汚泥肥料等の有害成分を含有するおそれの高い肥料の生産事業場に対する立入検査件数と収去点数を平成17年度に対してそれぞれ28.0%、49.5%増加した。

表3 汚泥肥料等の立入検査件数及び収去点数（再掲）

	H19実績	H17実績	増減率
立入検査件数	311件	243件	28.0%
収去点数	317点	212点	49.5%

また、立入検査の結果の報告については、農林水産省の指示から報告までに要する期間を短縮するため、次に掲げる取組を実施したことにより、現行の目標期間（40業務日）に対して5%（2業務日）削減した。

て10%短縮する。

縮させるため、次に掲げる事項を推進する。

(7) 有害成分ごとに、集中的に分析・鑑定を行うことにより、検査の効率化を図る。

(イ) 専門技術的知見の必要性が低い作業等についてはアウトソーシングを推進することにより、業務の合理化を図る。

(ウ) 最新の分析・鑑定手法の導入に努め、分析・鑑定業務の効率化を図る。

(エ) LANの活用により、本部への報告等事務処理の効率化を図る。

イ 有害成分に汚染された肥料の生産・流通等により、肥料に起因する人畜の被害が生ずるおそれが生じた場合等の緊急時において、汚染された肥料の流通の防止を図るため、農林水産大臣からの指示に従い、機動的かつ柔軟な組織体制をとるなど、迅速かつ効率的に立入検査、収去品の分析等を実施するとともに、速やかに原因究明等を行う。

イ 有害成分に汚染された肥料の生産・流通等により、肥料に起因する人畜の被害が生ずるおそれが生じた場合等の緊急時において、汚染された肥料の流通の防止を図るため、農林水産大臣からの指示に従い、緊急検査体制による対応を一層強化し、機動的かつ柔軟な組織体制をとるなど、迅速かつ効率的に立入検査、収去品の分析等を実施するとともに、速やかに原因等の究明等を行い、農林水産大臣に結果を報告する。

また、以上の取組を推進する

を推進する。

(7) 有害成分ごとに集中的に分析・鑑定を行うことにより、検査の効率化を図る。また、汚泥肥料の原料を本部に集約して溶出試験の分析を実施する。

(イ) 専門技術的知見の必要性が低い作業等についてはアウトソーシングを推進することにより業務の合理化を図る。

(ウ) 分析・鑑定業務の効率化を図るため、最新の分析・鑑定手法に関する文献・報文の収集を行う。

(エ) LAN等の活用により、本部への報告等事務処理の効率化を図る。

イ 有害成分に汚染された肥料の生産・流通等により肥料に起因する人畜に被害を生ずるおそれが生じた場合等の緊急時において、汚染された肥料の流通の防止を図るため、農林水産大臣からの指示に対しては、事務所横断的な緊急検査体制による対応を一層強化し、機動的かつ柔軟な組織体制をとるなど、迅速かつ効率的に立入検査、収去品の分析等を実施するとともに、速やかに原因の究明等を行い、農林水産大臣に結果を報告する。

また、以上の取組を推進するため、

(7) 収去品の検査については、有害成分ごとに集中的に分析・鑑定を行うことにより、成分分析点数として12,044点実施した。さらに、検査の効率化を図るため、このうち、汚泥肥料の原料の溶出試験(51試料、969点)を本部で集中して実施した。

(イ) ICP質量分析法用標準液の調製のアウトソーシングを実施した。

(ウ) 日本土壤肥料学会等9件に延べ16名が参加し、最新の分析・鑑定手法に関する文献・報文の収集を行った。

(エ) 立入検査実施計画等について、インターネットVPNへの掲載様式を定め、活用した。

なお、立入検査の結果、公定規格に定める有害成分の基準値を超えた肥料生産業者(3件)、その他異物混入など肥料取締法の遵守のために改善が必要として公表された肥料生産業者等(82件)に対して改善指導を行った。

イ 緊急時における農林水産大臣からの指示は11件あり、立入検査及び収去品の分析・鑑定について、本部及び事務所間の情報の共有や分析・鑑定のクロスチェック等、事務所横断的な緊急検査体制による迅速な対応を実施し、速やかに農林水産大臣に結果を報告した。

- ・無登録肥料の生産・流通に係るもの：6件
- ・牛海綿状脳症の発生に伴うと畜場汚泥に係るもの：1件
- ・異物混入の疑いがある肥料に係るもの：4件

また、「緊急立入検査マニュアル」を見直し、緊急検査体

	ため、緊急立入検査マニュアル（仮称）を整備する。	緊急立入検査マニュアルの見直しを行う。	制における対応の強化と機動的かつ効率的な実施の推進を図った。
			④ 上記①から③までの業務のほか、農林水産省からの要請に基づき、肥料に関する次の調査を実施し、その結果を報告した。 <ul style="list-style-type: none"> ・し尿及び焼成汚泥肥料の原料・入手先に関する調査 ・家庭園芸用複合肥料の原料・宣伝パンフレットの調査 ・下水汚泥を利用した肥料（登録肥料）の調査
(2) 農薬関係業務 ① 農薬の検査等業務 ア 農薬検査の迅速化 農薬の登録申請に係る検査の実施については、GLP制度に基づいて実施することを求めている試験項目について、当該試験の信頼性に係る検査を定型化することにより、検査精度の維持を図りつつ検査を効率的かつ効果的に実施することとする。これにより、旧農薬検の前中期目標において目標とした検査期間を、この中期目標期間中にさらに5%程度短縮することとし、具体的には、次に掲げる目標期間内 ^(注1) に検査を完了させる。 (7) 農薬取締法第3条第1項第4号から第7号までのいずれかに掲げる場合に該当するかどうかの基準の設定が必要な農薬の検査については、1年4か月以内 (4) (7)以外の農薬の検査については、10.5か月以内 (注1) 検査の過程で追加試験成績等の提出が必要な場	(2) 農薬関係業務 ① 農薬の検査等業務 ア 農薬検査の迅速化 農薬の登録申請に係る検査の実施については、GLP制度に基づいて実施することを求めている試験項目の検査について、当該試験の信頼性に係る検査項目等の定型化を図る等、効率的かつ効果的に実施することにより、旧農薬検の前中期目標において目標とした検査期間を、中期目標期間中に更に5%程度短縮することとし、具体的には、次に掲げる目標期間内に検査を完了させる ^(注) ため、次に掲げる(7)から(4)の措置を講ずる。 a 農薬取締法第3条第1項第4号から第7号までのいずれかに掲げる場合に該当するかどうかの基準の設定が必要な農薬の検査については、1年4か月以内 b a以外の農薬の検査については、10.5か月以内 (注) 検査の過程で追加試験成績等の提出が必要な場合における当該追加試験成績等が提出	(2) 農薬関係業務 ① 農薬の検査等業務 ア 農薬検査の迅速化 農薬の登録申請に係る検査の実施については、GLP制度に基づいて実施することを求めている試験項目の検査について、当該試験の信頼性に係る検査項目等の定型化を図る等、効率的かつ効果的に実施することにより、旧農薬検の前中期目標において目標とした検査期間を、この中期目標期間中に更に5%程度短縮することとし、具体的には、次に掲げる目標期間内に検査を完了させる ^(注) ため、次の(7)から(4)までの措置を講ずる。 a 農薬取締法第3条第1項第4号から第7号までのいずれかに掲げる場合に該当するかどうかの基準の設定が必要な農薬の検査については、1年4か月以内 b a以外の農薬の検査については10.5か月以内 (注) 検査の過程で追加試験成績等の提出が必要な場合における当該追加試験成績等が提出されるまでの期間及び登録申請された農薬のADI等が設定されるまでに要する期間は、検査期間に含まないものとする。	(2) 農薬関係業務 ① 農薬の検査等業務 ア 農薬検査の迅速化（一部再掲） 農薬の登録申請に係る検査の実施については、GLP制度に基づいて実施することを求めている試験項目の検査について、当該試験の信頼性に係る検査項目等について平成18年度に作成したチェックリストを活用し効率化を図るとともに、次の(7)から(4)までの措置を講じた。 平成19年度は、農林水産大臣から継続分を含め3,012件（平成18年度比16.2%減）の検査指示があった。 このうち、基準設定必要農薬の検査指示は321件（平成18年度比19.3%増）であったが、平成19年度内に検査が完了した105件のうち、迅速化に係る目標期間である1年4か月以内に検査を完了したものは97件（検査完了件数に対する割合：92.4%）であった。 基準必要農薬で目標を達成できなかった8件は、同じ有効成分で先行して申請している農薬がある場合においては、当該農薬の残留農薬基準が告示（あるいは確定）されるまでの間は、関係資料を農林水産省に送付できないこととなっているためである。 また、基準設定不要農薬の検査指示は2,691件（平成18年度比19.1%減）であったが、平成19年度内に検査を完了した1,592件のうち、迅速化に係る目標期間である10.5か月以内に検査を完了したものは1,524件（検査完了件数に対する割合：95.7%）であった。 基準設定不要農薬で目標を達成できなかった68件は、防除現場での混乱を防止し、円滑な防除指導を行うため、異なる時期の申請について登録時期を合わせる必要があったこと等

合における当該追加試験成績等が提出されるまでの期間及び登録申請された農薬のADI等が設定されるまでに要する期間は、検査期間に含まないものとする。

されるまでの期間及び登録申請された農薬のADI等が設定されるまでに要する期間は、検査期間に含まないものとする。

- (7) 検査業務の進行管理の充実
 検査を行うに当たり、検査進行管理表に基づき各検査の進捗状況を総合的かつ定期的に点検し、検査の遅延の要因を分析して、検査の迅速化を図る。
- 具体的には、
- a 検査全体の進捗状況を検査職員全員が随時把握できるように、LANシステムを改良する。
 - b 農薬取締法第3条第1項第4号から第7号までのいずれかに掲げる場合に該当するかどうかの基準の設定が必要な農薬の検査については、
 - (a) 農林水産大臣からの検査指示から、基準の設定等を行う厚生労働省、環境省及びリスク評価を行う食品安全委員会に対して必要な資料を送付するまで
 - (b) 農林水産大臣からの検査指示から、同大臣に対する検査結果の報告まで

- (7) 検査業務の進行管理の充実
 登録検査に係る農薬について、検査進行管理表を作成し、これに基づき概ね3か月に1回の頻度で検査進行管理会議を開催し、検査の遅延の要因を分析し、適切な措置を講ずる。また、検査遅延防止のため、毎月1回、各検査担当課において検査進行状況を確認し、遅延がある場合は適切な措置を講ずる。さらに、
- a 検査進行状況の把握及び管理の効率化を図るため、現状を分析の上システム化を検討する。
 - b 検査進行状況の把握及び遅延の要因分析に資するため、検査期間を検査指示から食品安全委員会送付までの検査期間及び全検査期間別に把握、整理を行う。

によるものであった。

表4 平成19年度における目標期間の達成状況（再掲）

	指示件数 (注1)	検査完了 件数	目標達成 件数	目標達成 率(注2)	目標期間
基準必要	321	105	97	92.4%	16月
基準不要	2,691	1,592	1,524	95.7%	10.5月

注1) 平成19年度+継続分。

注2) 対検査完了件数比。

その他、1,129件の農薬について再登録に係る検査を行った。

- (7) 検査業務の進行管理の充実
 「検査進行管理表」は毎月2回作成し、その結果を踏まえ、検査進行管理会議を3か月毎（5・8・11・2月）に行うことにより検査進行状況の定期的点検及び検査の遅延要因把握を行うとともに、検査遅延防止のため、毎月1回、各検査担当課において検査進行状況を確認するなどにより検査の迅速化に努めた。なお、検査に遅延は見られなかった。
- さらに、
- a 現状を分析し、現行システムの改良すべき点を明らかにした。
 - b 四半期ごとに検査が完了した農薬について検査期間を検査指示から食品安全委員会送付までの検査期間及び全検査期間別に把握、整理を行った。

の検査期間について、きめ細かく検査の進捗状況を把握し、検査期間の削減を図る。

(イ) 微生物農薬の登録検査の迅速化

微生物農薬の検査を迅速化するため、微生物農薬検討会の開催時期・回数を、登録申請状況に応じて柔軟化する。

(ウ) 農薬使用者の安全性の確保に係る登録検査の迅速化

農薬使用者の安全性の確保に係る検査を迅速化するため、農薬使用時安全性検討会の開催時期・回数を、登録申請状況に応じて柔軟化する。

(エ) 事務処理の迅速化

通常の検査業務について、決裁等の事務処理の迅速化を図る。

(オ) 職員に対する研修カリキュラムの策定及び研修の実施

農薬の検査を行う職員は、毒性及び残留性等に関する高度の専門的知識が要求されることから、内部研修に加え、外部研修に参加させることにより、職員の資質の向上を図る。

(カ) 検査マニュアルの見直し

試験項目の増加及び各検査の検査内容の高度化・複雑化に対応するため、必要に応じ、

(イ) 微生物農薬の登録検査の迅速化

微生物農薬の登録検査を迅速化するため、微生物農薬検討会を、登録申請状況に応じて柔軟に開催する。

(ウ) 農薬使用者の安全性の確保に係る登録検査の迅速化

農薬使用者の安全性の確保に係る登録検査を迅速化するため、農薬使用時安全性検討会を、登録申請状況に応じて柔軟に開催する。

(エ) 事務処理の迅速化

通常の検査業務について、決裁等事務処理の迅速化を図るため、決裁関係規程の一層適切な運用を役職員へ周知する等改善策を講ずる。

(オ) 職員に対する研修の実施

前事業年度に策定した体系的な研修カリキュラムを見直すとともに、見直されたカリキュラムに基づいて研修を実施する。

(カ) 検査マニュアルの見直し

試験項目の増加及び各検査の検査内容の高度化・複雑化に対応するため、必要に応じ、検査マニュアルの

(イ) 微生物農薬の登録検査の迅速化

微生物農薬検討会を2回開催し、3件の農薬について検討を行った。開催時期については登録申請状況を考慮して柔軟に対応した。

(ウ) 農薬使用者の安全性の確保に係る登録検査の迅速化

農薬使用時安全性検討会を3回開催し、21件の農薬について検討を行った。開催時期については登録申請状況を考慮して柔軟に対応した。

(エ) 事務処理の迅速化

平成18年度に定めた検査に係る決裁の運用を、平成19年度においても文書で役職員に更なる周知、徹底を図った。

(オ) 職員に対する研修の実施

登録検査に要求される毒性及び残留性等に関する高度の専門知識の涵養を行うため、平成18年度に策定した体系的な研修カリキュラムを見直すとともに、見直されたカリキュラムに基づき13回（80名）の研修を実施した。また、内部研修で習得が難しい技術、知識等については9件の外部研修を活用し、19名の職員を参加させた。

(カ) 検査マニュアルの見直し

農薬による水質汚濁を未然に防止する観点及び土壌への農薬の残留に起因する農作物の汚染を未然に防止する観点から、平成19年4月2日付で「農薬の登録申請に係る試験成

	<p>検査マニュアルの見直しを行う。</p>	<p>見直しを行う。</p>	<p>績について（平成12年農産第8147号農林水産省農産園芸局長通知）」等が改正されたことを踏まえ、検査マニュアルについて、所要の見直しを行った。</p>										
<p>イ 登録農薬データの適正な管理</p> <p>登録申請の際に提出される試験成績等の情報の保護を徹底するため、事務室等のセキュリティを確保するとともに、情報管理に万全を期するものとする。</p>	<p>イ 登録農薬データの適正な管理</p> <p>登録申請の際に提出される試験成績等の情報の保護を徹底するため、次に掲げる取組を実施する。</p> <p>(7) 当該データ等の保管場所への不正侵入を防止するための措置を強化する。</p> <p>(4) 当該データ等の保護に関するマニュアルを策定する。</p> <p>(5) CIOの統括の下で、LAN上のデータベースに対する適正な管理を進める。</p>	<p>イ 登録農薬データの適正な管理</p> <p>登録申請時に提出された試験成績等の情報の保護を徹底するため、情報機器・媒体も対象として、次に掲げる取組を行う。</p> <p>(7) 前事業年度に措置した、データ等の保管場所への不正進入を防止するための措置を適正に運用する。</p> <p>(4) 前事業年度に策定した、当該データ等に関する保護マニュアルを適正に運用する。</p> <p>(5) CIOの統括の下で、LAN上のデータベースの適正管理等を引き続き進める。</p>	<p>イ 登録農薬データの適正な管理</p> <p>情報機器・媒体も対象として、次に掲げる取組を行うことにより、登録申請時に提出された試験成績等の情報の保護を徹底した結果、不正アクセス等は発生しなかった。</p> <p>(7) 平成18年度に設置した不正侵入防止装置を適正に運用した。</p> <p>(4) CIOの統括の下、情報セキュリティに関する規程に基づき、LAN上の農薬登録データベースの適正管理等に努めた。</p> <p>(5) CIOの統括の下、LAN上のデータベースを適正に管理した。</p>										
<p>ウ 適切な技術的指導の実施</p> <p>効率的かつ効果的な農薬の検査に資するため、申請者から要望があった場合には、登録に必要な試験成績の内容等について技術的指導を実施する。</p>	<p>ウ 適切な技術的指導の実施</p> <p>農薬の検査の円滑化及び効率化に資するため、次に掲げる申請内容等に関する技術的指導を適切に実施する。</p> <p>(7) 農薬の登録検査において要求される試験項目数が増加し、各試験の内容も高度化・複雑化する中で、農薬の登録検査を円滑に行うため、申請者からの要望による技術的指導について、迅速に対応する。</p>	<p>ウ 適切な技術的指導の実施</p> <p>農薬の検査の円滑化及び効率化に資するため、次に掲げる申請内容等に関する技術的指導・助言を適切に実施する。</p> <p>(7) 農薬の登録検査において要求される試験項目数が増加し、各試験の内容も高度化・複雑化する中で、農薬の登録検査を円滑に行うため、申請者からの要望による技術的指導・助言について、迅速に対応する。</p>	<p>ウ 適切な技術的指導の実施</p> <p>次に掲げる申請内容等に関する技術的指導・助言を適切に実施することにより、農薬の検査の円滑化及び効率化に努めた。</p> <p>(7) 注意事項の変更、処方変更、原体製造場の変更、試験成績の受入、容器・包装の変更等の申請者からの要望による技術的相談について次のとおり対応した。平成18年度繰越件数を含む平成19年度の受付件数922件のうち対応が終了した相談は746件（80.9%）であり、その平均処理期間は、58日（1.9か月）であった。</p> <p>表6 平成19年度における申請者からの要望による技術的相談</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>検討内容</th> <th>受付件数 (注)</th> <th>終了件数</th> <th>未了件数</th> <th>平均処理 期間(日)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>注意事項の変更</td> <td>574</td> <td>485</td> <td>89</td> <td>36</td> </tr> </tbody> </table>	検討内容	受付件数 (注)	終了件数	未了件数	平均処理 期間(日)	注意事項の変更	574	485	89	36
検討内容	受付件数 (注)	終了件数	未了件数	平均処理 期間(日)									
注意事項の変更	574	485	89	36									

処方変更	173	127	46	94
原体製造場の変更	41	31	10	112
試験成績の受入	77	63	14	114
容器・包装の変更	9	9	0	48
その他	48	31	17	104
合 計	922	746	176	58

注) 受付件数は、平成18年度繰越件数+平成19年度受付件数-取り下げ件数を指す。

(イ) 特に、農薬の新規有効成分の登録申請に関する技術的指導について迅速に対応する。

(ウ) 農薬の安全な使用を確保するためのラベル表示の重要性が増す中で、相談者からのラベル表示についての相談に適切に対応する。

(イ) 特に、農薬の新規有効成分の登録申請に関する技術的指導について迅速に対応する。

(ウ) 農薬の安全な使用を確保するためのラベル表示の重要性が増す中で、相談者からのラベル表示についての相談に適切に対応する。

(イ) 新規に申請される農薬の有効成分について申請者の要望に応じて技術的相談を11回(計14剤)実施し、平成19年度内に回答した11剤の平均処理期間は、60日(2か月)であった。

(ウ) 平成19年度においては、ラベル表示についての相談事例はなかった。

エ 今後、新たに見込まれる、
 (7) 残留農薬基準のポジティブリスト化やそれに伴うADIの設定のための既登録農薬の再評価
 (イ) 水質汚濁に係る登録保留基準の強化
 (ウ) 生産量の少ない作物への農薬登録の促進に関する農作物のグループ化の促進
 (エ) 遺伝子組換え生物農薬の適切な検査方法の確立等の行政措置等に対する対応について、適切に実施するものとする。

エ 新規業務等への適切な対応
 中期目標に挙げられている新たに見込まれる事項等については、社会情勢を踏まえ、農林水産大臣からの指示に基づき、適切実施するものとする。

エ 新規業務等への適切な対応
 中期目標に挙げられている新たに見込まれる事項等については、社会情勢を踏まえ、農林水産大臣からの指示に基づき、適切に実施するものとし、次の業務に対応する。
 (7) 平成18年5月から導入された残留農薬基準のポジティブリスト化に伴い発生する事項の技術的検討

エ 新規業務等への適切な対応
 中期目標に挙げられている新たに見込まれる事項等については、社会情勢を踏まえ、農林水産省からの要請に基づき、次の業務に対応した。
 (7) 平成18年5月に施行された食品衛生法に基づく、残留農薬基準のポジティブリスト制度への移行に伴う次の技術支援要請に適切に対応した。
 a 魚介類に対する残留農薬基準の設定に対する協力
 シジミにおける農薬残留問題に対応した魚介類の残留農薬基準設定に関し、基準設定に必要な資料の検討を行うとともに、対象農薬の資料の妥当性について技術的検討を行った。
 b 土壌処理農薬の土壌・作物残留試験
 平成18年度に発生したイチゴ等における残留農薬基準超過事例の原因究明に資するため、土壌・作物残留試験を行い、農薬残留に影響を与える要因について緊急的に調査した。

		<p>(イ) 生産量の少ない作物への農薬登録の促進</p>	<p>(イ) 生産量の少ない農作物への農薬登録の促進のため、登録に必要な作物残留試験について、試験設計の審査及び助言等を行った（審査5件、助言5件）。</p> <p>(ウ) その他</p> <p>a 農薬の毒性に関する試験の適正実施に係る制度（農薬GLP制度）の適用対象試験に「農作物への残留性に関する試験」を追加することに係る検討（作物残留試験へのGLP制度の適用）</p> <p>「規制改革・民間開放の推進に関する第3次答申（平成18年12月）」を受け、登録申請に用いる試験成績のうち作物残留試験を含めた薬効・薬害試験等の民間開放に向け、同試験施設の基準を「農薬GLP基準に適合した施設」に改正されることとなった。</p> <p>このため、作物残留試験に関するGLP基準及び査察の実施方法等の検討を行い、関係通知の改正作業等を支援した。</p> <p>b 農薬の疑いのある資材（疑義資材）の分析</p> <p>4種類（31点）の疑義資材について、農薬の有効成分が含まれているか否かの分析を行い、結果を報告した。</p>								
<p>② ①の業務に附帯する業務</p> <p>ア 農薬GLP適合確認業務の迅速化</p> <p>農薬の安全性に関する試験成績の信頼性を確保するため、農薬GLP制度の適用対象試験の範囲が拡大し、農薬GLP適合確認業務の内容の高度化・複雑化及び適合確認件数の増加が見込まれることから、GLPの審査・査察に係る体制整備を行うことにより、業務の迅速化を図る。具体的には、査察の実施後6週間以内に、農林水産省消費・安全局長に対し、査察結果を報告するも</p>	<p>② ①の業務に附帯する業務</p> <p>ア 農薬GLP適合確認業務の迅速化</p> <p>農薬の安全性に関する試験成績の信頼性を確保するため、農薬GLP制度の適用対象試験の範囲が拡大し、農薬GLP適合確認業務の内容の高度化・複雑化及び適合確認件数の増加が見込まれることから、GLPの審査・査察に係る体制整備を行うことにより業務の迅速化を図り、査察の実施後6週間以内に農林水産省消費・安全局長に査察結果を報告することができるよう、次に掲げる措置を講ずる。</p>	<p>② ①の業務に附帯する業務</p> <p>ア 農薬GLP適合確認業務の迅速化</p> <p>農薬の安全性に関する試験成績の信頼性を確保するため、農薬GLP制度の適用対象試験の範囲が拡大し、農薬GLP適合確認業務の内容の高度化・複雑化及び適合確認件数の増加が見込まれることから、査察実施後6週間以内にGLP適合確認の査察結果を農林水産省消費・安全局長に報告することができるよう、次に掲げる措置を講ずる。</p>	<p>② ①の業務に附帯する業務</p> <p>ア 農薬GLP適合確認業務の迅速化</p> <p>平成19年度における試験施設への査察は、農林水産省からの要請に基づき、申請のあった15試験施設について実施した。査察を実施した試験施設についての試験の分野別の内訳は次のとおりであった（一部重複を含む）。</p> <p>〔試験分野別の査察実施状況〕</p> <table border="0"> <tr> <td>・毒性試験</td> <td>4施設</td> </tr> <tr> <td>・物理的・化学的性状試験</td> <td>8施設</td> </tr> <tr> <td>・水産動植物影響試験</td> <td>6施設</td> </tr> <tr> <td>・生体内等運命試験</td> <td>2施設</td> </tr> </table> <p>また、(7)から(ウ)までの措置を講ずることにより、査察を行った全試験施設について目標期間である6週間以内（最大5.4週、平均4.0週）に査察結果を報告した。</p>	・毒性試験	4施設	・物理的・化学的性状試験	8施設	・水産動植物影響試験	6施設	・生体内等運命試験	2施設
・毒性試験	4施設										
・物理的・化学的性状試験	8施設										
・水産動植物影響試験	6施設										
・生体内等運命試験	2施設										

<p>のとする。</p>	<p>(7) GLP査察のためのマニュアルを見直し、必要に応じて改訂する。</p> <p>(イ) GLP査察を行う職員は、各種試験の実施方法に関する高度の専門的な知識、経験が要求されることから、定期的な研修、実地査察への参加等を行うことにより、職員の資質の向上を図る。</p> <p>(ウ) 査察の実施後、原則として3週間以内に査察結果を取りまとめ、その結果を基に、評価会議を適時開催し、迅速な評価を行う。</p>	<p>(7) GLP査察実施後、部内に設置する評価会議において、旧農薬検の前中期目標期間中に改訂された現行マニュアルの適切性について意見聴取を行い、必要に応じて、改訂版を作成する。</p> <p>(イ) 査察員の資質の向上に努めるため、定期的な内部研修を行うとともに、外部機関が主催するGLPに関する研究会等に職員を積極的に参加させる。 また、新たに査察員となる職員については、経験豊富な職員と実地査察に参加させる等により、職員の資質向上を図る。</p> <p>(ウ) 査察実施後、速やかに査察結果を取りまとめ、その結果をもとに3週間以内に農薬GLP中核職員等からなる評価会議を開催し、迅速かつ的確な評価を行う。</p>	<p>(7) 査察実施後に開催した評価会議において、現行マニュアルについて検討を行ったところ、改訂を要する事項はなかった。</p> <p>(イ) 平成19年度15回の査察のうち7回について、査察の経験が少ない者を7名同行させ実地研修を行った。また外部機関が主催するGLPに関する研究会に延べ8名、GLPに関する内部研修に6名の職員を参加させ、職員の資質向上を図った。</p> <p>(ウ) 平成19年度査察を実施した15試験施設のすべてについて、目標期間である査察実施後3週間以内に査察結果を取りまとめ、その結果を基に、農薬検査部内に設置する評価会議を10回開催した。 査察実施から会議開催までの平均期間は1.6週間、最大で2.4週間であった。</p>
<p>イ 国際調和の推進 今後、</p> <p>(7) OECDにおける新たなテストガイドライン等の策定</p> <p>(イ) コーデックス食品規格委員会 (Codex Alimentarius Commission) における残留農薬に関する国際規格の設定</p> <p>(ウ) 外国・地域との間における農薬GLP制度の相互承認に係る協定及び2国間取決めの実施等の支援等の業務の増加が見込まれることから、これらに対して技術的</p>	<p>イ 国際調和の推進 新たなOECDのテストガイドライン等の策定、外国・地域との間における農薬GLP制度の相互承認に係る協定及び2国間取決めの増加が予想されることから、これらに対して技術的に貢献するため、国との連携・協力の下、次に掲げる取組を実施する。</p> <p>(7) OECD環境政策委員会農薬作業部会、同GLP作業部会等の会議に必要な応じ参加し、農薬登録制度に係る国際調和に貢献する。</p>	<p>イ 国際調和の推進 新たなOECDのテストガイドラインの策定等の国際調和業務、外国・地域との間における農薬GLP制度の相互承認に係る協定及び2国間取決めに對して技術的に貢献するため、国との連携・協力の下、次に掲げる取組を実施する。</p> <p>(7) OECD農薬作業部会及び同GLP作業部会等の会議に、必要に応じて職員を派遣するほか、国際的な議論に貢献するため、専門家会議に職員を登録する。</p>	<p>イ 国際調和の推進 新たなOECDのテストガイドラインの策定等の国際調和業務、外国・地域との間における農薬GLP制度の相互承認に係る協定及び2国間取決めに對して技術的に貢献するため、国との連携・協力の下、次に掲げる取組を実施した。</p> <p>(7) OECD農薬作業部会1回に職員を1名派遣した。 また、農薬残留テストガイドライン専門家会合に職員2名を、GLP作業部会に職員1名を専門家として登録し、農薬残留専門家会合1回に職員1名を派遣した。 さらに、2件のOECDテストガイドラインに係る意見を農</p>

<p>に貢献するため、必要に応じ、国際会議等に職員を派遣する。</p>	<p>(イ) コーデックス食品規格委員会 (Codex Alimentarius Commission) 残留農薬部会 (Codex Committee on Pesticide Residues) 等の会議に必要なに応じ参加し、国際的な農薬残留に係る基準の設定に貢献する。</p> <p>(ウ) 上記会議に積極的に貢献するため、会期以外の期間においても、会議における論点につき、日常的な検討を行うとともに、必要に応じて各国の検査機関との間で情報交換を行う。</p> <p>(エ) 上記会議に関しては、関係団体等との協力が不可欠であることから、可能な範囲で、これらの者との連携を強化する。</p> <p>(オ) 日・EU等の農薬GLPに係る相互承認協定の履行に貢献するため、日本における農薬GLP適合確認施設のリストを作成する。</p>	<p>(イ) コーデックス食品規格委員会 (Codex Alimentarius Commission) 残留農薬部会 (Codex Committee on Pesticide Residues) 等の会議に、必要に応じて職員を派遣する。</p> <p>(ウ) 上記会議での検討事項に関して、日常的な検討を行うための体制整備を行う。この中で、引き続き、OECDのドシエ・モノグラフ及び電子テンプレートの利用に関する国際的動向につき、情報収集を行う。 また、必要に応じて、各国関係機関との情報交換を行う。</p> <p>(エ) 上記会議に関して、関係団体等と意見交換会を開催する。</p> <p>(オ) 日・EU等の農薬GLPに係る相互承認協定の履行に貢献するため、日本における農薬GLP適合確認施設のリストを作成し国へ報告する。</p>	<p>林水産省及び専門家会合へ提出した。</p> <p>(イ) コーデックス食品規格委員会 (Codex Alimentarius Commission) 残留農薬部会 (Codex Committee on Pesticide Residues) の会議1回に職員を1名派遣し、コーデックス作物分類に関する1件の意見を農林水産省へ提出した。 この他、FAO主催のマイナー使用における農薬登録促進国際ハイレベル会合 (FAOグローバルマイナーユースサミット) 1回に役職員2名を派遣した。</p> <p>(ウ) 各会議での検討事項に関して、日常的な検討を行うため、農林水産省農産安全管理課に設置された国際対応検討チーム (毒性、残留、ドシエ・モノグラフ) に参画した。 米国及びオーストラリアから来訪した農薬登録責任者と意見交換を行った。</p> <p>(エ) OECDの農薬関係会議の課題及びFAOグローバルマイナーユースサミットの結果について、農薬工業会、日本植物防疫協会等の関係団体等との意見交換会を1回開催した。</p> <p>(オ) 日・EU相互承認協定 (GLP分野) に基づき、平成18年度に査察した農薬GLP試験施設のリストを農林水産省に報告した。</p>
<p>ウ 調査研究の重点化 検査検定を主たる業務として実施する法人にふさわしいものとして、次に掲げる調査研究を重点的に実施し、その結果を迅速に公表する。具体的には、農薬に関する業務に係る調査研究経費中に占める</p>	<p>ウ 調査研究の重点化 検査検定を主たる業務として実施する法人にふさわしいものとして、中期目標第3の2(2)の②のウの(7)及び(イ)に即した調査研究課題を設定するとともに、農薬に関する業務に係る調査研究経費中に占める当該調査</p>	<p>ウ 調査研究の重点化 (7) 調査研究課題の選定等 次のaからcまでに掲げる調査研究課題に取り組むこととし、このうちa及びbの調査研究課題に対しては農薬に関する業務に係る調査研究経費の80%以上を重点配分する。 a 農薬登録に係るOECDテストガイ</p>	<p>ウ 調査研究の重点化 (7) 調査研究課題の選定等 全調査研究費41百万円のうち、a及びbに該当する調査研究経費は、39百万円であり、全調査研究費の95.1%をこれらに配分した。 a 農薬登録に係るOECDテストガイドライン等の国際的枠</p>

次に掲げる調査研究課題に係る調査研究経費の割合を80%以上とする。

(7) 農薬登録に係るOECDテストガイドライン等の国際的枠組みの策定に当たり、これが我が国へ導入された場合の可否の検証

(4) 残留農薬基準の対象品目の拡大等に対応した新たな検査手法の開発

研究課題に係る調査研究経費の割合を80%以上とし、次に掲げる措置を講ずる。

ドライン等の国際的枠組の策定に当たり、これが我が国へ導入された場合の可否の検証：

・水産動植物への影響評価に係るテストガイドラインの開発・検証

・作物残留試験に係るテストガイドラインの改善・整備

b 残留農薬基準の対象品目の拡大等に対応した新たな検査手法の開発：

・補助成分に含まれる有害成分の検査手法の開発

c その他研究課題：

・農業資材を経由した農薬汚染防止対策

組の策定に当たり、これが我が国へ導入された場合の可否の検証

・水産動植物への影響評価に係るテストガイドラインの開発・検証

(課題名：幼若ホルモン様農薬のミジンコ類に対する影響調査)

OECDテストガイドライン211号(オオミジンコ繁殖試験)に、幼若ホルモン様作用を検出するための観察事項の追加を主体とする試験法の改訂案が提出されていることから、試験法の検証のため、被験物質を除去した後の回復性、作用機序の異なる農薬を供試した雌雄比等の変化、他生物種での雄化作用に関する調査を実施した。(平成20年度継続)

・作物残留試験に係るテストガイドラインの改善・整備
(課題名：農作物の加工調理による農薬の残留量の変化について)

より精密な農薬の暴露量推定のため、加工調理による農薬の残留量の変化を把握し、加工調理に関するガイドライン案を作成するための基礎資料の作成・収集を行うこととし、精米及び炊飯条件の違いによる農薬残留量の変動について調査した。(平成19年度終了)

b 残留農薬基準の対象品目の拡大等に対応した新たな検査手法の開発

・補助成分に含まれる有害成分の検査手法の開発

(課題名：農薬製剤中におけるダイオキシン類の分析法の確立)

第1期中期計画において実施した農薬中のダイオキシン類の分析に適した前処理法の検討結果を参考にして、ベンゼン環に塩素が結合している化学構造をもつ6種類の補助成分(防黴剤、安定化剤等)について前処理操作(抽出、精製等)の検討を行うとともに、ダイオキシン類の定量を行った。(平成19年度終了)

c その他研究課題

・農業資材を経由した農薬汚染防止対策

(課題名：クロピラリドの作物体残留量の把握)

先端技術を活用した農林水産高度化事業「飼料及び堆肥に残留する除草剤の簡易判定法と被害軽減対策の

	<p>(7) 調査研究の実施期間中において、経費及び人的資源につき、適切な進行管理を行う。</p> <p>(イ) 調査研究の結果については、外部の有識者による評価を行うとともに、調査研究の結果を迅速に公表する。</p> <p>(ウ) 外部の有識者による評価が著しく低い調査研究については、実施期間中であっても、打ち切りを含めて抜本的に見直す。</p>	<p>・長期残留性農薬の土壌中での動態把握</p> <p>(イ) 調査研究実施中における措置</p> <p>a 調査研究の実施期間中において、経費及び人的資源につき、適切な進行管理を行うため、調査研究推進委員会（仮称）において定期的に検討を行う。</p> <p>b 原則として、すべての調査研究結果については、事業年度内に外部の有識者による事後（中間）評価を行うとともに、調査研究の結果を迅速に公表する。</p> <p>c 外部の有識者による評価が著しく低い調査研究については、実施期間中であっても、打ち切りを含めて抜本的に見直す。併せて、次の事業年度の調査研究計画（案）についても、上記外部有識者による事前評価を行う。</p>	<p>確立」に参画し、クロピラリド残留堆肥を施用した土壌でほうれんそう及びかぶ（葉・根）を栽培し、収穫物を分析し、結果を畜産草地研究所に報告した。（平成20年度継続）</p> <p>・長期残留性農薬の土壌中での動態把握 （課題名：ヘプタクロル類の土壌中での動態把握） 先端技術を活用した農林水産高度化事業「ヘプタクロル類の土壌及び作物への残留予測と吸収抑制技術の開発」に参画し、4種類の異なる土壌にヘプタクロルを添加した試料と2種類のヘプタクロル含有土壌を用い、異なる温度条件下における減衰を調査し、結果を農業環境技術研究所に報告した。（平成19年度終了）</p> <p>(イ) 調査研究実施中における措置</p> <p>a 調査研究推進委員会を3回開催し、平成19年度計画についての外部評価委員指摘事項に対する対応、調査研究の進捗状況と推進上の問題点、平成19年度調査研究成果及び平成20年度調査研究計画案について検討を行い必要に応じ修正等を行った。</p> <p>b 平成20年3月に本年度の調査研究成果について外部評価委員による中間評価及び事後評価を実施した（ただし、課題名「クロピラリドの作物体残留量の把握」及び「ヘプタクロル類の土壌中での動態把握」は、別途委託者において評価されることから対象外とした）。その結果、AからDの4段階評価で評価委員2名中1名が1課題（課題名：幼若ホルモン様農薬のミジンコ類に対する影響調査）をCと評価したが、その他はA又はBの評価であった。なお、調査研究結果は、迅速に公表することとしている。</p> <p>c 上記外部評価委員による評価において、実施期間中の調査研究に対する中間評価及び平成20年度の調査研究計画（案）に対する事前評価を実施した。その結果、中間評価において、調査研究を打ち切るような評価が著しく低いものはなかった。また、計画（案）についても評価が著しく低いものはなく、計画（案）どおり了承された。</p>
工 情報の適正な収集・分析等	工 情報の適正な収集・分析等	工 情報の適正な収集・分析等	工 情報の適正な収集・分析等

農薬の検査を的確に行うため、コーデックス食品規格委員会又はOECDの加盟国において作成されている農薬の毒性及び残留性に関する評価概要書（モノグラフ）、国内外の農薬に関する文献・情報等を積極的に入手し、分析するとともに、体系的に分類・整理・保管する。

コーデックス食品規格委員会又はOECDの加盟国において作成されている評価概要書（モノグラフ）等を積極的に入手し、分析するとともに、体系的に分類・整理・保管し、今後の効率的かつ効果的な農薬の検査の検討に資する。

(7) 農薬の検査を適切に行うため、コーデックス食品規格委員会又はOECDの加盟国において作成されている評価概要書（モノグラフ）、国内外の農薬に関する文献情報等を積極的に入手し分析するとともに、体系的に分類・整理・保管を行う。

(7) 情報収集については、平成19年度は農薬の検査に関連する分野として、「毒性」、「環境（化学系、生物系）」、「品質」、「効果及び薬害」、「残留農薬」及び「その他」の6分野に分類し、次のとおり文献又は学術誌を収集、整理、抄録作成を行った。

表7 文献又は学術誌の収集、整理、抄録

分野	文献等の種類	抄録作成
毒性	4種類	4タイトル
環境	25種類	20タイトル
品質	11種類	5タイトル
効果及び薬害	6種類	17タイトル
残留農薬	5種類	82タイトル
その他	9種類	7タイトル
合計	60種類	135タイトル

また、平成19年にEUで評価された11化合物の農薬の毒性及び残留性の評価概要を収集した。

(4) 農薬の安全性等に関する情報提供の推進

a ホームページ上の農薬の登録及び失効に関する情報を更新するほか、ホームページ上で従来提供してきた農薬登録情報の提供形式について、ユーザーの利便性の観点から見直しを検討する。

b 消費者、生産者、事業者等からの問い合わせに適切に対応する。

(4) 農薬の安全性等に関する情報提供の推進

a 平成18年5月より開始した農薬登録情報（登録番号、用途（殺虫、殺菌、除草等）、農薬の種類、農薬の名称、作物名、適用病害虫雑草名、使用目的、使用時期、使用液量、本剤の使用回数、使用方法、適用場所等全17項目）が一覧可能なダウンロード形式でのデータ提供を平成19年度も引き続き実施し、農薬に関する情報提供の推進を図った。

平成19年4月から平成20年3月までにダウンロードページに対するアクセス数は計48,140件、月平均4,012件あり、ダウンロードされた農薬情報については、基本情報が月平均2,070件、詳細情報は月平均1,232件であった。

また、ダウンロードデータの二次利用（私的使用又は引用等著作権法上認められた行為以外の引用、転載、複製、改変等（再配信を含む）及び商業目的での利用）の要望が13件あった。

b ホームページの「ご意見・お問い合わせ」の「農薬の登録情報等に関するお問い合わせ」のコーナーにおいて消費者、生産者、事業者等からの問い合わせ143件（平

		<p>○ 消費者、生産者、事業者等からホームページに寄せられた意見を検討するとともに、必要に応じ、情報提供業務の改善を図る。</p>	<p>成19年度計138件及び平成18年度未回答の5件)のうち140件(対象外の3件を除く)について適切に回答した。</p> <p>問い合わせがあったから回答までの期間は2週間以内と定め、期間内に回答した問い合わせは133件(95.0%)であった。</p> <p>○ 各四半期ごとに寄せられた質問、意見のとりまとめを行い、ホームページの「ご意見・お問い合わせ」の「農業の登録情報等に関するお問い合わせ」のコーナーの「よくある質問」を追加・更新した。</p> <p>また次の要望に対応した。</p> <p>(a) 農業登録情報のダウンロード形式でのデータ提供は、Excel形式で行っているが、Excel以外の形式でも提供して欲しい旨要望があったので、平成19年11月よりcsv形式ファイルについてもダウンロード形式での提供を行うよう対応した。</p> <p>(b) 農業の毒性に関する試験の適正実施について(平成11年10月1日付11農産第6283号農林水産省農産園芸局長通知)の英訳をホームページの「農業検査関係」のコーナーに掲載した。</p> <p>(c) 農業取締法(昭和23年7月1日法律第82号)の英訳をホームページの「農業検査関係」のコーナーに掲載した。</p> <p>(d) 国内のGLP試験施設の要望に応じて、国内農業GLP適合確認施設一覧をホームページの「農業検査関係」のコーナーに掲載した。</p> <p>(e) 食品安全委員会において評価された21農業の資料概要をホームページの「農業検査関係」のコーナーに掲載した。</p>
<p>○ アンケート調査の実施 センターが行う農業の登録及び適用病害虫等の変更の登録に係る農業の検査等の業務について、申請者及び国内管理人に対しアンケート調査を行い、その結果を分析するとともに、当該業務の質の向上を図る。</p>	<p>○ アンケート調査の実施 業務の質及びサービスの一層の向上を図るため、センターが行う農業の検査等の業務について、次に掲げるとおりアンケート調査を実施する。</p> <p>(7) 農業登録申請者及び国内管理人に対するアンケート調査</p> <p>(4) 農業登録情報利用者に対す</p>	<p>○ アンケート調査の実施 センターの業務の質及びサービスの一層の向上を図るため、農業登録申請者及び国内管理人に対してアンケート調査を実施する。</p>	<p>○ アンケート調査の実施 行政サービスの改善について、農業登録申請者及び国内管理人(総計174者)に対し、郵送によるアンケート調査を行った。</p> <p>アンケートの総回収数は79件(回収率45.4%)であった。複数あった要望(指摘)については、改善措置を検討し、業務の改善を図った。また、アンケート結果及び改善措置について、申請者及び国内管理人あて送付した。</p>

るアンケート調査			
<p>③ 農薬取締法に基づく立入検査及び集取業務 農薬取締法第13条の2及び第15条の3の規定に基づく農薬等の集取及び立入検査を行うに当たっては、農林水産大臣の指示に従い適切かつ迅速に実施する。 具体的には、集取及び立入検査実施後、その結果を1か月以内に農林水産大臣に報告するものとする^(注2)。</p> <p>(注2) 集取対象農薬の検査に時間を要する場合には、当該検査結果が得られ次第、その結果を農林水産大臣に報告するものとする。</p>	<p>③ 農薬取締法に基づく立入検査及び集取業務 農薬取締法第13条の2及び第15条の3の規定に基づく農薬等の集取及び立入検査を行うに当たっては、それらの実施後、その結果を農林水産大臣に1か月以内に報告するため、次に掲げる取組を実施する。ただし、集取農薬の検査に時間を要する場合には、当該検査結果が得られ次第、その結果を農林水産大臣に報告するものとする。</p> <p>ア マニュアルの改善 立入検査マニュアル及び集取マニュアルについて、必要に応じて見直しを行い、集取した農薬等の検査の迅速化を図る。</p> <p>イ 研修の実施等 集取及び立入検査について未経験の職員又は経験数が少ない職員については、的確かつ効率的な検査が行えるよう、知識及び技術の習得に必要な研修を実施する。</p> <p>ウ 事務処理の迅速化 通常の立入検査について、決</p>	<p>③ 農薬取締法に基づく立入検査及び集取業務 農薬取締法第13条の2及び第15条の3の規定に基づく農薬等の集取及び立入検査を行うに当たっては、それらの実施後、検査の結果を農林水産大臣に1か月以内に報告するため、次に掲げる取組を実施する。 ただし、集取農薬の検査に時間を要する場合には、当該検査結果が得られ次第、その結果を農林水産大臣に報告するものとする。</p> <p>ア マニュアルの改善 (ア) 立入検査マニュアルについて必要に応じて見直しを行う。 (イ) 集取マニュアルについて必要に応じて見直しを行う。</p> <p>イ 研修の実施等 集取及び立入検査について未経験の職員又は経験数が少ない職員については、的確かつ効率的な検査が行えるよう、知識及び技術の習得のため、体系的な研修計画の中で研修するとともに、立入検査に同行させる。</p> <p>ウ 事務処理の迅速化 決裁等事務処理の迅速化を図るた</p>	<p>③ 農薬取締法に基づく立入検査及び集取業務 農林水産大臣から指示のあった、28都道府県下の87製造場に対して立入検査を実施するとともに、検査のため34点の農薬を集取、分析した。</p> <p>○ 製造場に対する立入検査等 農林水産大臣から指示のあった新規化合物農薬を製造している製造場及び近年検査を実施していない製造場を対象に、農薬の製造及び品質管理状況、法定事項の遵守事項等の検査を実施するとともに、農林水産省の依頼により事故災害防止に対する調査を行った。 農林水産大臣からの9件(87製造場)の立入検査実施指示に対し、立入検査実施後、大臣への結果報告に要した期間は次のアからウの措置を講じることにより、すべての検査で目標期間である1か月以内(最大24日、平均11.2日)に報告した。</p> <p>○ 集取農薬等の検査結果 立入検査において集取した34点(平成19年度分)について、有効成分の種類及び含有量、物理的・化学的性状、容器又は包装及びその表示事項等について検査を行った。</p> <p>ア マニュアルの改善 平成19年度においては、マニュアル等の改訂を要する事項はなかった。</p> <p>イ 研修の実施等 立入検査について未経験の職員1名に対し研修を実施した。</p> <p>ウ 事務処理の迅速化 平成18年度に定めた立入検査に係る決裁等事務処理の運用</p>

	裁等の事務処理の迅速化を図る。	め、決裁関係規程の一層適切な運用を役職員へ周知する等改善策を講ずる。	を、平成19年度においても文書で役職員に更なる周知、徹底を図った。
<p>(3) 飼料及び飼料添加物関係業務</p> <p>① 飼料及び飼料添加物の検査等業務</p> <p>ア 飼料及び飼料添加物の基準・規格等の設定に関する調査 飼料の安全性を向上させるため、次に掲げる飼料及び飼料添加物の基準・規格等の設定に関する調査を行う。</p> <p>(7) 飼料又は飼料添加物の基準・規格等に関する最新の科学的知見、諸外国における規制の状況、関係する他法令による規制の専門的・技術的な内容等の調査を実施し、当該調査結果を事業年度ごとに取りまとめる。</p> <p>(1) 飼料添加物の指定に係る動物試験等の信頼性を確保するため、飼料添加物の動物試験の実施に関する基準に基づく検査を行う。</p>	<p>(3) 飼料及び飼料添加物関係業務</p> <p>① 飼料及び飼料添加物の検査等業務</p> <p>ア 飼料及び飼料添加物の基準・規格等の設定に関する調査 飼料及び飼料添加物の基準・規格等の設定に関する調査における情報の収集・提供に当たっては、必要に応じて1(2)の情報提供業務と連携しつつ、次に掲げる取組を実施するものとする。</p> <p>(7) 飼料又は飼料添加物の基準・規格等に関する最新の科学的知見を文献やインターネット等により収集し、諸外国における規制の状況・情報を入力し、関係する他法令による規制の専門的・技術的な内容等の調査を事業年度ごとに取りまとめる。</p> <p>また、農林水産省からの要請により、農林水産省が検討を行っている飼料又は飼料添加物の基準・規格、検討資料等の妥当性について検討を行う。</p> <p>(1) 飼料添加物の指定に係る動物試験等の信頼性を確保するため、飼料添加物の動物試験の実施に関する基準に基づく検査を行う。また、飼料添加</p>	<p>(3) 飼料及び飼料添加物関係業務</p> <p>① 飼料及び飼料添加物の検査等業務</p> <p>ア 飼料及び飼料添加物の基準・規格等の設定に関する調査</p> <p>(7) 現在指定されている153品目のうち、15品目について、基準・規格等に関する最新の科学的知見を文献やインターネット等により収集し、外国における規制の状況・情報を入力し、関係する他法令による諸規制の専門的・技術的な内容等の調査を実施し、調査結果を取りまとめる。</p> <p>また、農林水産省からの要請により、農林水産省が検討を行っている飼料又は飼料添加物の基準・規格、検討資料等の妥当性について検討を行う。</p> <p>(1) 飼料添加物の指定に係る動物試験等の信頼性を確保するため、飼料添加物の動物試験の実施に関する基準に基づく検査を行う。また、飼料添加物の動物試験の実施に関する基</p>	<p>(3) 飼料及び飼料添加物関係業務</p> <p>① 飼料及び飼料添加物の検査等業務</p> <p>ア 飼料及び飼料添加物の基準・規格等の設定に関する調査 次に掲げる調査を実施することにより、飼料の安全性の向上に努めた。</p> <p>(7) 現在、飼料添加物に指定されている153品目のうちビタミン6品目、ミネラル6品目、色素3品目の計15品目について、基準・規格等に関する最新の科学的知見に関する文献を収集するとともに、諸外国における規制状況の情報を入手し、関係する他法令による諸規制の専門的・技術的な内容等の調査を行い、その結果を取りまとめた。</p> <p>また、飼料添加物に新規指定申請されているL-アスコルビン酸ナトリウム等3品目について農林水産省からの要請により、基準・規格、申請資料等の妥当性について検討を行った。</p> <p>(1) 飼料添加物の動物試験の実施に関する基準に基づく検査は申請がなかったため実施しなかった。</p> <p>なお、飼料添加物の動物試験の実施に関する基準についてOECD-GLPと飼料添加物GLPの相違点等を調査し、取りまとめた。</p>

また、飼料添加物の動物試験の実施に関する基準、OECD安全性試験実施基準等、諸外国における規制の状況、関係する他法令による規制の専門的・技術的な内容等の調査を行い、当該調査結果を取りまとめる。

(ウ) 飼料及び飼料添加物の分析法の公定法化に資するため、分析法の開発・改良を中期目標期間中に実施するとともに、分析法の解説書を作成する。分析法の開発・改良の結果は、事業年度ごとに取りまとめて公表する。なお、分析法の開発・改良に当たっては、必要に応じて他の検査等業務で得られたノウハウや知見の活用を図るものとする。

(I) 飼料等に関する基準・規格等の改善に資するため、飼料等に関する国際機関の基準・規格等の策定に参画する。

物の動物試験の実施に関する基準、OECD安全性試験実施基準等、諸外国における規制の状況、関係する他法令による規制の専門的・技術的な内容等の調査を行い、当該調査結果を取りまとめる。

(ウ) 飼料及び飼料添加物の分析法の公定法化に資するため、分析法の開発又は改良を行う成分を年度計画に定めて中期目標期間中に30件以上の分析法の開発又は改良を実施するとともに、その結果を事業年度ごとに取りまとめて公表する。なお、分析法の開発・改良に当たっては、必要に応じて他の検査等業務で得られたノウハウや知見の活用を図るものとする。
また、中期目標期間中に分析法全般の解説書を作成する。

(I) 飼料等に関する基準・規格等の改善に資するため、ISO/TC34/SC10の国内審議団体として、規格基準等の策定に参画するとともに、必要に応じてその他の国際会議等に参画する。

準、OECD安全性試験実施基準等、外国における規制の状況、関係する他法令による規制の専門的・技術的な内容等の調査を行い、当該調査結果を取りまとめる。

(ウ) 飼料及び飼料添加物の分析法の公定法化に資するため、次に掲げる分析法の開発又は改良を実施するとともに、その結果を取りまとめて公表する。

- a アジンホスメチル等の同時分析法
- b アメトリン等の同時分析法
- c マラカイトグリーン等の同時分析法
- d ナレド等の同時分析法
- e 低濃度クロラムフェニコールの分析法

(I) 飼料等に関する基準・規格等の改善に資するため、次に掲げる業務を実施する。

- a 国際基準との比較検討
- b 国際基準設定のための共同試験への参加

(ウ) 飼料及び飼料添加物の分析法の公定法化に資するため、年度計画に定めた5課題を含め、次の12課題（22成分）の分析法の開発又は改良を行い、調査結果を「飼料研究報告」として取りまとめた。

また、既存の分析法全般について見直しを行い、飼料分析基準全面改正案を取りまとめた。

- a アジンホスメチル等の同時分析法（2成分）
- b アメトリン等の同時分析法（3成分）
- c マラカイトグリーン等の同時分析法（2成分）
- d ナレド等の同時分析法（2成分）
- e 低濃度クロラムフェニコールの分析法（1成分）
- f EPTC等の同時分析法（2成分）
- g テブコナゾールの分析法（1成分）
- h サリノマイシンナトリウム等の一斉微量定量法（5成分）
- i 反すう動物由来DNAの検出法（1成分）
- j 豚由来DNAの検出法（1成分）
- k 水分の定量法の改良（1成分）
- l 耐熱性 α -アミラーゼ処理中性デタージェント繊維の分析法の改良（1成分）

(I) 飼料等に関する基準・規格等の改善に資するため、次に掲げる業務を行った。

- a カルシウム、マグネシウム、カリウム及びナトリウムについて、我が国の公定法（飼料分析基準）と国際基準（ISO）法との定量値の差異の原因を確認するための検討を行った。
- b 国際基準設定のための共同試験については、該当する試験が実施されなかった。

		<p>c 必要に応じてISO会議に参加するとともに、国際規格案等への意見の提出</p>	<p>c ISO会議については、開催されなかった。また、国際規格案等への意見照会はなかった。</p>
<p>イ モニタリング検査 飼料の安全性を向上させるため、次に掲げるモニタリング検査を行う。</p> <p>(7) 飼料中の飼料添加物、飼料又は飼料添加物中の有害物質、病原微生物、肉骨粉等及び遺伝子組換え体のモニタリング検査を実施し、その結果を事業年度ごとに取りまとめ公表する。 また、このうち特に広域的に流通する主要な輸入飼料穀物や乾牧草等の有害物質等による汚染状況については、四半期ごとに取りまとめ公表する。</p>	<p>イ モニタリング検査 飼料の安全性を向上させるため、事業年度ごとにモニタリング検査計画を策定し、次に掲げるモニタリング検査を行う。その際、プロジェクトチームを活用して、検査等業務と連携してモニタリング検査計画の策定を行うとともに、必要に応じてモニタリング検査結果について4のリスク管理に資するための有害物質の分析業務との共有を図るものとする。</p> <p>(7) 飼料中の飼料添加物、飼料又は飼料添加物中の有害物質、残留農薬、病原微生物、肉骨粉等及び遺伝子組換え体のモニタリング検査については、輸入飼料中の有害物質の混入等、飼料の安全性に関する課題を勘案し、検査の必要性に応じて重点化し、モニタリング検査項目及び成分点数を年度計画に定めて実施する。 モニタリング検査結果は、事業年度ごとに取りまとめ、ホームページに公表するとともに、このうち特に広域的に流通する主要な輸入飼料穀物や乾牧草等の有害物質等による汚染状況については、四半期ごとに取りまとめ公表する。</p>	<p>イ モニタリング検査 飼料の安全性を向上させるため、モニタリング検査計画を策定し、次に掲げるモニタリング検査を行う。</p> <p>(7) 飼料中の飼料添加物、飼料又は飼料添加物中の有害物質、病原微生物、肉骨粉等及び遺伝子組換え体のモニタリング検査については、次に掲げるモニタリング検査項目及び成分点数を目標として実施する。</p> <p>a 飼料及び飼料添加物中の飼料添加物の基準・規格適合検査として、500点 b 飼料中の農薬、かび毒、有害金属等の有害物質の基準適合検査として、50,000点 c 飼料中の病原微生物の基準・規格適合検査として、250点 d 飼料中の肉骨粉等の分析・鑑定として、1,000点 モニタリング検査結果は、事業年度ごとに取りまとめ、ホームページに公表するとともに、このうち特に広域的に流通する主要な輸入飼料穀物や乾牧草等の有害物質等による汚染状況については、</p>	<p>イ モニタリング検査 モニタリング検査について計画を策定して次に掲げるとおり実施し、飼料の安全性の向上に努めた。</p> <p>(7) 飼料中の飼料添加物、飼料又は飼料添加物中の有害物質、病原微生物、肉骨粉等及び遺伝子組換え体のモニタリング検査については、次のとおり実施し、いずれも年度計画に定めた目標を達成した。</p> <p>a 飼料及び飼料添加物中の飼料添加物の基準・規格適合検査として 606点 b 飼料中の農薬、かび毒、有害金属等の有害物質の基準適合検査として 78,911点 c 飼料中の病原微生物の基準・規格適合検査として 296点 d 飼料中の肉骨粉等の分析・鑑定として 1,378点 モニタリング検査結果については、事業年度ごとに取りまとめ、ホームページに公表した。このうち特に広域的に流通する主要な輸入飼料穀物や乾牧草等の有害物質等による汚染状況については、四半期ごとに取りまとめ公表した。</p>

<p>このほか、農林水産省が策定する「サーベイランス・モニタリング計画」に含まれる有害化学物質・品目についての検査を実施する際には、「サーベイランス・モニタリングの計画・実施及び結果の評価・公表に関するガイドライン」(平成17年6月7日付け17消安第2330号農林水産省消費・安全局長通知。以下「評価・公表ガイドライン」という。)に従って迅速かつ確に行い、その結果を農林水産省に報告する。</p> <p>(イ) 抗菌性飼料添加物を含有する飼料の適正な使用に資するため、畜産農家等における抗菌性飼料添加物の耐性菌発現モニタリング調査を動物医薬品検査所及び都道府県と連携して実施し、その結果を事業年度ごとに取りまとめて公表する。</p>	<p>このほか、農林水産省が策定する「サーベイランス・モニタリング計画」に含まれる有害化学物質・品目についての検査を実施する際には、「サーベイランス・モニタリングの計画・実施及び結果の評価・公表に関するガイドライン」(平成17年6月7日付け17消安第2330号農林水産省消費・安全局長通知。以下「評価・公表ガイドライン」という。)に従って迅速かつ確に行い、その結果を農林水産省に報告する。</p> <p>(イ) 抗菌性飼料添加物を含有する飼料の適正な使用に資するため、畜産農家等における抗菌性飼料添加物の耐性菌発現モニタリング調査を動物医薬品検査所及び都道府県と連携して実施し、その結果を事業年度ごとに取りまとめて公表する。</p>	<p>四半期ごとに取りまとめて公表する。</p> <p>このほか、農林水産省が策定する「サーベイランス・モニタリング計画」に含まれる有害化学物質・品目についての検査を実施する際には、農林水産省が定めている「サーベイランス・モニタリングの計画・実施及び結果の評価・公表に関するガイドライン」(平成17年6月7日付け17消安第2330号農林水産省消費・安全局長通知)に従って迅速かつ確に行い、その結果を農林水産省に報告する。</p> <p>(イ) 抗菌性飼料添加物を含有する飼料の適正な使用に資するため、畜産農家等における抗菌性飼料添加物の耐性菌発現モニタリング調査を動物医薬品検査所及び都道府県と連携して実施し、取りまとめて公表する。</p>	<p>なお、このうち農林水産省が策定する「サーベイランス・モニタリング年次計画」に含まれる有害化学物質/品目についての検査を実施する際は、農林水産省が定めている「サーベイランス・モニタリングの計画・実施及び結果の評価・公表に関するガイドライン」(平成17年6月7日付け17消安第2330号農林水産省消費・安全局長通知)に従って迅速かつ確に行い、その結果を農林水産省に報告した。</p> <p>(イ) 動物医薬品検査所及び都道府県と連携して畜産農家等における抗菌性飼料添加物の耐性菌発現モニタリング調査を実施した。また、動物医薬品検査所と共同で調査結果を取りまとめた。</p> <p>なお、結果は家畜衛生週報(農林水産省消費・安全局畜産安全管理課、動物衛生課発行)に掲載した。</p>
<p>ウ 飼料の使用に起因する家畜被害の発生時の対応</p> <p>飼料の使用に起因する有害畜産物の生産若しくは家畜等の被害の発生又は有害な飼料の流通が確認された場合に被害の拡大等を確実に防止する観点から、農林水産省、都道府県等と連携しつつ、機動的かつ柔軟な組織体制をとるなど、迅速かつ効率的に有害な</p>	<p>ウ 飼料の使用に起因する家畜被害の発生時の対応</p> <p>飼料の使用に起因する有害畜産物の生産若しくは家畜等の被害の発生又は有害な飼料の流通が確認された場合に被害の拡大等を確実に防止する観点から、農林水産省、都道府県等と連携しつつ、機動的かつ柔軟な組織体制をとるなど、迅速かつ効率的に有害な飼料の流通実態の把</p>	<p>ウ 飼料の使用に起因する家畜被害の発生時の対応</p> <p>飼料の使用に起因する有害畜産物の生産若しくは家畜等の被害の発生又は有害な飼料の流通が確認された場合には、被害の拡大等を確実に防止する観点から、農林水産省及び都道府県等と連携しつつ、機動的かつ柔軟な組織体制をとるなど、迅速かつ適切に有害な飼料の流通実態の把握、原因の究明等を行うため必要な検査等を行う。</p>	<p>ウ 飼料の使用に起因する家畜被害の発生時の対応</p> <p>飼料の使用に起因する有害畜産物の生産若しくは家畜等の被害発生又は有害な飼料の流通が確認された場合における被害の拡大等を確実に防止する観点から、農林水産省及び都道府県等と連携しつつ、スタッフ制を活用して機動的かつ柔軟な組織体制をとる、次に掲げる事項について迅速かつ適切に対応した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・エンドファイト毒素による中毒が疑われる事例の原因究明のため、給与した飼料の分析(4件、4点) ・硝酸態窒素による中毒が疑われる事例の原因究明のため

<p>飼料の流通実態の把握、原因の究明等を行う。</p>	<p>握、原因の究明等を行うため必要な検査等を行う。</p> <p>また、家畜被害の発生時の対応を迅速かつ適切に行えるよう、緊急時対応マニュアルの整備を行う。</p>	<p>また、整備した緊急時対応マニュアルを必要に応じて、見直す。</p>	<p>め、給与した飼料の分析（1件、4点）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・輸入魚粉中からメラミンが検出されたことから、緊急にメラミンの分析法の検討及び分析精度の検証を行い、輸入魚粉の分析（1件、17点） <p>また、家畜被害等発生時の迅速かつ適切な対応に資するため既定の緊急時対応マニュアルを改正し、インターネットVPN等を活用した報告体制を確立した。</p>
<p>エ 標準品等の指定</p> <p>飼料及び飼料添加物の成分規格等に関する省令（昭和51年農林省令第35号）の規定に基づく抗生物質の常用標準品（抗菌性物質の力価を定めるための標準として、センターが指定する特定製造番号の抗菌性物質をいう。）の指定は、少なくとも2年に1回以上行う。</p> <p>なお、常用標準品の配布は、申請を受理した日から7業務日以内に行う。</p>	<p>エ 標準品等の指定</p> <p>飼料及び飼料添加物の成分規格等に関する省令（昭和51年農林省令第35号）の規定に基づく抗生物質の常用標準品（抗菌性物質の力価を定めるための標準として、センターが指定する特定製造番号の抗菌性物質をいう。）の指定に当たっては、抗生物質の試験に支障を生ずることのないよう留意するとともに、少なくとも2年に1回以上指定を行うものとする。</p> <p>なお、常用標準品の配布については、事務処理の迅速化により、申請を受理した日から7業務日以内に行う。</p>	<p>エ 標準品等の指定</p> <p>飼料及び飼料添加物の成分規格等に関する省令（昭和51年農林省令第35号）の規定に基づく抗生物質の常用標準品（抗菌性物質の力価を定めるための標準として、センターが指定する特定製造番号の抗菌性物質をいう。）の指定に当たっては、必要に応じて常用標準品の指定を行うとともに、常用標準品の配布については、事務処理の迅速化により申請を受理した日から7業務日以内に行う。</p>	<p>エ 標準品等の指定</p> <p>21種類の抗生物質について常用標準品の指定を行い、21種類の常用標準品499本について、申請を受理した日から7業務日以内に配布した。</p>
<p>オ 調査研究</p> <p>飼料の安全性及び品質を向上させるため、必要に応じて飼料の安全性及び品質に関する調査等を実施し、調査結果を取りまとめる。</p>	<p>オ 調査研究</p> <p>飼料の安全性及び品質を向上させるため、飼料の安全性及び品質の改善に関する調査研究のうち専門的・技術的事項に重点化し、農林水産省の要請を優先して調査研究を実施し、調査研究の結果を取りまとめる。</p>	<p>オ 調査研究</p> <p>農林水産省等からの次に掲げる委託事業等について調査研究を行うとともに、緊急時等の農林水産省からの要請を優先して調査研究を実施し、調査研究の結果を取りまとめる。</p> <p>(7) 飼料中のダイオキシン型物質のスクリーニング分析手法の開発</p>	<p>オ 調査研究</p> <p>次に掲げる調査を実施し、結果を取りまとめることにより、飼料の安全性及び品質の向上に努めた。</p> <p>(7) 飼料中のダイオキシン型物質のスクリーニング分析手法の開発</p> <p>【成果：農林水産研究高度化事業「飼料中のダイオキシン型物質のスクリーニング分析手法の開発」（平成17年度から継続）として、飼料原料（魚油、魚粉、動物性油脂及び肉骨粉）37検体の収集及び分析並びに事業中核機関である動物衛生研究所への検体の提供及び結果の報告】</p>

		<p>(イ) エンドファイト毒素の牛に対する影響及び畜産物残留性の解明</p> <p>(ウ) 飼料及び堆肥に残留する除草剤の簡易判定法と被害軽減対策の確立</p> <p>(イ) 自給飼料のマイコトキシン汚染実態調査と簡易分析法の確立</p> <p>(オ) 動物由来たん白質の検出法（エライザ法及びイムノクロマト法）の開発</p>	<p>(平成19年度終了)</p> <p>(イ) エンドファイト毒素の牛への影響及び畜産物残留性の検討 【成果；農林水産研究高度化事業「エンドファイト毒素の牛への影響及び畜産物残留性の検討」（平成17年度から継続）として、飼養試験に用いた乾牧草中のロリトレムB59点及び飼養試験終了後の牛組織中のロリトレムB90点の分析並びに中核機関である動物衛生研究所への結果の報告】（平成19年度終了）</p> <p>(ウ) 飼料及び堆肥に残留する除草剤の簡易判定法と被害軽減対策の確立 【成果；農林水産研究高度化事業「飼料及び堆肥に残留する除草剤の簡易判定法と被害軽減対策の確立」として、平成17年度に確立した飼料用乾牧草中の残留除草剤クロピラリドの分析法の共同試験の実施による分析法の妥当性の確認並びに乾牧草3種類8点の分析及び畜産草地研究所への結果の報告】（平成20年度継続）</p> <p>(イ) 自給飼料のマイコトキシン汚染実態調査と簡易分析法の確立 【成果；農林水産省委託プロジェクト研究「粗飼料多給による日本型家畜飼養技術の開発」の一環として、デオキシニバレノール及びゼアラレノンの簡易分析法の共同試験の実施及び9種類のマイコトキシンについてトウモロコシサイレージ150点の調査並びに動物衛生研究所への結果の報告】（平成20年度継続）</p> <p>(オ) 動物由来たん白質の検出法【共同研究】 【成果；PCRによる飼料中の動物由来たん白質等の検出法について農業生物資源研究所と共同で以下の研究を実施した。本研究は職務発明に認定され、国内特許を出願した。 ① 動物グループを特異的に検出するプライマーを設計するためのプログラムソフトを開発した。 ② 反すう動物由来DNAを特異的に検出するプライマーを開発し、飼料分析基準に収載し、実用化した。 ③ 豚由来DNAを特異的に検出するプライマーを開発し、飼料分析基準に収載し、実用化した。 ④ 本法の共同分析を5試験室で実施し、分析法の妥当性を確認した。】（平成20年度継続）</p> <p>(カ) 麦類等のかび毒汚染実態調査 【成果；厚生労働省の「食品の安心・安全確保推進研究事</p>
--	--	--	---

			<p>業（食品のカビ毒汚染実態に関する研究）」に参画して、トウモロコシ3点、コーンフレーク20点、スイートコーン14点、コーングリッツ8点、コーンスターチ10点、枝豆10点、雑穀米20点、米10点の分析及び厚生労働省への結果の報告】（平成20年度継続）</p> <p>(キ) 飼料原料として使用されるソルガム中のゼアラレノン及びその代謝物について汚染状況調査〔共同研究〕 【成果：東京家政大学との共同研究を実施し、ソルガムにおけるゼアラレノンの汚染状況及び汚染原因菌を明らかにした。】（平成20年度継続）</p>
<p>カ 牛海綿状脳症の発生の防止のための対応</p> <p>我が国において牛海綿状脳症が発生したことを踏まえ、牛海綿状脳症の発生の防止を万全なものとするため、牛海綿状脳症の発生に関する感染源及び感染経路の究明のための国内及び海外の飼料工場等に対する飼料の流通経路等の調査を必要に応じて行う。</p>	<p>カ 牛海綿状脳症の発生の防止のための対応</p> <p>我が国において牛海綿状脳症が発生したことを踏まえ、牛海綿状脳症の発生の防止を万全なものとするため、牛海綿状脳症の発生に関する感染源及び感染経路の究明のための国内及び海外の飼料工場等に対する飼料の流通経路等の調査を必要に応じて行う。</p>	<p>カ 牛海綿状脳症の発生の防止のための対応</p> <p>我が国において牛海綿状脳症が発生したことを踏まえ、牛海綿状脳症の発生の防止を万全なものとするため、牛海綿状脳症の発生に関する感染源及び感染経路の究明のための国内及び海外の飼料工場等に対する飼料の流通経路等の調査を必要に応じて行う。</p>	<p>カ 牛海綿状脳症の発生の防止のための対応</p> <p>牛海綿状脳症の発生に関する感染源及び感染経路の究明のための国内及び海外の飼料工場等に対する飼料の流通経路等の調査については、農林水産省からの要請がなかったため、実施しなかった。</p>
<p>② 飼料及び飼料添加物の検定及び表示に関する業務</p> <p>特定飼料等のうち飼料添加物の検定及び表示の業務は、申請のあった日から20業務日以内に処理する。</p>	<p>② 飼料及び飼料添加物の検定及び表示に関する業務</p> <p>特定飼料等のうち飼料添加物の検定及び表示の業務について、適正に実施するとともに、事務処理の効率化により、申請を受理した日から20業務日以内に処理する。</p>	<p>② 飼料及び飼料添加物の検定及び表示に関する業務</p> <p>特定飼料等のうち飼料添加物の検定及び表示の業務について、適正に実施するとともに、事務処理の効率化により申請を受理した日から20業務日以内に処理する。</p>	<p>② 飼料及び飼料添加物の検定及び表示に関する業務</p> <p>特定飼料等のうち飼料添加物の検定及び表示に関する業務324件を適正に実施した。さらに、インターネットVPNを活用した事務処理等の効率化により申請のあった日から20業務日以内にすべて処理した。</p>
<p>③ 飼料について登録検定機関が行う検定に関する技術上の調査及び指導の業務登録検定機関の行う検定業務の適切な実施に資するため、検定実績のある登録検定機関に対して毎事業年度1回調査を実施す</p>	<p>③ 飼料について登録検定機関が行う検定に関する技術上の調査及び指導の業務</p> <p>登録検定機関の行う検定業務の適切な実施に資するため、検定実績のある登録検定機関に対して毎事業年度1回調査を実施</p>	<p>③ 飼料について登録検定機関が行う検定に関する技術上の調査及び指導の業務</p> <p>登録検定機関の行う検定業務の適切な実施に資するため、検定実績のある登録検定機関に対して年1回調査を実施するとともに、必要に応じて検定精</p>	<p>③ 飼料について登録検定機関が行う検定に関する技術上の調査及び指導の業務</p> <p>検定実績のある登録検定機関（2機関）に対して分析技術の維持状況を調査するとともに、技術的な指導を行うことにより、登録検定機関による検定業務の適切な実施を推進した。</p>

<p>るとともに、検定精度の管理等について技術的指導を行う。</p>	<p>するとともに、必要に応じて検定精度の管理等について技術的指導を行う。</p> <p>また、登録検定機関を対象として共通試料による共同試験を毎事業年度1回実施し、検定業務に係る技術水準を確認するとともに必要に応じて検査技術について技術的指導を行う。</p>	<p>度の管理等について技術的な指導を行う。</p> <p>また、登録検定機関を対象として共通試料による共同試験を年1回実施し、検定業務に係る技術水準を確認するとともに、必要に応じて検査技術について技術的指導を行う。</p>	<p>また、共通試料を用いた登録検定機関の技術水準の確認試験を7機関（10事業所）に対して実施することにより、検定業務に係る技術水準の維持・向上を図った。</p> <p>なお、検定機関の登録更新にあたり5機関（7事業所）に対して技術上の調査を実施した。</p>
<p>④ 飼料及び飼料添加物の製造設備、製造管理の方法等に関する検査等業務</p> <p>ア 特定飼料等製造業者の登録等の申請に係る検査特定飼料等製造業者の登録等の申請に係る検査については、検査に要する標準処理期間を中期計画に定め、当該標準処理期間内に検査を終了するよう努める。</p> <p>イ 規格設定飼料製造業者の登録等の申請に係る検査規格設定飼料製造業者の登録等の申請に係る検査については、検査に要する標準処理期間を中期計画に定め、当該標準処理期間内に検査を終了するよう努める。</p> <p>ウ 飼料及び飼料添加物の製造・品質管理の高度化に関する調査</p> <p>(7) 有害物質又は病原微生物による飼料の汚染及び反す</p>	<p>④ 飼料及び飼料添加物の製造設備、製造管理の方法等に関する検査等業務</p> <p>ア 特定飼料等製造業者の登録等の申請に係る検査</p> <p>特定飼料等製造業者（外国特定飼料等製造業者を除く。）の登録等の申請に係る検査については、検査に要する標準処理期間を50業務日と定め、事務処理の効率化を図り、当該標準処理期間内に検査を終了するよう努める。</p> <p>イ 規格設定飼料製造業者の登録等の申請に係る検査</p> <p>規格設定飼料製造業者（外国規格設定飼料製造業者を除く。）の登録等の申請に係る検査については、検査に要する標準処理期間を40業務日と定め、事務処理の効率化を図ることにより、当該標準処理期間内に検査を終了するよう努める。</p> <p>ウ 飼料及び飼料添加物の製造・品質管理の高度化に関する調査</p> <p>(7) 有害物質又は病原微生物による飼料の汚染及び反すう動</p>	<p>④ 飼料及び飼料添加物の製造設備、製造管理の方法等に関する検査等業務</p> <p>ア 特定飼料等製造業者の登録等の申請に係る検査</p> <p>特定飼料等製造業者（外国特定飼料等製造業者を除く。）の登録等の申請に係る検査については、検査に要する標準処理期間を50業務日と定め、事務処理の効率化を図り、当該標準処理期間内に検査を終了するよう努める。</p> <p>イ 規格設定飼料製造業者の登録等の申請に係る検査</p> <p>規格設定飼料製造業者（外国規格設定飼料製造業者を除く。）の登録等の申請に係る検査については、検査に要する標準処理期間を40業務日と定め、事務処理の効率化を図り、当該標準処理期間内に検査を終了するよう努める。</p> <p>ウ 飼料及び飼料添加物の製造・品質管理の高度化に関する調査</p> <p>(7) 有害物質又は病原微生物による飼料の汚染、反すう動物用飼料への肉</p>	<p>④ 飼料及び飼料添加物の製造設備、製造管理の方法等に関する検査等業務</p> <p>ア 特定飼料等製造業者の登録等の申請に係る検査</p> <p>特定飼料等製造業者の登録等の申請はなかった。</p> <p>イ 規格設定飼料製造業者の登録等の申請に係る検査</p> <p>規格設定飼料製造業者の登録等の申請はなかった。</p> <p>ウ 飼料及び飼料添加物の製造・品質管理の高度化に関する調査</p> <p>(7) 飼料及び飼料添加物の製造・品質管理の方法等に関する調査として、次の業務を実施した。</p>

う動物用飼料への肉骨粉等の混入等による有害な飼料の流通を未然に防止する観点から、飼料及び飼料添加物の製造設備、製造・品質管理の方法等に関する調査を実施し、その管理の高度化に係る技術的指導を行う。

(イ) 収去品の検査の結果、基準・規格等に抵触する事例等が認められた場合には、製造・品質管理の方法等の改善について技術的指導及び情報の提供を行う。

(ウ) 牛海綿状脳症の発生の防止に万全を期する観点から、動物由来たん白質、動物性油脂及びペットフードの製造事業場の製造設備、製造・品質管理の方法等に関する調査を実施し、製造基準に適合するものと認められた製造事業場を公表する。

(イ) 飼料を海外に輸出する業者等からの要請に基づき、当該飼料の製造事業場の製造設備、製造・品質管理の方法等に関する調査を実施し、輸出先国の製造基準等

動物用飼料への肉骨粉等の混入等による有害な飼料の流通を未然に防止する観点から、飼料及び飼料添加物の製造設備、製造・品質管理の方法等に関する調査を実施し、その管理の高度化に係る技術的指導を行う。

また、製造管理等の状況をデータベース化し、技術的指導の高度化に活用する。

(イ) 収去品の検査の結果、基準・規格等に抵触する事例等が認められた場合には、製造・品質管理の方法等の改善について、センターの専門的知見から技術的指導及び情報の提供を行う。

(ウ) 牛海綿状脳症の発生の防止に万全を期する観点から、動物由来たん白質、動物性油脂及びペットフードの製造事業場の製造設備、製造・品質管理の方法等に関する調査を実施し、製造基準に適合するものであると認められた製造事業場を公表する。

(イ) 飼料を海外に輸出する業者等からの要請に基づき、当該飼料の製造事業場の製造設備、製造・品質管理の方法等に関する調査を実施し、輸出先国の製造基準等への適否を

骨粉等の混入及び抗菌性物質に関する基準・規格等を逸脱した飼料及び飼料添加物による有害な飼料の流通を未然に防止する観点から、飼料及び飼料添加物の製造設備、製造・品質管理の方法等に関する調査を実施し、その管理の高度化に係る技術的指導を行う。

また、製造管理等の状況をデータベース化し、技術的指導の高度化に活用する。

(イ) 収去品の検査の結果、基準・規格等に抵触する事例等が認められた場合には、製造・品質管理の方法等の改善について、センターの専門的知見から技術的指導及び情報の提供を行う。

(ウ) 牛海綿状脳症の発生の防止に万全を期する観点から、動物由来たん白質、動物性油脂及びペットフードの製造事業場の製造設備、製造・品質管理の方法等に関する調査を実施し、製造基準に適合するものと認められた製造事業場を公表する。

(イ) 飼料を海外に輸出する業者等からの要請に基づき、当該飼料の製造事業場の製造設備、製造・品質管理の方法等に関する調査を実施し、輸出先国の製造基準等への適否を確認する。

a 牛等用飼料に肉骨粉等が混入することを防止するため、牛等用飼料等を製造する事業場443箇所に対して検査を実施し、肉骨粉等の交差汚染防止に係る製造・品質管理の高度化に係る技術的指導を行った。

また、検査及び技術的指導に活用するため、製造管理等の実施状況を確認するチェックリストを作成してデータベース化した。

b 抗菌性飼料添加物を含有する配合飼料及び飼料添加物複合製剤の製造管理及び品質管理に関するガイドラインに基づき、配合飼料20事業場及び飼料添加物9事業場について確認検査を実施し、製造事業場確認証を発給した。

(イ) 収去品の検査の結果、基準規格等に抵触する事例が2件認められたことから、製造・品質管理の方法等の改善に資するためセンターの専門的知見による技術的指導及び情報の提供を行った。

(ウ) 動物由来たん白質、動物性油脂及びペットフードの製造事業場の設備、製造・品質管理の方法等に関する調査として、次の業務を実施した。

a 農林水産大臣の確認を要する動物由来たん白質及び動物性油脂を製造するすべての事業場（245箇所）について、製造・品質管理状況を確認し、そのうち新たに大臣確認を受けた製造事業場19箇所をホームページに公表した。

b 輸入魚粉等の輸入業者及び輸入先の製造事業場の管理状況を333件確認した。

c ペットフード等の製造事業場からの申請に応じ製造基準適合確認検査を18件実施し、製造基準に適合すると認められた事業場をホームページに公表した。

(イ) 飼料を海外に輸出する業者からの要請に基づき、動物検疫所の輸出証明書の発行要件となる肉骨粉等の使用に関する製造基準適合確認検査を17件実施した。

への適否を確認する。	確認する。		
<p>⑤ ①から④までの業務に附帯する業務 飼料の安全性及び品質を向上させるため、都道府県、畜産農家等からの飼料及び飼料添加物の依頼分析については、①から③まで及び⑥並びに5の業務に支障のない範囲内で実施する。</p>	<p>⑤ ①から④までの業務に附帯する業務 飼料の安全性及び品質の向上に資する観点から、都道府県、畜産農家等からの飼料及び飼料添加物の依頼分析については、①から③まで及び⑥並びに5の業務に支障のない範囲内で実施する。 また、次に掲げる依頼検査の内容に応じて標準処理期間を定め、その期間内に適切に処理する。 (7) 化学分析（ㇿを除く。） 30業務日 (イ) 生物分析 30業務日 (ウ) ダイオキシン類分析 60業務日 標準処理期間内に適切に処理するため、分析技術の高度化、事務手続の合理化を図る。</p>	<p>⑤ ①から④までの業務に附帯する業務 飼料の安全性及び品質の向上に資する観点から、都道府県、畜産農家等からの飼料及び飼料添加物の依頼分析については、業務に支障のない範囲内で実施する。 また、次に掲げる依頼分析の内容に応じて標準処理期間を定め、その期間内に適切に処理する。 (7) 化学分析（ㇿを除く。） 30業務日 (イ) 生物分析 30業務日 (ウ) ダイオキシン類分析 60業務日 標準処理期間内に上記の依頼分析を適切に処理するため、分析技術の高度化、事務手続の合理化を図る。</p>	<p>⑤ ①から④までの業務に附帯する業務 飼料の安全性及び品質の向上に資する観点から都道府県、畜産農家等からの飼料等の依頼分析については、5件（49成分点数）実施した。 また、実施に当たっては、分析法の開発等分析技術の高度化及び決裁等の事務の簡素化による事務手続の合理化を図ることにより、依頼分析の内容に応じて標準処理期間内に適切に処理した。</p>
<p>⑥ 飼料安全法に基づく立入検査等業務 ア 飼料安全法に基づく立入検査を行うに当たっては、農林水産大臣の指示に従い適正に実施するとともに、立入検査及び質問の結果については、立入検査を実施した日から30業務日以内に農林水産大臣に報告する。 また、農林水産大臣への報告までに要する期間については、中期目標期間の最終事業年度までに5業務日短縮する。</p>	<p>⑥ 飼料安全法に基づく立入検査等業務 ア 飼料安全法に基づく立入検査を行うに当たっては、農林水産大臣の指示に従い適正に実施するとともに、立入検査及び質問の結果の報告については、立入検査を実施した日から30業務日以内に農林水産大臣に報告する。 また、農林水産大臣への報告までに要する期間については、中期目標期間の最終事業年度までに事務処理の効率化により5業務日短縮する。</p>	<p>⑥ 飼料安全法に基づく立入検査等業務 ア 飼料安全法に基づく立入検査を行うに当たっては、農林水産大臣の指示に従い適正に実施するとともに、立入検査及び質問の結果の報告については、立入検査等を実施した日から30業務日以内に農林水産大臣に報告する。 また、農林水産大臣への報告までに要する期間の短縮に資するため、LAN等を活用して本部及び各地方組織間の報告を電子媒体で送付することにより簡素化する。</p>	<p>⑥ 飼料安全法に基づく立入検査等業務 ア 立入検査及び質問の結果の報告については、業務の効率化により立入検査実施後の事務処理等の迅速化を図り、立入検査の日からすべて30業務日以内に農林水産大臣に報告した。 また、立入検査等の結果の農林水産大臣への報告については、事務処理に係る既存の規程の改訂を行い、インターネットVPNを活用した本部及び各事務所間における報告事務の簡素化等、報告に要する期間の短縮に努めた。</p>

<p>イ 収去品の試験結果については、飼料及び飼料添加物の分析・鑑定試験に要する標準処理期間を中期計画に定め、当該標準処理期間内に終了するよう努めるとともに、試験が終了した日から20業務日以内に農林水産大臣に報告する。</p> <p>また、農林水産大臣への報告までに要する期間については、中期目標期間の最終事業年度までに5業務日短縮する。</p> <p>ウ 収去品等の試験結果の信頼性を確保する観点から、信頼性保証部門等から構成する信頼性保証体制及び試験操作手順書に基づき、試験施設において試験を円滑に実施する。</p>	<p>イ 収去品の試験結果の報告については、飼料及び飼料添加物の分析・鑑定試験に要する標準処理期間を収去した日から20業務日と定め、当該標準処理期間内に試験を終了するよう努めるとともに、試験が終了した日から20業務日以内に農林水産大臣に報告する。</p> <p>また、農林水産大臣への報告までに要する期間については、中期目標期間の最終事業年度までに事務処理の効率化により5業務日短縮する。</p> <p>ウ 収去品等の試験結果の信頼性を確保する観点から、前期中期目標期間中に整備した試験責任者、信頼性保証部門等から構成する信頼性保証体制及び試験操作手順書に基づき、試験を円滑に実施する。</p>	<p>イ 収去品の試験結果の報告については、飼料及び飼料添加物の分析・鑑定試験に要する標準処理期間を収去した日から20業務日以内と定め、当該標準処理期間内に試験を終了するよう努めるとともに、試験が終了した日から20業務日以内に農林水産大臣に報告する。</p> <p>また、農林水産大臣への報告までに要する期間の短縮に資するため、LAN等を活用して本部及び各地方組織間の報告を電子媒体で送付することにより簡素化する。</p> <p>ウ 収去品等の試験結果の信頼性を客観的に確保する観点から、前期中期目標期間中に整備した試験責任者、信頼性保証部門等から構成する信頼性保証体制及び試験操作手順書に基づき、試験を円滑に実施する。</p> <p>また、試験の精度を適正に保つため、外部機関における精度管理を行い、信頼性保証部門による試験の点検、確認を行う。</p>	<p>イ 収去品の試験については、標準処理期間（20業務日）内にすべて終了した。</p> <p>なお、収去品の試験結果の農林水産大臣への報告は、1,022件中1,021件について20業務日以内に報告した。</p> <p>また、収去品の試験結果の農林水産大臣への報告については、事務処理に係る既存の規程改訂を行い、インターネットVPNを活用した本部及び各事務所間における報告事務の簡素化等、報告に要する期間の短縮に努めた。</p> <p>ウ 収去品等の試験結果の信頼性を確保する観点から、信頼性保証体制及び試験操作手順書に基づき試験を円滑に実施するとともに、試験結果報告書に係る査察を毎月実施(66件)した。</p> <p>また、試験の精度を適正に保つため、次に掲げる外部精度管理を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・FAPAS（英国）主催 2回（アフラトキシン類、ゼアラレノン） ・（財）食品薬品安全センター主催 1回（デオキシニバレノール及びニバレノール） ・食品総合研究所主催 1回（精米中のカドミウム）
			<p>⑦ 上記①から⑥までの業務のほか、農林水産省からの指示・要請に基づき、次の業務を実施し、その結果を報告した。</p> <p>ア 米国において、中国産原料を用いたペットフードからメラミンが検出されたことから、国内流通品（並行輸入品）の調査分析を1件（2点）実施した。</p> <p>イ 職員を海外に派遣し、飼料等の製造施設等の調査を次のとおり実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・飼料製造工場等の現地調査（カナダ） ・豚由来血粉の製造施設の現地調査（米国） ・遺伝子組換え作物の実態調査（米国） ・トウモロコシ中のアフラトキシン管理の実態調査（米国）

			・海外のペットフードの法体系に関する調査（EU、オーストラリア）
<p>(4) 土壌改良資材関係業務</p> <p>① 土壌改良資材の検査等業務</p> <p>ア 土壌改良資材の表示の内容に係る品質の検査</p> <p>土壌改良資材の品質に関する表示の適正化を図るため、当該品質に関する表示の内容が実際の品質と一致しているか否かについての検査を実施する。</p> <p>イ 土壌改良資材及びその原料の試験の受託</p> <p>土壌改良資材の品質の保全に資するため、都道府県、農業者等からの依頼を受けて、土壌改良資材等の試験を実施するとともに、センターにおいて当該試験の内容に応じて標準処理期間を定め、当該標準処理期間内に適切に処理する。</p>	<p>(4) 土壌改良資材関係業務</p> <p>① 土壌改良資材の検査等業務</p> <p>ア 土壌改良資材の表示の内容に係る品質の検査</p> <p>土壌改良資材の品質に関する表示の適正化を図るため、当該品質に関する表示の内容が実際の品質と一致しているか否かについての検査を実施する。</p> <p>イ 土壌改良資材及びその原料の試験の受託</p> <p>土壌改良資材の品質の保全に資するため、都道府県、農業者等からの依頼を受けて、土壌改良資材等の試験を極力実施することとし、次に掲げる標準処理期間内に適切に処理する。</p> <p>(ア) 一般試験 30業務日</p> <p>(イ) VA菌根菌資材試験 60業務日</p>	<p>(4) 土壌改良資材関係業務</p> <p>① 土壌改良資材の検査等業務</p> <p>ア 土壌改良資材の表示の内容に係る品質の検査</p> <p>土壌改良資材の品質に関する表示の適正化を図るため、当該品質に関する表示の内容が実際の品質と一致しているか否かについての検査を実施する。</p> <p>イ 土壌改良資材及びその原料の試験の受託</p> <p>土壌改良資材の品質の保全に資するため、都道府県、農業者等からの依頼試験については、業務に支障のない範囲で実施することとし、次に掲げる標準処理期間内に適切に処理する。</p> <p>(ア) 一般試験 30業務日</p> <p>(イ) VA菌根菌資材試験 60業務日</p>	<p>(4) 土壌改良資材関係業務</p> <p>① 土壌改良資材の検査等業務</p> <p>ア 土壌改良資材の表示の内容に係る品質の検査</p> <p>土壌改良資材の品質に関する表示の内容が実際の品質と一致しているか否かについての検査を32件実施し、品質に関する表示の適正化を図った。</p> <p>イ 土壌改良資材及びその原料の試験の受託</p> <p>土壌改良資材の試験の依頼はなかった。</p>
<p>② 地力増進法に基づく立入検査業務</p> <p>地力増進法に基づく立入検査を行うに当たっては、農林水産大臣の指示に従い適正に実施するとともに、立入検査の結果の報告については、中期目標期間中に、農林水産大臣の指示から報告までに要する期間を、VA菌根菌資材を除き、30業務日に短縮する。</p>	<p>② 地力増進法に基づく立入検査業務</p> <p>地力増進法に基づく立入検査を行うに当たっては、農林水産大臣の指示に従い適正に実施するとともに、立入検査の結果の報告については、中期目標期間中に、農林水産大臣の指示から報告までに要する期間を、VA菌根菌資材を除き、30業務日に短縮する。</p>	<p>② 地力増進法に基づく立入検査業務</p> <p>地力増進法に基づく立入検査を行うに当たっては、農林水産大臣の指示に従い適正に実施するとともに、立入検査の結果の報告については、農林水産大臣の指示から報告までに要する期間を、VA菌根菌資材を除き、現行の目標期間（40業務日）に対して、7業務日短縮するため、集中的な検査と同資材の集中試験による迅速化とともに、稟議手続きの合理化等事務処理の効率化を行う。</p>	<p>② 地力増進法に基づく立入検査業務</p> <p>地力増進法に基づく立入検査については、過去5か年間の立入検査結果を踏まえ、表示が不適切な製造業者、新規業者等32件に対する立入検査業務の重点化を図り、効率的かつ効果的に実施した。また、結果の報告については、電子媒体を用いた各地域センターからの報告事務の簡素化を行い、平成17年度を基準として7業務日短縮し33業務日以内に農林水産大臣へ報告した。</p>

<p>3 農林水産物等の品質及び表示の適正化に関する業務</p> <p>(1) 食品表示監視業務</p> <p>① 食品表示の監視業務については、DNA解析技術、微量成分の検査分析技術等の科学的手法を用いた食品表示の真正性の検査を毎事業年度6,000件以上行い、偽装の疑いが生じた場合には、農林水産省からの指示に基づき、速やかに立入検査又は任意調査を実施する。</p>	<p>3 農林水産物等の品質及び表示の適正化に関する業務</p> <p>(1) 食品表示監視業務</p> <p>① 食品表示の監視業務については、DNA解析技術、微量成分の検査分析技術等の科学的手法を用いた食品表示の真正性の検査を、以下により、毎事業年度6,000件以上行う。その結果、偽装の疑いが生じた場合には、農林水産省からの指示に基づき、製造業者、販売業者、輸入業者等に対し立入検査又は任意調査（以下3の(1)において「立入検査等」という。）を実施し、立入検査等の終了後原則3業務日以内に報告する。</p> <p>なお、立入検査等を行うに当たっては、立入検査等を行う職員に資格要件を設け、検査能力等の資質、検査経験等を勘案した立入検査等職員の適切な人選を行い、立入検査等に関する基準文書に基づき厳正に実施する。</p> <p>ア 前事業年度の検査で不適合の多かった品目については、検査件数を増加させる。</p> <p>イ 消費者の関心の高い品目を対</p>	<p>3 農林水産物等の品質及び表示の適正化に関する業務</p> <p>(1) 食品表示監視業務</p> <p>① 食品表示の監視業務については、DNA解析技術、微量成分の検査分析技術等の科学的手法を用いた食品表示の真正性の検査6,000件以上を適切に実施するため、次に掲げる措置を講ずる。</p> <p>ア 平成18年度の検査で不適合の多かった「農産物漬物」、「塩蔵わかめ」等の検査件数を増加する。</p> <p>イ 消費者の関心の高い品目を対象とし</p>	<p>3 農林水産物等の品質及び表示の適正化に関する業務</p> <p>(1) 食品表示監視業務</p> <p>① 食品表示の監視業務については、科学的手法を用いた食品表示の真正性の検査を加工食品について5,370件、生鮮食品について685件、合計6,055件実施した。</p> <p>その結果、加工食品については、不適正な表示が認められた370件について、製造業者等に対して文書による是正指導を行うとともに、農林水産省による行政指導が必要と思われる重大な不適合（116件）について、農林水産省に報告した。</p> <p>また、生鮮食品については、不適正な表示が認められた55件について、検査結果を農林水産省に報告した。</p> <p>上記のほか、JAS規格の定期見直しに係る調査分析等において不適正な表示が認められた8件について、製造業者等に対して文書による是正指導を行った。</p> <p>ア 平成18年度の検査において不適合率の高かった品目について、次のとおり検査件数を平成18年度より増加させた。</p> <table border="1" data-bbox="1451 1125 2027 1284"> <thead> <tr> <th>品 目</th> <th>平成18年度 検査件数</th> <th>平成19年度 検査件数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>・農産物漬物</td> <td>157 (2.6)</td> <td>175 (2.9)</td> </tr> <tr> <td>・塩蔵わかめ</td> <td>63 (1.0)</td> <td>103 (1.7)</td> </tr> <tr> <td>・ジャム類</td> <td>216 (3.6)</td> <td>231 (3.8)</td> </tr> </tbody> </table> <p>注：()内の数値は、各年度の検査件数に占める割合(%)である。</p> <p>イ 消費者の関心の高い品目について、次のとおり本部及び各</p>	品 目	平成18年度 検査件数	平成19年度 検査件数	・農産物漬物	157 (2.6)	175 (2.9)	・塩蔵わかめ	63 (1.0)	103 (1.7)	・ジャム類	216 (3.6)	231 (3.8)
品 目	平成18年度 検査件数	平成19年度 検査件数													
・農産物漬物	157 (2.6)	175 (2.9)													
・塩蔵わかめ	63 (1.0)	103 (1.7)													
・ジャム類	216 (3.6)	231 (3.8)													

象に、毎事業年度4回以上の重点的な検査を行う。

ウ 遺伝子組換えに係る表示が行われている食品の検査を毎事業年度500件以上行うとともに、表示に疑義が生じた場合には、分別生産流通管理に係る調査を行う。

エ 食品の産地表示に関する検査を毎事業年度600件以上行う。

た重点的な検査を行うに当たっては、調査事項、実施期間を調整し、各センターで一斉に行う等の効率的な対応に努めることにより4回以上行う。

また、検査の計画及び実施に当たっては、農林水産省関係部局と連携して行う。

ウ 遺伝子組換えに係る表示が行われている食品の検査については、製造業者等の事業規模、地域バランス等を勘案して対象製品を選定し、500件以上の検査を適切に行う。

なお、分別生産流通管理の実施に疑義があった場合には、製造業者、流通業者等に対する分別生産流通管理の実施状況等の調査を行うとともに、可能な範囲において、原料農産物を入手し、遺伝子組換え体の混入率について検査分析を行う。

エ 食品の産地表示に関する検査については、産地ごとの食品の流通状況等を勘案し、検査を行うセンター、実施時期等を調整して600件以上を適切に行う。

地域センターで一斉に重点的な検査を5回行った。

〔農林水産省関係部局と連携して行った調査〕

・アサリの表示に関する特別調査 52件
 ・牛挽肉加工品の表示に関する緊急調査 110件
 ・牛肉及び牛肉加工品の表示に関する特別調査
 牛肉 157件
 牛肉加工品 82件

〔センターが独自で行った調査〕

・はちみつの表示に関する重点調査 304件
 ・牛挽肉加工品の表示に関する緊急調査に追加して実施した食肉加工品の表示に関する重点調査 218件

ウ 遺伝子組換えに係る表示が行われている食品の検査については、製造業者等の事業規模、地域バランス等を勘案して501件実施した。(加工食品473件、生鮮品28件)

検査の結果、組換え遺伝子が検出されたもの等156件のうち、分別生産流通管理の実施状況等の調査を155件行った。また、平成18年度に実施した遺伝子組換え食品の検査のうち、分別生産流通管理の調査未了分3件についても調査を行った。さらに、可能な範囲において、原料農産物を入手し、遺伝子組換え体の混入率について検査分析を行った。以上の調査の結果、不適切な管理が認められた案件はなかった。

なお、分別生産流通管理の調査を実施しなかった1件については、調査対象となる製造業者が廃業していたため、調査の対象外とした。

エ 食品の産地表示に関する検査については、産地ごとの食品の流通状況等を勘案し、検査を行うセンター、実施時期等を調整して911件実施した。(加工食品471件、生鮮品440件)

その結果、不適正な表示が認められた加工食品25件について、製造業者等に対して文書による是正指導を行うとともに、農林水産省による行政指導が必要と思われる重大な不適合(26件)について、農林水産省に報告した。

また、不適正な表示が認められた生鮮食品46件について、検査結果を農林水産省に報告した。

表8 食品の産地表示に関する検査件数

品 目	件 数
加工食品	471

オ 検査結果については、結果を取りまとめ毎事業年度公表する。

オ 検査結果については、早急に結果を取りまとめ、農林水産省関係部局と連携し、報道発表等により公表する。

カ 食品表示の真正性の検査の結果、偽装の疑いが生じ、製造業者、販売業者、輸入業者等に対する立入検査又は任意調査（以下「立入検査等」という。）を農林水産省からの指示により実施する場合には、適切に実施するとともに、立入検査等の終了後原則3業務日以内に報告するために、次に掲げる措置を講ずる。

- 立入検査等を行うに当たっては、立入検査等に関する基準文書に基づき厳正に実施する。

また、基準文書は必要に応じて見直しを行い、内容の充実を図る。

- 立入検査等の終了後の報告が3業務日を超えた場合には、その都度その原因を究明し、以後の立入検査等の業務

	乾しいたけ	178
	農産物漬物（梅漬物）	81
	アジ・サバ加工品	212
生鮮食品		440
	アサリ	72
	マグロ	116
	シジミ	32
	黒大豆	22
	ネギ	108
	タマネギ	90
合 計		911

オ 平成18年度の加工食品の表示の真正性に係る検査結果について、農林水産省関係部局と連携し、プレスリリースを行うとともに、ホームページ上で公表した。

カ 農林水産省からの指示等に基づき、食品表示監視業務に係る立入検査等を適切に実施するとともに、立入検査等の終了後3業務日以内に報告するため、次に掲げる取組を行った。

- 立入検査等に関する基準文書に基づき、立入検査を2件（4事業所）、任意調査を112件（157事業所）、計114件（161事業所）実施し、すべての案件について3業務日以内に報告した。

また、立入検査等のほか、農林水産省が指示又は指導を行った事業者に対する改善状況の確認調査を25件（29事業所）実施し、都道府県からの要請により、19件（21事業所）の立入検査等に協力した。

なお、基準文書の見直しを行った結果、改正を要する事項はなかった。

- 立入検査等の終了後の報告は、すべての案件について3業務日以内に報告した。

		<p>改善に活用する。</p> <p>キ 農林水産省又は都道府県が行う食品表示の真正性の検査又は調査において、協力要請又は技術支援等の要請があった場合には、可能な限り応じる。</p>	<p>キ 農林水産省又は都道府県が行う食品表示の真正性の検査又は調査において、協力要請又は技術支援等の要請があった305件について適正に対応した。</p>
<p>② 食品表示110番を通じて消費者等から寄せられる不正表示や違法なJASマーク表示に関する情報の収集を行い、当該情報を食品表示の監視業務等に活用する。</p>	<p>② 食品表示110番等を通じて収集した不正表示に関する情報は、速やかに農林水産省関係部局等に通報するとともに、必要に応じて事実関係の確認のための調査、分析等を行う。</p>	<p>② 食品表示110番等を通じて収集した不正表示に関する情報の農林水産省関係部局等への通報及び必要に応じた事実関係の確認のための調査、分析等については、事務処理手順書に基づき迅速かつ的確に行う。</p> <p>また、事務処理手順書は必要に応じて見直す。</p>	<p>② 食品表示110番等を通じて収集した不正表示に関する情報について、事務処理手順書に基づき、次のとおり迅速かつ的確に対応した。</p> <p>○ センターが受け付けた情報及び農林水産省等から回付された27件の情報に基づき、事実関係の確認のための買上検査を66件行い、表示の確認を行うとともに、20件について分析を行った。買上検査の結果については、農林水産省に報告するとともに、不適合が確認された15件について文書による是正指導を行った。</p> <p>○ 農林水産省からの依頼により、食品表示110番等の情報提供に基づく立入検査等を63件（88事業所）実施し、都道府県の実施する3件（3事業所）の立入検査等に協力した。</p> <p>なお、食品表示110番に係る事務処理手順書は、農林水産省の定める「食品表示110番対応マニュアル」が改正されたことを受け、所要の改正を行った。</p>
<p>(2) 登録認定機関、認定事業者に対する指導・監督業務</p> <p>① 農林物資の規格化及び品質表示の適正化に関する法律の一部を改正する法律（平成17年法律第67号）による改正後のJAS法（以下「改正JAS法」という。）により、センターの業務に登録認定機関の登録及びその更新の申請時における調査が追加されたことから、「ISO/IEC17011適合性評価機関の認定を行う機関に対</p>	<p>(2) 登録認定機関、認定事業者に対する指導・監督業務</p> <p>① 農林物資の規格化及び品質表示の適正化に関する法律の一部を改正する法律（平成17年法律第67号）による改正後の農林物資の規格化及び品質表示の適正化に関する法律（昭和25年法律第175号。以下「JAS法」という。）により、センターの業務に追加された登録認定機関の登録及びその更新の申請時における調査（以下「技術上の調査」という。）</p>	<p>(2) 登録認定機関、認定事業者に対する指導・監督業務</p> <p>① 農林物資の規格化及び品質表示の適正化に関する法律（昭和25年法律第175号。以下「JAS法」という。）に基づきセンターが行う技術上の調査並びに登録後において登録認定機関が引き続き登録基準に適合しているか否かを確認するための定期的な調査（以下「定期的調査」という。）を適切に実施するため、次に掲げる措置を講ずる。</p> <p>○ 適切に技術上の調査及び定期的調査</p>	<p>(2) 登録認定機関、認定事業者に対する指導・監督業務</p> <p>① 次の措置を講ずることにより、JAS法に基づきセンターが行う技術上の調査及び定期的調査を適切に実施した。</p> <p>○ ISO/IEC17011に基づく業務執行体制を維持するとともに、</p>

する一般要求事項」(以下「ISO/IEC17011」という。)に基づき、登録認定機関の登録及びその更新の申請時における技術上の調査(以下「技術上の調査」という。)を実施し、農林水産省の調査指示から報告までの目標期間(30業務日)内に結果を報告する。

また、登録後において登録認定機関が引き続き登録基準に適合しているか否かを確認するための定期的な調査(以下「定期的調査」という。)については、原則として登録認定機関ごとに毎事業年度1回以上実施する。

については、「ISO/IEC17011適合性評価機関の認定を行う機関に対する一般要求事項」(以下「ISO/IEC17011」という。)に基づき実施し、農林水産省からの調査指示から報告までの目標期間(30業務日)内に結果を報告する。

また、登録後において登録認定機関が引き続き登録基準に適合しているか否かを確認するための定期的な調査(以下「定期的調査」という。)については、原則として登録認定機関(分析業務の外部委託を行っている場合は、委託先の分析機関も含む。)ごとに毎事業年度1回以上実施し、必要に応じて是正のための指導及び追加調査を行う。

なお、技術上の調査及び定期的調査を中立かつ厳正に実施するため、調査を行う職員に資格要件を設ける。

を遂行するため、「ISO/IEC17011適合性評価機関の認定を行う機関に対する一般要求事項」(以下「ISO/IEC17011」という。)に基づく業務執行体制を維持し、基準文書を必要に応じて見直す。

○ 技術上の調査を行うに当たっては、農林水産省からの調査指示から報告までの目標期間(30業務日)内に結果を報告するため、調査の進行管理を的確に行う。

○ 技術上の調査の公平性、信頼性を確保するため、職員で構成する技術委員会(当該調査を行った者を除く。)において調査結果をレビューする。

○ 定期的調査は、登録認定機関ごとにその認定事業者数等を勘案した調査計画を作成し、計画的に行うとともに進捗状況を常に把握する。

○ 定期的調査は、登録認定機関の認定を行う事業所における調査(以下「事業所調査」という。)をすべての対象機関について、原則として1回以上行う。

また、事業所調査は、③に定める立会調査及び格付品検査と連動して行う。

「登録認定機関等の調査等業務に係る要員の資格基準」及び「技術委員会設置運営要領」等の基準文書の見直しを行った。

○ 技術上の調査を次のとおり実施し、進行管理を的確に行うことにより、調査を行った436件すべてについて目標期間(30業務日)内に農林水産省へ調査結果を報告した。

表9 技術上の調査件数

	新規	変更	合計
登録認定機関	10	383	393
登録外国認定機関	3	40	43
合計	13	423	436

○ 技術上の調査結果については、当該調査を行った者を除く職員で構成する技術委員会において調査結果を審査することにより、調査の公平性、信頼性を確保した。

○ 事業所調査については、登録認定機関ごとにその認定事業者数等を勘案した調査計画を作成し、進捗状況の把握に努め、計画的に実施した。

○ 定期的調査を立会調査及び格付品検査と連動して次のとおりすべての対象機関である113機関(133事業所)に対して各1回実施した。

・ 飲食料品	15機関 (22事業所)
・ 林産物	12機関 (19事業所)
・ 生糸	1機関 (1事業所)
・ 生産情報公表	13機関 (13事業所)
・ 有機農産物等	72機関 (78事業所)
計	113機関 (133事業所)

また、農林水産省の指示により、センターの実施する定期的調査以外の検査等により格付品に不適合が確認された認定事業者を認定した登録認定機関に対して、その認定業務の適

		<ul style="list-style-type: none"> ○ 事業所調査、立会調査及び格付品検査の結果、必要がある場合は当該事業所、認定事業者等及び格付品についての追加の調査又は検査を実施する。 ○ 事業所調査において適正でない事項を認めた場合には、当該登録認定機関に対して是正のための指導を行う。 なお、調査結果及び是正指導に伴う改善状況については、速やかに農林水産省関係部局へ報告する。 ○ 技術上の調査及び定期的調査を中立かつ厳正に実施するため、調査を行う職員の資格要件であるISO9000審査員研修コース修了者又はISO/IEC17011等に関する内部研修修了者2名以上によるチームを編成して調査を行う。 なお、調査を行う職員の資格要件は、必要に応じて見直す。 	<p>合性を確認するため臨時の事業所調査を2件実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 格付品検査の結果、不適合の疑義が生じた案件について、適合性確認のため現地調査を9件実施した。 ○ 登録認定機関等に対する事業所調査の結果、軽微な問題点については、現地で指摘を行うとともに、不適合が認められた80機関に対しては、文書により是正指導を行った。 なお、調査結果及び是正指導に伴う改善状況については、速やかに農林水産省関係部局へ報告した。 ○ 技術上の調査及び定期的調査については、調査を行う職員の資格要件であるISO9000審査員研修コース修了者又はISO/IEC17011等に関する調査員内部研修修了者2名以上によるチームを編成し、中立かつ厳正に実施した。 また、調査を行う職員の資格要件の見直しを行い、改正した。
<p>② ISO/IEC17011に基づく技術上の調査のための有資格者を中期目標期間中に20名以上養成する。</p>	<p>② 技術上の調査及び定期的調査におけるデータの質の向上を図るため、以下の措置を講ずる。</p> <p>ア 職員技術研修計画に基づき、調査を行う職員に（財）日本適合性認定協会の認定するISO9000審査員研修コースを受講させ、ISO/IEC17011に基づく調査のための有資格者を毎事業年度に4名程度養成する。</p> <p>イ 調査を行う職員の資格要件を満たす職員を養成するため、職員技術研修計画に基づきISO/IEC17011等に関する研修を開催し、担当職員に対し3年に1回以</p>	<p>② 技術上の調査及び定期的調査におけるデータの質の向上を図るため、次に掲げる措置を講ずる。</p> <p>ア （財）日本適合性認定協会の認定するISO9000審査員研修コースを受講させ、ISO/IEC17011に基づく調査のための有資格者を、4名以上養成する。</p> <p>イ 技術上の調査及び定期的調査を行う職員としての資格要件を満たす職員を確保するとともに、調査技術の維持・向上を図るため、ISO/IEC17011等に関する内部研修を実施する。</p>	<p>② 次に掲げる措置を講ずることにより、技術上の調査及び定期的調査の質の向上を図った。</p> <p>ア （財）日本適合性認定協会が認定するISO9000審査員研修コースを6名に受講させ、ISO/IEC17011に基づく調査のための有資格者を養成した。（総数47名）</p> <p>イ 職員技術研修中期計画に基づき、ISO/IEC17011等に関する調査員内部研修を、新たに対象者となった者及び前回の受講時から2年を過ぎた者等を対象に、計2回（26名）実施し、技術上の調査及び定期的調査を行う職員としての資格要件を満たす職員を確保するとともに、調査技術の維持・向上を図っ</p>

<p>③ 登録認定機関に対する定期的調査においては、登録認定機関により認定された認定事業者が行う格付に対する登録認定機関の指導が適切に行われているか否かを確認するため、JAS製品の検査を毎事業年度700件以上行うこととする。</p>	<p>上の受講を義務付ける。</p> <p>③ 登録認定機関に対する定期的調査においては、登録認定機関により認定された認定事業者が行う格付に対する登録認定機関の指導が適切に行われているか否か確認するため、以下の検査等を行う。</p> <p>ア JAS製品の検査を毎事業年度700件以上行うこととし、検査を行うに当たっては、各登録認定機関の認定事業者数等を勘案して登録認定機関ごとの検査件数を配分することを基本としつつ、前年度の定期的調査又は追加調査で不適合があった登録認定機関については、検査を重点的に実施する。</p>	<p>③ 登録認定機関に対する定期的調査に資するため、登録認定機関の認定事業者が行う格付に対する指導を適切に実施しているか否かを確認するためのJAS製品の検査（以下「格付品検査」という。）及び登録認定機関が適正に認定に関する業務を行っているか否かを確認するための認定等の業務実施現場に立ち会って行う実施状況調査（以下「立会調査」という。）を行う。</p> <p>また、定期的調査に資するために行う検査等は、以下により実施するとともに、検査等の結果、適正でない事項を認めた場合には、必要な是正措置及び是正状況の確認を行う。</p> <p>ア 格付品検査は、各登録認定機関の認定事業者数等を勘案して各登録認定機関ごとの検査件数を配分することを基本としつつ、700件以上の検査を実施する。</p> <p>なお、前事業年度の定期的調査又は追加調査で不適合があった登録認定機関については、通常の格付品検査件数の1.2倍程度の検査を実施する。</p>	<p>た。</p> <p>③ 登録認定機関に対する定期的調査に資するため、登録認定機関が適切に認定事業者を指導しているか否かを確認するための検査等を、次のとおり実施した。</p> <p>ア 格付品検査を各登録認定機関の認定事業者数等を勘案して726件実施し、不適合があった36件については、関係する登録認定機関に対して文書により是正指導を行った。</p> <p>なお、平成18年度の定期的調査で不適合があった登録認定機関について、通常の格付品検査件数の1.2倍程度の検査を実施した。</p> <table data-bbox="1451 1002 1973 1155"> <tr> <td>・ 飲食料品</td> <td>217件</td> </tr> <tr> <td>・ 林産物</td> <td>126件</td> </tr> <tr> <td>・ 生産情報公表</td> <td>4件</td> </tr> <tr> <td>・ 有機農産物等</td> <td>379件</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>726件</td> </tr> </table> <p>さらに、次の格付品の検査を実施し、合計1,033件となった。</p> <p>○ 農林水産省からの要請に基づき、構造用集成材について10件及び有機加工食品について11件、計21件（不適合はなし）の格付品検査を実施した。</p> <p>○ 有機農産物の認定生産行程管理者に係る調査の一環とし</p>	・ 飲食料品	217件	・ 林産物	126件	・ 生産情報公表	4件	・ 有機農産物等	379件	計	726件
・ 飲食料品	217件												
・ 林産物	126件												
・ 生産情報公表	4件												
・ 有機農産物等	379件												
計	726件												

	<p>イ 認定事業者に対する調査を登録認定機関の規模に応じて毎事業年度350件以上行うこととし、調査を行うに当たっては、各登録認定機関の認定事業者数等を勘案して登録認定機関ごとの調査件数を配分することを基本としつつ、前事業年度の定期的調査又は追加調査で不適合があった登録認定機関については、調査を重点的に実施する。</p>	<p>イ 立会調査は、各登録認定機関の認定事業者数等を勘案して各登録認定機関ごとの調査件数を配分することを基本としつつ、350件以上の調査を実施する。</p> <p>なお、前事業年度の定期的調査又は追加調査で不適合があった登録認定機関については、通常の立会調査件数の1.2倍程度の調査を実施する。</p>	<p>て、有機農産物の残留農薬分析を286件（不適合はなし）実施した。</p> <p>イ 立会調査を各登録認定機関の認定事業者数等を勘案して417件実施し、不適合があった43件については、関係する登録認定機関に対して文書により是正指導を行った。</p> <table border="0" data-bbox="1444 399 1982 566"> <tr> <td>・ 飲食料品</td> <td>104件</td> </tr> <tr> <td>・ 林産物</td> <td>53件</td> </tr> <tr> <td>・ 生産情報公表</td> <td>11件</td> </tr> <tr> <td>・ 有機農産物等</td> <td>249件</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>417件</td> </tr> </table> <p>また、農林水産省からの協力要請により、JAS法に基づく経過措置による旧JAS法上の認定事業者に対する確認調査を1件実施した。</p> <p>さらに、平成19年度途中で有機農産物の認定事業者が不適正な格付を行っていた事案が発生し、その原因として指摘された登録認定機関が行う認定に係る調査の適合性について確認するため、農林水産省からの要請に基づく特別調査を、有機農産物の登録認定機関に対する立会調査（55件）及び事業所調査（41件）時に実施した。（この特別調査件数は立会調査及び事業所調査件数の内数である。）</p> <p>なお、平成18年度の定期的調査で不適合があった登録認定機関に対して、立会調査を通常の件数の1.2倍程度実施した。</p>	・ 飲食料品	104件	・ 林産物	53件	・ 生産情報公表	11件	・ 有機農産物等	249件	計	417件
・ 飲食料品	104件												
・ 林産物	53件												
・ 生産情報公表	11件												
・ 有機農産物等	249件												
計	417件												
<p>④ 改正JAS法第20条の2第1項及び第2項の規定による立入検査を行うに当たっては、ア 検査能力等の資質、経験等を勘案した立入検査職員の適切な人選 イ 農林水産大臣から指示された調査事項の的確な実施 ウ 農林水産大臣への迅速かつ正確な報告等に留意し厳正に実施する。 なお、改正JAS法第19条の9第2項第6号に規定する登録外</p>	<p>④ 登録認定機関及び認定事業者に対する指導・監督業務の結果、違法なJASマークの表示の疑いが生じた場合には、農林水産省からの指示に基づき、登録認定機関、認定事業者に対し立入検査又は任意調査（以下④及び⑤において「立入検査等」という。）を実施し、立入検査等の終了後原則3業務日以内に報告する。 また、立入検査等を行うに当たっては、立入検査等を行う職</p>	<p>④ 登録認定機関及び認定事業者に対する指導・監督業務の結果、違法なJASマークの表示の疑いが生じ、登録認定機関及び認定事業者に対する立入検査等を実施する場合には、適切に実施するとともに、立入検査等の終了後原則3業務日以内に報告するため、(1)の①の力と同様の措置を講ずる。</p>	<p>④ 農林水産省からの指示等に基づき、認定事業者に対する指導・監督業務に係る立入検査を適切に実施するとともに、立入検査等の終了後3業務日以内に報告するため、次に掲げる取組を行った。</p> <p>○ 立入検査等に関する基準文書に基づき、立入検査を3件（4事業所）、任意調査を24件（39事業所）、計27件（43事業所）実施し、すべての案件について、3業務日以内に報告した。</p> <p>また、立入検査等のほか、農林水産省が指示又は指導を行った事業者に対する改善状況の確認調査を9件（9事業所）実施し、都道府県からの要請により、1件（3事業所）の立入検査等に協力した。</p> <p>なお、基準文書については、表示監視業務における立入検</p>										

<p>国認定機関に対して行う検査についても上記の留意点を踏まえて実施する。</p>	<p>員に資格要件を設け、検査能力等の資質、検査経験等を勘案した立入検査等職員の適切な人選を行い、立入検査等に関する基準文書に基づき厳正に実施する。</p>		<p>査等業務の基準文書との整合性を図るために改正し、内容の充実を図った。</p> <p>○ 立入検査等の終了後の報告は、すべての案件について3業務日以内に報告した。</p>												
<p>⑤ なお、今般のJAS法の改正により、登録格付機関制度が廃止されることになったが、平成21年2月28日までの間は、改正前のJAS法における登録格付機関に関する規定の一部がなおその効力を有することとされていることから、同日までの間は、登録格付機関に対する指導・監督業務及び農林水産省からの指示による認定事業者に対する立入検査、任意調査等の業務を適正に行う。</p>	<p>⑤ なお、今般のJAS法の改正により、登録格付機関制度が廃止されることになったが、平成21年2月28日までの間は、改正前のJAS法における登録格付機関に関する規定の一部がなおその効力を有することとされていることから、同日までの間は、以下により、登録格付機関に対する指導・監督業務及び農林水産省からの指示による認定事業者に対する立入検査等の業務を適正に行う。</p> <p>ア 登録格付機関の登録後において格付業務が適切に行われていることを確認するための、各登録格付機関に対する毎事業年度1回以上の定期的な調査の実施</p> <p>イ 登録格付機関による格付業務が適切に行われていることを確認するための、登録格付機関が格付を行ったJAS製品の検査及び格付業務の調査の実施</p> <p>ウ 農林水産省からの指示により認定事業者に対する立入検査等を実施し、立入検査等の終了後原則3業務日以内に報告</p>	<p>⑤ JAS法改正により、なおその効力を有する登録格付機関について、指導・監督業務及び農林水産省からの指示による認定事業者に対する立入検査等の業務を適正に行うため、次に掲げる措置を講ずる。</p> <p>ア 登録格付機関の格付業務の実施体制が適正維持されていることを確認するため、以下の対象機関について格付を行う事業所における調査を1回以上行う。</p> <p>〔登録格付機関〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 飲食料品及び油脂：2機関 ・ その他の農林物資：2機関 <p>イ 登録格付機関が適正に格付を行っていることを確認するため、格付品の検査及び格付業務（試料の抽出等）を行っている格付現場に立ち会って行う実施状況調査を行う。</p> <p>ウ 農林水産省からの指示により認定事業者に対する立入検査等を実施し、立入検査等の終了後原則3業務日以内に報告する。</p>	<p>⑤ 次に掲げる措置を講ずることにより、改正前のJAS法に基づく登録格付機関に対する指導・監督業務等を適正に行った。</p> <p>ア 登録格付機関に対する調査を次のとおり4機関(116事業所)に対して各1回実施し、調査の結果、不適合が認められた2機関(2事業所)に対して、文書により是正指導を行った。</p> <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 70%;">・ 飲食料品及び油脂</td> <td style="width: 30%;">2機関 (21事業所)</td> </tr> <tr> <td>・ 林産物</td> <td>2機関 (95事業所)</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">計</td> <td>4機関 (116事業所)</td> </tr> </table> <p>イ 格付品の検査を3件、格付現場に立ち会って行う実施状況調査(立会調査)を9件実施した。</p> <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 70%;"></td> <td style="width: 15%; text-align: center;">格付品検査</td> <td style="width: 15%; text-align: center;">立会調査</td> </tr> <tr> <td>・ 林産物</td> <td style="text-align: center;">3件</td> <td style="text-align: center;">9件</td> </tr> </table> <p>ウ 改正前のJAS法に係る認定事業者に対する農林水産省からの立入検査等の指示はなかった。</p>	・ 飲食料品及び油脂	2機関 (21事業所)	・ 林産物	2機関 (95事業所)	計	4機関 (116事業所)		格付品検査	立会調査	・ 林産物	3件	9件
・ 飲食料品及び油脂	2機関 (21事業所)														
・ 林産物	2機関 (95事業所)														
計	4機関 (116事業所)														
	格付品検査	立会調査													
・ 林産物	3件	9件													

<p>⑥ 食品表示110番を通じて収集した情報のうち違法なJASマーク表示に関する情報をJAS規格の監視業務等に活用する。</p>	<p>⑥ 食品表示110番等を通じて収集した違法なJASマーク表示に関する情報は、速やかに農林水産省関係部局等に通報するとともに、必要に応じて事実関係の確認のための調査、分析等を行う。</p>	<p>⑥ 食品表示110番等を通じて収集した違法なJASマーク表示に関する情報については、(1)の②と同様の措置を講ずる。</p>	<p>⑥ 食品表示110番等を通じて収集した違法なJASマーク表示に関する情報について、事務処理手順書に基づき、次のとおり迅速かつ確に対応した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ センターが受け付けた情報及び農林水産省等から回付された情報に基づく事実関係の確認のための格付品の買上検査は、対応すべき案件がなかったことから実施しなかった。 ○ 農林水産省からの依頼により、食品表示110番等の情報提供に基づく立入検査等を21件（35事業所）実施し、都道府県の実施する1件（3事業所）の立入検査に協力した。 <p>なお、食品表示110番に係る事務処理手順書は、農林水産省の定める「食品表示110番対応マニュアル」が改正されたことを受け、所要の改正を行った。</p>										
<p>(3) JAS規格及び品質表示基準の見直し等に係る業務 JAS規格及び品質表示基準の見直しに係る作業においては、消費者ニーズ等に即した適切な見直しを行うため、以下の調査、検査等を行い、それらの結果を活用して見直し内容の素案について取りまとめる。</p> <p>① 消費者、製造業者等の見直しに関する要望等を把握するためのアンケート調査</p> <p>② JAS規格の見直しにあつては、JAS規格の対象品又は関連する製品の品質実態を適切に把握するための市販品検査（1規格当たりおおむね20件以上）</p> <p>③ 品質表示基準の見直しにあつては、品質表示基準の対象品又は類似する製品の</p>	<p>(3) JAS規格及び品質表示基準の見直し等に係る業務</p> <p>① JAS規格の見直しに当たっては、以下の調査、検査等を行い、それらの結果を反映させた見直し内容の素案を取りまとめる。</p> <p>ア 消費者、製造業者、実需者等のJAS規格利用状況及び見直しに関する要望を把握するためのアンケート調査</p> <p>イ JAS規格の対象品又は関連する製品の品質実態を適切に把握するための市販品検査（1規格当たりおおむね20件以上）</p>	<p>(3) JAS規格及び品質表示基準の見直し等に係る業務</p> <p>① JAS規格の見直しに当たっては、次に掲げる調査、検査等を行い、それらの結果を反映させた見直し内容の素案を取りまとめる。</p> <p>ア 消費者、製造業者、実需者等のJAS規格利用状況及び見直しに関する要望を把握するため、アンケート等による調査を実施する。</p> <p>イ JAS規格の対象品又は関連する製品の品質実態を適切に把握するための市販品検査（1規格当たり概ね20件以上）を実施する。 また、センターにおける農林物資の検査及びその他の調査等により、当該品目に係る必要な情報が得られる場合</p>	<p>(3) JAS規格及び品質表示基準の見直し等に係る業務</p> <p>① 農林水産省から要請のあったJAS規格について、次に掲げる定期見直しに係る調査及び検査等を実施し、飲食物品22品目（42規格）、林産物3品目（11規格）について意見書を作成し、農林水産省へ報告した。</p> <p>ア 消費者等に対するアンケート又はヒアリングによる利用実態調査を、次のとおり実施した。</p> <table border="0"> <tr> <td>・消費者団体</td> <td>11品目（21規格）</td> </tr> <tr> <td>・実需者</td> <td>11品目（24規格）</td> </tr> <tr> <td>・製造業者等</td> <td>14品目（28規格）</td> </tr> <tr> <td>・流通業者等</td> <td>11品目（24規格）</td> </tr> </table> <p>イ 市販品検査を、次の品目について、計448件実施した。また、検査を実施した27規格のうち、9規格については、1規格当たり20件以上の検査を実施した。18規格については市場流通量が少ない等の理由から、1規格あたり20件以上の検査を実施できなかった。</p> <table border="0"> <tr> <td>・飲食物品</td> <td>11品目（21規格、398件）</td> </tr> </table>	・消費者団体	11品目（21規格）	・実需者	11品目（24規格）	・製造業者等	14品目（28規格）	・流通業者等	11品目（24規格）	・飲食物品	11品目（21規格、398件）
・消費者団体	11品目（21規格）												
・実需者	11品目（24規格）												
・製造業者等	14品目（28規格）												
・流通業者等	11品目（24規格）												
・飲食物品	11品目（21規格、398件）												

品質実態を適切に把握するための市販品検査（1基準当たりおおむね20件以上）

- ④ 国際規格との整合性を把握するための、国際規格及び市販品の品質実態に関する調査
- ⑤ 消費者及び製造業者等から見直しに対する意見を聴取するためのワーキンググループの開催
- ⑥ JAS規格の見直しにあっては、JAS規格の分析法の改善並びに分析値の信頼性の確保のための分析法及び格付サンプリング法の妥当性確認

ウ JAS規格と国際規格の整合性を確認するための、国際規格及び市販品の品質実態に関する調査

エ 消費者、製造業者、実需者等から見直しに対する意見を聴取するためのワーキンググループの開催

オ JAS規格の分析法の改善並びに分析値の信頼性の確保のための分析法及び格付サンプリング法の妥当性確認

- ② 品質表示基準の見直しに当たっては、以下の調査、検査等を行い、それらの結果を反映した見直し内容の素案を作成する。

には、調査件数の調整を図る。

ウ JAS規格と国際規格の整合性を確認するための、国際規格及び市販品の品質実態に関する調査を実施する。

エ 消費者、製造業者、実需者等からJAS規格見直しに対する意見を聴取するため、必要に応じて消費者説明会や関係者を対象としたワーキンググループによる検討会を開催する。

オ JAS規格の分析法の改善並びに分析値の信頼性の確保のための分析法及び格付サンプリング法の妥当性確認を行う。

- ② 品質表示基準の見直しに当たっては、次に掲げる調査、検査等を行い、それらの結果を反映させた見直し内容の素案を取りまとめる。

・ 林産物 2品目（6規格、50件）

ウ 国際規格の内容についての調査及び国際規格に対応する市販品の品質実態に関する調査を次の品目について実施した。

・ 飲食料品 4品目（4規格、78件）

エ 消費者団体に対する説明会を4回、消費者団体及び業界団体等をメンバーとしたワーキンググループを13回開催した。

オ 分析法及び格付サンプリング法について情報収集を行うとともに、妥当性確認試験及び従来手法と新たな手法の同等性確認試験を次のとおり実施した。

- ・ 文献調査
 - 飲食料品 10品目（10項目）
 - 林産物 5品目（31項目）
- ・ ヒアリング
 - 飲食料品 19品目（28回）
 - 林産物 2品目（3回）
- ・ 妥当性確認のための共同分析試験
 - 飲食料品 9品目（9項目）
- ・ 測定方法確認のための分析試験
 - 飲食料品 1品目（1項目）
 - 林産物 5品目（2項目）
- ・ 従来手法と新たな手法の同等性確認
 - 飲食料品 4品目（5項目）

また、学識経験者、業界関係者等で構成する分析手法又はサンプリング方法に関する妥当性確認検討委員会を8回開催し、分析方法の妥当性確認試験設計及びその試験結果並びにサンプリング手法の妥当性について検討を行った。

- ② 農林水産省から要請のあった品質表示基準について、次に掲げる見直しに係る調査及び検査等を実施し、15基準について意見書を作成し、農林水産省へ報告した。

<p>また、農林水産省関係部局の要請に基づき、JAS規格の制定等のために必要な調査等を行う。</p>	<p>ア 消費者、製造業者等の品質表示基準の見直しの要望を把握するためのアンケート調査</p> <p>イ 品質表示基準の対象品又は類似する製品の品質実態を適切に把握するための市販品検査（1基準当たりおおむね20件以上）</p> <p>ウ 品質表示基準と国際規格との整合性を確認するための、国際規格及び市販品の品質実態に関する調査</p> <p>エ 消費者、製造業者等から見直しに対する意見を聴取するためのワーキンググループの開催</p> <p>③ 農林水産省関係部局の要請に基づき、JAS規格の制定等のために必要な調査等を行う。</p> <p>④ ①から③に係るパブリックコメントの募集及びその結果に係る説明会を行う。</p>	<p>ア 消費者、製造業者等の品質表示基準認知の状況及び見直しに関する要望を把握するため、アンケート等による調査を実施する。</p> <p>イ 品質表示基準の対象品又は類似する製品の品質実態を適切に把握するための市販品検査（1基準ごとに概ね20件以上）を実施する。 また、物資の検査及びその他の調査等により、当該品目に係る必要な情報が得られる場合には、調査件数の調整を図る。</p> <p>ウ 品質表示基準と国際規格の整合性を確認するための、国際規格及び市販品の品質実態に関する調査を実施する。</p> <p>エ 消費者、製造業者等から品質表示基準見直しに対する意見を聴取するため、必要に応じて消費者説明会や関係者を対象としたワーキンググループによる検討会を開催する。</p> <p>③ 農林水産省関係部局の要請に基づき、JAS規格制定等のために必要な調査を行う。</p> <p>④ ①から③までに係るパブリックコメントの募集及びその結果について説明会を行う。</p> <p>⑤ ①から④までに係る調査等の結果については、必要に応じて広報誌、インターネット等により公表する。</p>	<p>ア 製造業者に対するヒアリングを7基準について行った。</p> <p>イ 市販品検査を、7基準について計340件実施した。また、検査を実施した7基準のうち、5基準については、1基準当たり20件以上の検査を実施した。2基準については市場流通量が少ない等の理由から、1基準当たり20件以上の検査を実施できなかった。</p> <p>ウ 国際規格の内容についての調査及び国際規格に対応する市販品の品質実態に関する調査を3基準（177件）について実施した。</p> <p>エ 消費者団体に対する説明会を4回、消費者団体及び業界団体等をメンバーとしたワーキンググループを4回開催した。</p> <p>③ 農林水産省の要請に基づき、品質表示基準の見直しに係る調査として、牛由来原材料を使用した加工食品の実態調査として、表示確認調査を264件実施した。</p> <p>④ 農林水産省が行ったJAS規格及び品質表示基準の見直しに関するパブリックコメントの募集及び募集結果に係る説明会について希望者を募ったところ、参加希望者がいない又は少人数であったため、説明会を開催せず、参加希望者には個別対応により見直しの内容の説明を行った。</p> <p>⑤ ①から④までに係る調査等の結果について、センターが公表すべき案件はなかった。</p>
--	---	---	--

<p>(4) 農林物資の格付業務 今般のJAS法の改正により、センターが自ら行う生系の格付業務が廃止されることになったが、平成21年2月28日までの間は、当該業務を行うこととされていることから、同日までの間は、当該業務を適正に行う。</p>	<p>(4) 農林物資の格付業務 センターが自ら行う生系の格付業務については、生系の格付に関する基準文書に従い適正に行う。</p>	<p>(4) 農林物資の格付業務 センターが自ら行う生系の格付業務については、生系の格付に関する基準文書に従い適切に実施する。 また、検査の結果については厳正に管理する。</p>	<p>(4) 農林物資の格付業務 センターが自ら行う生系の格付業務については、生系の格付に関する基準文書に従い適正に16件実施した。 また、検査の結果については厳正に管理した。</p>
<p>(5) 国際規格に係る業務 ISO（国際標準化機構）のTC34、TC89／SC3及びTC218の国内審議団体として情報の収集、国内の意見集約等の国際標準作成に関する活動を行う。</p> <p>また、農林水産省の要請があった場合には、食品、林産物等の分析の専門家として、各種の国際会議に出席する。</p>	<p>(5) 国際規格に係る業務 ISO(国際標準化機構)のTC34、TC89／SC3及びTC218の国内審議団体として国際標準作成に関する活動を行うため、必要に応じて外部有識者等からなる委員会を設置し、情報の収集、国内の意見集約等を行う。</p> <p>また、農林水産省から各種の国際会議への出席要請が行われる場合に備え、各種情報の収集・整理、国際規格に関する知見の蓄積等に努める。</p>	<p>(5) 国際規格に係る業務 国際規格に我が国の意見を反映させるため、次に掲げる措置を講ずる。</p> <p>① ISO（国際標準化機構）のTC34、TC34／SC12、TC89／SC3及びTC218の国内審議団体として国際標準作成に関する活動を行うため、以下の措置を講ずる。</p> <p>○ 必要に応じて外部有識者等からなる委員会を設置し、情報の収集、国内の意見集約等を行う。</p> <p>○ 必要に応じて、国際会議に職員等を派遣する。</p> <p>② 農林水産省から各種の国際会議への対応要請に備え、次に掲げる措置を講ずる。</p> <p>○ 国際規格及び各国規格に関する情報を収集、整理する。</p>	<p>(5) 国際規格に係る業務 次に掲げる措置を講ずることにより、国際規格に我が国の意見を反映させるよう努めた。</p> <p>① ISO（国際標準化機構）のTC34（食品専門委員会）、TC34／SC12（官能検査分科会）、TC89／SC3（木質パネル専門委員会／合板分科委員会）及びISO／TC218（木材専門委員会）の国内審議団体事務局として、次のとおり国内委員会等の開催及び国際会議への職員の派遣を行うとともに、各委員会で検討されている案件についての情報の収集を行い、委員へ提供する等、国際標準作成に資するための活動を行った。</p> <p>[TC34]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ WG9（飼料及び食品チェーンにおけるトレーサビリティに係る作業部会） <ul style="list-style-type: none"> 国内委員会 1回開催 ・ WG12（農業へのISO9001:2000の適用に係る作業部会） <ul style="list-style-type: none"> 国内検討会 1回開催 国際会議 1回出席（1名） <p>[TC89／SC3及びISO／TC218]</p> <ul style="list-style-type: none"> 国内委員会 2回開催 国際会議 2回出席（2名） <p>② 農林水産省からの国際会議への対応要請に備え、次に掲げる取組を行った。</p> <p>○ 国際的に流通している食品等の海外における製造技術、国際規格、各国規格等に関する情報を収集、整理した。 また、コーデックス食品規格委員会（Codex）関連の国内会議に13回出席し、Codex委員会総会及び各部会等で検討されている食品規格の分析法及び検討状況等の情報を収集、整</p>

		<p>○ 必要に応じ、国際的に流通している食品等の品質及び表示の調査分析を行う。</p>	<p>理した。</p> <p>○ Codexに提案されている国際規格案について、当該規格案の品質要件及び分析法を検討するため、市販品の調査分析を次のとおり行い、結果を取りまとめ、農林水産省に報告した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発酵大豆ペースト (Fermented soybean paste (注1)) 75件 ・非発酵大豆製品 (Non-Fermented soybean products (注2)) 47件 <p>注1：みそに相当 注2：豆腐、油揚げ等に相当</p>
<p>(6) 農林物資の検査技術に関する調査研究業務</p> <p>① 農林物資の検査技術に関する調査研究については、現在必要とされている次のような偽装表示の監視・取締りのための検査技術の開発を積極的に行うとともに、大学又は研究機関との共同試験等により、調査研究の質の向上を図る。</p>	<p>(6) 農林物資の検査技術に関する調査及び研究業務</p> <p>① 農林物資の検査技術に関する調査及び研究については、現在必要とされている次のような偽装表示の監視・取締りのための検査技術の開発に重点化する。</p> <p>また、必要に応じて大学、試験研究機関、分析機関等との共同試験等を実施することにより調査及び研究の質の向上を図るとともに、他機関で開発された判別技術の中で検査に活用できると考えられるものについては積極的に技術導入を図り、検査に活用する。</p>	<p>(6) 農林物資の検査技術に関する調査及び研究業務</p> <p>① 農林物資の検査技術に関する調査及び研究については、現在必要とされている偽装表示の取締りのための検査技術の開発に重点化を図るとともに、質の向上並びに課題の選定、実施方法及び成果についての適正な点検・評価を行うため、次の掲げる措置を講ずる。</p> <p>また、調査研究の質の向上を図るため、必要に応じて大学、試験研究機関、分析機関等との共同試験等を実施することにより調査及び研究の質の向上を図るとともに、他機関で開発された判別技術の中で検査に活用できると考えられるものについては積極的に技術導入を図る。</p> <p>○ 食品等の検査技術に関する技術開発の動向等を把握するため、調査研究に係る試験研究機関の連絡会、各種学会等へ積極的に参加するほか、行政部局のニーズを把握するために農林水産省の各種会議に参加し、情報収集を行う。</p>	<p>(6) 農林物資の検査技術に関する調査及び研究業務</p> <p>① 農林物資の検査技術に関する調査及び研究については、次に掲げる措置を講ずることにより、現在必要とされている偽装表示の取締りのための検査技術の開発に重点化を図るとともに、質の向上並びに課題の選定、実施方法及び成果についての適正な点検・評価を行った。</p> <p>16課題について、試験研究機関等と共同で調査研究を実施するとともに、次の2課題について、他機関で開発された判別技術の導入を行うことにより、調査研究の水準の向上を図った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・畜産物の食品表示のための科学的分析法の妥当性確認 ・FRIP法を用いた魚介類の簡易種判別法の検討 <p>さらに、「PCR法を用いた肉種鑑別法の検討」を行い、飼料の肉骨粉で確立されていた畜種判別法を食肉及び食肉加工品に活用した。</p> <p>○ 調査研究の実施に当たっては、次の取組を行うことにより、食品等の検査技術に関する技術開発の動向等の把握に努めた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食品等の検査技術に関するニーズ、技術開発の動向等を把握するため、学会誌、試験研究機関の研究報告書等から必要な情報を入手した。 ・食品総合研究所及び中央水産研究所等の主催する試験

<p>ア 生鮮食品については、品種及び原産地の判別技術の開発</p>	<p>ア 生鮮食品については、青果物や魚類等のうち外観から容易に判別がつかないものについて品種及び原産地の判別技術の開発</p>	<p>○ 農林物資の検査技術に関する調査研究課題は20課題以上とし、そのうち中期目標に示された次に掲げる3分野等の偽装表示の監視・取締りのための検査技術の開発に関する課題が全課題に占める割合を80%以上とする。</p> <p>なお、年度途中で緊急に実施すべき課題が発生した場合には、課題件数に留意しつつ、必要に応じて実施する課題の調整を行う。</p> <p>・生鮮食品については、青果物や魚類等のうち外観から容易に判別がつかないタマネギの原産地、ブリ等の種等の判別技術</p>	<p>研究推進会議等計5回参画し、また、各種学会に10回参加し、学会発表を行うとともに情報収集を行った。</p> <p>○ 調査研究を次のとおり24課題実施した。このうち中期目標に定められた3分野に関する課題は22課題（うち生鮮食品13課題、加工食品6課題、遺伝子組換え食品3課題）であり、全課題に占める割合を91.7%とした。</p> <p>また、調査研究の予備調査として、事前調査研究を3課題実施した。</p> <p>ア 生鮮食品については、次のとおり13課題実施した。</p> <p>(7) 無機分析による生鮮農産物の原産国スクリーニング判別法の開発 【成果；国産60件、外国産60件のゴボウについて、ICP-AES及びICP-MSを用いて27元素を測定し、5元素濃度から成るスクリーニング判別法として活用可能と思われる精度の判別関数（判別率95%）を構築した。】（平成20年度継続）</p> <p>(4) 無機分析によるニンニクの原産国判別法の開発 【共同研究】 【成果；平成18年度に構築した国産及び中国産の判別関数を基にマニュアル案を作成し、3試験室で妥当性確認を行った結果、すべての試料について正しく判定された。事前運用試験の結果により明らかになった問題点を修正した上でマニュアルを完成させ、ホームページに掲載した。】（平成19年度終了）</p> <p>(5) 無機分析によるショウガの原産国判別法の開発 【共同研究】 【成果；平成18年度に構築した国産及び中国産の判別関数を基にマニュアル案を作成し、3試験室で妥当性確認を行った結果、すべての試料について正しく判定された。事前運用試験の結果により明らかになった問題点を修正した上でマニュアルを完成させ、ホームページに掲載した。】（平成19年度終了）</p>
------------------------------------	--	--	---

- (イ) 無機分析によるタマネギの原産国判別法の開発
〔共同研究〕
【成果；国産279件、外国産74件のタマネギについて、ICP-AES及びICP-MSにより27元素を測定し、判別分析を行った。その結果、11元素濃度から成る判別関数（判別率；国産97%、外国産82%）を構築した。】（平成19年度終了）
- (オ) 無機分析によるカボチャの原産国判別法の開発
〔共同研究〕
【成果；トンガ産11件、メキシコ産16件、ニュージーランド産14件、国産13件のカボチャについて、ICP-AES及びICP-MSにより、平成18年度に特定した産地判別の指標となる3元素も含めて26元素を測定し、判別関数を構築するためのデータを収集した。】（平成20年度継続）
- (カ) 窒素安定同位体比を用いた化学肥料使用判別法の開発
【成果；化学肥料使用の有無が窒素安定同位体比に及ぼす影響について検討するため、有機農産物と化学肥料使用農作物の安定同位体比を測定し、統計処理を行った。その結果、化学肥料使用の有無及び地域による有意差が認められた。】（平成19年度終了）
- (キ) 照射食品の検知技術の開発及び妥当性確認〔共同研究〕
【成果；照射食品の検知方法である熱ルミネッセンス法（TL法）の再照射線源である γ 線の代替としてX線が利用可能かどうか検討するため、平成18年度に開発した小型のX線照射装置を用いて、試験法の妥当性確認を行った。その結果、単一試験室における妥当性が確認された。】（平成20年度継続）
- (ク) 畜産物の食品表示のための科学的分析法の妥当性確認
〔共同研究〕
【成果；神戸大学で開発された国産と豪州産牛肉の判別法の有効性を検証するため、黒毛和種311件、国産ホルスタイン種304件、豪州産300件分析し、その結果4種のマーカーにより判別が可能であることを確認した。さらに、平成20年度に複数機関で妥当性確認試験を実施するに当たって、より判別精度を高めるために分析方法を改変した。】（平成20年度継続）

			<p>(ケ) ブリ近縁種及び類似魚類の種判別法の開発〔共同研究〕 【成果；メダイ、イボダイについてミトコンドリアDNAチトクロムb遺伝子の塩基配列の解析を行った。この解析結果と平成18年度に解析した塩基配列を基に、ブリ属4種、<i>Seriolella</i>属3種、メダイ及びスギの計9魚種を判別できる方法を開発した。】（平成20年度継続）</p> <p>(コ) マグロ属の凍結履歴判別法の検討〔共同研究〕 【成果；平成18年度のハンディタイプ近赤外分光分析計を用いた調査研究において「凍結」と「非凍結」サンプル間の波長について有意差が見られたため、平成19年度は汎用型近赤外分光分析計による測定条件の検討を行った。その結果、測定した吸光度の二次微分値から判別関数を作成した。】（平成19年度終了）</p> <p>(サ) 魚類の名称ガイドライン記載種を中心としたDNA解析及び種判別法の検討〔共同研究〕 【成果；魚介類39種のミトコンドリアDNAチトクロムb遺伝子の部分配列及び貝類、頭足類及び甲殻類のミトコンドリアDNA16SrRNA遺伝子の部分配列を解析し、国際的なDNAデータベースに登録した。さらに国際的なDNAデータベースから収集したデータを用いて、魚類の名称ガイドライン記載種の推定法の案を作成した。】（平成20年度継続）</p> <p>(シ) FRIP法を用いた魚介類の簡易種判別法の検討〔共同研究〕 【成果；九州大学で開発された3種のクモガニ科甲殻類（ズワイガニ、ベニズワイガニ、オオズワイガニ）の判別法であるFRIP法について、過去の調査研究で解析済みのデータを基に、表示監視業務で使用可能か検討を行った結果、実用化の可能性が示唆された。】（平成20年度継続）</p> <p>(ス) 無機分析による貝類の原産国判別法の開発〔共同研究〕 【成果；国産43件、中国産13件、韓国産15件の貝類の殻について、ICP-MSにより14元素を測定したところ、3元素が判別に有用な元素であることが確認された。】（平成20年度継続）</p>
<p>イ 加工食品については、原材料表示の真正性、原材料の原</p>	<p>イ 加工食品については、消費者の関心が高い品目を中心に原材</p>	<p>・加工食品については、消費者の関心が高い魚肉練り製品等の原材料表示</p>	<p>イ 加工食品については、次のとおり6課題実施した。 (7) 超高感度エネルギー分散型蛍光X線分析装置を用いた食</p>

<p>産地等の判別技術の開発</p>	<p>料表示の真正性、原材料の原産地等の判別技術の開発</p>	<p>の真正性、昆布等の原料原産地等の判別技術</p>	<p>品のスクリーニング産地判別の簡易・迅速測定法の検討 【成果；新型蛍光X線分析装置（新型EDXRF）を用いて、国産原木39件、中国産原木36件、中国産菌床31件の乾しいたけについて13元素を測定した。その結果、ICP-AES及びICP-MSで測定困難なBr, S, Clを新型EDXRFで測定することにより、ICP測定時よりも高い精度の判別関数（判別率93～100%）を構築した。】（平成20年度継続）</p> <p>(イ) PCR法を用いた肉種鑑別法の検討 【成果；センターが特許を出願した飼料中の動物由来のDNA検出用プライマーを用いて肉種鑑別法を検討した結果、高度に加工された食品においても肉種鑑別が可能であることが確認された。なお、平成19年6月に発生した牛挽肉加工品偽造表示事案の際には、検討結果を基に作成した暫定マニュアルを用いて緊急に肉種鑑別を実施した。】（平成19年度終了）</p> <p>(ロ) 無機分析によるうなぎ加工品の原料原産地判別法の開発 【成果；加工の影響が少ないと考えられるうなぎ蒲焼試料の肉間骨を分析対象部位とし、国産蒲焼19件、中国産蒲焼15件について、ICP-MSを用いて9元素を測定した。その結果5元素濃度から成る判別関数（判別率91%）を構築した。】（平成20年度継続）</p> <p>(ハ) 無機分析による昆布の原料原産地判別法の開発 【成果；国産80件、中国産70件のマコンブについて、ICP-MSで13元素を測定し、判別分析を行った。その結果、3元素濃度から成る判別関数（判別率100%）を構築した。】（平成20年度継続）</p> <p>(ニ) 加工食品の原料魚種判別法の開発～タラ類以外のすり身原料魚種～〔共同研究〕 【成果；練り製品に使用される可能性がある20種類の魚種について、ミトコンドリアDNAの一部塩基配列を解析した。また、平成19年度に開発したハモ、イトヨリダイ属3種及び平成18年度に開発したスケトウダラ、ミナミダラ及びホキの特異的検出PCR法を26魚種に対して実施したところ、7魚種の特異性が確認された。】（平成20年度継続）</p>
--------------------	---------------------------------	-----------------------------	--

ウ 遺伝子組換え食品については、遺伝子組換え原材料の定性及び定量分析技術の開発

ウ 遺伝子組換え食品については、新たに遺伝子組換えに係る表示が義務付けられた食品等、判別技術が確立されていないものを中心に遺伝子組換え原材料の定性及び定量分析技術の開発

・ 遺伝子組換え食品については、新たに遺伝子組換えに係る表示が義務付けられた、又は表示の義務付けが見込まれる新規承認組換え農産物についての遺伝子組換え体の検知技術

(カ) 辛子めんたいこの原料魚種判別法の開発〔共同研究〕
【成果；平成18年度に開発したスケトウダラ、マダラ属2種及びミナミダラを特異的に検出するプライマーセットを改良し、マニュアル案を作成した。このマニュアル案を用いて3試験室で事前運用試験を行い、その結果を基に再度特異的検出プライマーの改良及びマニュアル案の変更を検討した。】（平成20年度継続）

ウ 遺伝子組換え食品については、次のとおり3課題実施した。

(7) 農産物からの遺伝子組換え体の検知技術の開発
＜新規承認組換え農産物の検知技術＞
【成果；GMアルファルファDNAの定性検知感度を明らかにするため、GMアルファルファの特異的塩基配列を含む計5種のDNA配列を同一のプラスミド上に組込んだGM様のプラスミド及び計2種の内在性DNA配列を同一のプラスミド上に組込んだnon GM様のプラスミドを構築した。これらのプラスミドからプラスミド混合試料を作製し、定性下限を確認した。】（平成19年度終了）

(イ) 農産物からの遺伝子組換え体の定量分析技術の確立
＜GMトウモロコシのスクリーニング定量分析法＞
〔共同研究〕
【成果；妥当性確認試験を実施するための事前検討として、3機関による予備試験を行い、これらの試験結果を受けて共同試験用の実験プロトコルを作製した。また妥当性確認試験用のブラインド試料の作製に必要なサンプルを確保した。】（平成20年度継続）

(ウ) 農産物からの遺伝子組換え体の定性分析技術の確立
＜GMトウモロコシの定性分析法＞〔共同研究〕
【成果；妥当性確認試験のために抽出方法について検討し、前処理方法を確定した。その結果を基に、共同試験用の実験プロトコルを作成した。】（平成20年度継続）

エ 重点3分野以外の調査研究を、次のとおり2課題実施した。

(7) 生糸機械検査システムの開発に関する研究
【成果；平成18年度に開発した縦型実用検査装置の改良を行った。また、国際的な生糸電子検査基準の策定に協力するために、日本及び中国において同一試料による比較試験を行った。なお、この調査研究の成果により、平成

19年7月27日付けで「生系のずる節検出方法及び装置」の特許を取得した。】(平成19年度終了)

- (イ) 主要な食用水産動植物とその加工食品に存在するヒ素の形態別濃度の解明〔共同研究〕
【成果：6種の水産生鮮品及び6種の水産加工品について、ICP-MSにより総ヒ素濃度及び7種の形態別ヒ素加工物濃度を測定した結果、生鮮品及び加工品ともに検出されたヒ素の形態は毒性の低い化合物が多く、食品としての危険性はきわめて低いことが確認された。】(平成19年度終了)

オ 事前調査研究を次のとおり3課題実施した。

- (7) 波長分散型蛍光X線分析装置を用いた農水産物の原産国判別法の検討

【成果：国産44件、韓国産22件、北朝鮮産22件、中国産28件、トルコ産15件及びメキシコ産4件のマツタケについて、波長分散型蛍光X線分析装置により18元素を測定した。その結果、日本と東アジア(韓国、北朝鮮及び中国)産を判別する、7元素濃度から成る判別関数(判別率82%)を構築し、マツタケの原産国判別の可能性が示唆された。】(平成19年度終了)

- (イ) 安定同位体比を用いた畜産物の原産国判別法の検討

【成果：畜産物について、酸素安定同位体比の測定が可能かどうか検討した結果、試料の吸湿性等の影響で測定困難であることが明らかになった。また炭素及び窒素の安定同位体比測定による豚肉及び鶏肉の原産国判別の可能性を検討した結果、豚肉について、炭素安定同位体比による原産国判別の可能性が示唆された。】(平成20年度調査研究として継続)

- (ウ) 近赤外分光法によるそば粉と小麦粉の混合割合の推定法の検討

【成果：近赤外分光法により、そば粉及び小麦粉の各タンパク質に特異的な吸収領域を検出した結果、各波長領域における2次微分値において有意差が認められたことから、そば粉と小麦粉の識別の可能性が明らかになった。この結果により、そば粉と小麦粉の混合試料を用いて配合割合を定量可能か検討したところ、そば粉と小麦粉の

<p>また、課題の選定に当たっては、外部の有識者からの客観的な意見を踏まえて決定する。</p>	<p>また、課題の選定・評価に当たっては、外部有識者からの客観的な意見を踏まえて行い、毎事業年度20課題以上実施する。</p>	<p>○ 必要性の高い調査研究課題の選定、実施方法及び成果について適正な点検・評価を行い、その結果を業務運営に反映させるため、外部の有識者を含めた調査研究総合評価委員会（仮称）を開催する。</p> <p>また、調査研究の適切な進行管理及び内部評価に基づく計画変更の指示等を効率的に行うため調査研究推進委員会（仮称）を開催する。</p>	<p>混合割合を推定できる可能性が示唆された。】（平成20年度調査研究として継続）</p> <p>○ 外部の有識者を含む調査研究総合評価委員会を平成20年3月に開催し、平成19年度調査研究成果の評価を行うとともに、平成20年度の調査研究課題として「DNA分析を使用した牛肉の雌雄判別法の検討」、「安定同位体比を用いた豚の原産国判別法の検討」、「近赤外分光法によるそば粉と小麦粉の混合割合推定法の検討」等23課題を選定した。</p> <p>また、本部、横浜事務所及び神戸センターにおいて調査研究推進委員会を計3回開催し、平成19年度における調査研究の実行計画について検討する等、調査研究の進行管理等を行った。なお、検討の結果、計画変更を要する課題はなかった。</p>
<p>② 調査研究の成果については、公開発表会を毎事業年度1回以上実施するとともに、検査・分析業務等に迅速に活用する。</p>	<p>② 調査研究の成果については、毎事業年度1回以上の公開発表会を開催するとともに、調査研究報告書、インターネット等により広く一般に公開する。</p> <p>また、調査研究の成果については、検査・分析のためのマニュアルに反映し、検査・分析業務等に迅速に活用する。</p>	<p>② 調査研究の成果を積極的に公表するため、次に掲げる措置を講ずる。</p> <p>○ 調査研究報告書を作成し、関係機関へ配布するとともに、インターネット等により広く一般に公表する。</p> <p>また、公開発表会を開催する。</p> <p>○ 調査研究の成果を検査分析等業務に迅速に活用するため、検査・分析マニュアルの作成等を行う。</p>	<p>② 次に掲げる措置を講ずることにより、調査研究の成果を積極的に公表した。</p> <p>○ 平成18年度の調査研究の成果について「食品関係等調査研究報告第31号」を作成し、公表するとともに、調査研究結果の概要をホームページに掲載した。</p> <p>また、公開調査研究発表会を平成19年11月に開催し、「DNA分析による国産牛と豪州産牛の判別法の検討」、「無機元素分析によるマコンブの原料原産地判別法の開発」等11課題について発表した。（外部からの参加者82名）</p> <p>○ 「ショウガの原産国判別マニュアル」、「ニンニクの原産国判別マニュアル」、「サバ属魚類の魚種判別マニュアル」及び「マアジとニシマアジの魚種判別マニュアル」を作成し、ホームページに掲載した。</p>
<p>(7) 依頼検査 製造業者等から依頼された農林物資の品質、成分等に関する検査を適切に行う。</p>	<p>(7) 依頼検査 製造業者等から依頼された農林物資の検査を適切に行うため、依頼検査に関する基準文書を作成するとともに、依頼者の機密保持を図るため検査結果の厳正な管理を行う。</p>	<p>(7) 依頼検査 製造業者等から依頼された農林物資の検査を適切に行うため、依頼検査に関する基準文書を作成するとともに、必要に応じて見直しを行う。</p> <p>また、依頼者の機密保持を図るため検査結果の厳正な管理を行う。</p>	<p>(7) 依頼検査 依頼検査に関する基準文書の見直しを行うとともに、製造業者等から依頼された、林産物（1件）及び生糸（46件）に係る依頼検査を基準文書に基づき適切に実施した。</p> <p>また、依頼者の機密保持を図るため、検査結果の厳正な管理を行った。</p>

<p>(8) 緊急時の要請に関する業務 農林水産大臣から独立行政法人農林水産消費安全技術センター法（平成11年法律第183号）第12条の規定に基づき調査、分析又は検査を緊急に実施するよう要請があったときは、機動的かつ柔軟な組織体制をとるなど、最優先で組織的に取り組み、必要な調査、分析又は検査の迅速かつ正確な実施に努めるとともに、その結果について農林水産大臣に迅速に報告する。</p>	<p>(8) 緊急時の要請に関する業務 独立行政法人農林水産消費安全技術センター法（平成11年法律第183号）第12条の規定に基づき緊急時の調査等については、農林水産大臣からの要請に従い、機動的かつ柔軟な組織体制をとるなど、最優先で迅速かつ的確に実施し、その結果を速やかに農林水産大臣に報告する。 必要な分析方法、データを効率よく検索できるように、調査研究結果や研究論文等の情報を収集し、体系的に整理する。</p>	<p>(8) 緊急時の要請に関する業務 農林水産大臣から独立行政法人農林水産消費安全技術センター法（平成11年法律第183号）第12条の規定に基づき調査、分析又は検査を緊急に実施するよう農林水産大臣から要請があったときに、迅速かつ的確に対応することができるよう、次に掲げる措置を講ずる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 調査研究結果及び緊急時に活用する可能性の高い研究論文等を整理し、必要に応じた分析方法、データを効率的に検索できる情報管理体制を維持するとともに、緊急要請に迅速に対応できるよう要請が想定される事案についてそれぞれの専門家を登録し、必要に応じて見直す。 ○ 農林水産大臣から要請があった場合には、プロジェクトチームを設置する等により、他の業務に優先して要請された調査、分析又は検査の迅速かつ正確な実施に努めるとともに、調査結果を速やかに報告する。 	<p>(8) 緊急時の要請に関する業務 次に掲げる措置を講ずることにより、農林水産大臣から独立行政法人農林水産消費安全技術センター法第12条の規定に基づき、調査、分析又は検査を緊急に実施するよう要請があったときに、迅速かつ的確に対応する体制を整備した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 要請が想定される事案ごとに研究論文及び分析方法等を整理し、また、外部からの提供情報を含め、日々入手した情報の蓄積と整理を引き続き行い、情報管理体制の充実に努めた。 また、平成19年度の3法人統合に伴い緊急調査の実施体制を見直し、関係する規程を改正するとともに、同規程に基づく緊急時における指示・連絡体制等の対応マニュアルを策定した。また、想定される要因及びその内容別分類ごとに専門的知見を有する職員及び機器を登録した名簿を見直し、更新した。 ○ 平成19年度については、独立行政法人農林水産消費安全技術センター法第12条の規定に基づく農林水産大臣からの緊急時の調査、分析又は検査の要請はなかった。
<p>4 リスク管理に資するための有害物質の分析業務 農林水産省が行う科学的知見に基づく食品安全行政に資するため、食品等に含まれる有害物質の分析を実施するものとする。 その実施に当たっては、農林水産省が策定する「サーベイランス・モニタリング計画」に含まれる有害化学物質・品目についての実態調査を実施する際には、評価・公表ガイドラインに従って迅速かつ的確</p>	<p>4 リスク管理に資するための有害物質の分析業務 (1) 農林水産省が行うリスク管理に資するための有害物質の分析については、農林水産省が策定する「サーベイランス・モニタリング計画」に含まれる有害化学物質・品目についての実態調査を優先的に実施する。</p>	<p>4 リスク管理に資するための有害物質の分析業務 (1) 農林水産省が行う食品の安全性に関するリスク管理について、その的確な実施に資するため、有害化学物質の分析に当たっては、次に掲げる措置を講ずる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 農林水産省が策定する「サーベイランス・モニタリング計画」に含まれる有害化学物質・品目についての実態調査を優先的に実施する。 	<p>4 リスク管理に資するための有害物質の分析業務 (1) 農林水産省が行う食品の安全性に関するリスク管理について、有害化学物質の分析に当たっては、次に掲げる措置を講ずることにより、的確な実施に努めた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 農林水産省が策定する「サーベイランス・モニタリング年次計画」に含まれる有害化学物質・品目についての実態調査を優先的に実施した。 〔農産物〕 <ul style="list-style-type: none"> ・ 残留農薬 2,038検体 ・ かび毒（注1） 210検体 注1：デオキシニバレノール（DON）、ニバレノール及び

確に行い、その結果を農林水産省に報告する。

その際、肥料、農薬、飼料及び飼料添加物並びに土壤改良資材の検査等業務と連携・調整を図るとともに、当該業務を通じて蓄積された知見等を活用し、生産現場等におけるリスク低減対策の支援等に資するよう、これらの資材の特性や使用実態等を踏まえつつ、農林水産省が策定する「サーベイランス・モニタリング計画」の下で分析対象を選定するなど、中期目標期間中に4件以上の課題についてテーマを設定するとともに、その結果について取りまとめる。

さらに、分析結果の信頼性を客観的に保証することができるシステムを確立するものとする。

(2) その際、検査等業務に従事する職員から成るプロジェクトチームを毎事業年度設置し、それぞれの情報や知見の活用、テーマの検討等を行うことにより、肥料、農薬、飼料及び飼料添加物並びに土壤改良資材の検査等業務と連携・調整を図るとともに、当該業務を通じて蓄積された知見等を活用し、生産現場等におけるリスク低減対策の支援等に資するよう、これらの資材の特性や使用実態等を踏まえつつ、農林水産省が策定する「サーベイランス・モニタリング計画」の下で分析対象を選定する。

- 具体的には、肥料、農薬、飼料及び飼料添加物並びに土壤改良資材の検査等業務の有する生産資材の特性や使用実態等の情報を活用しつつ、
- ① 農薬が残留するおそれの高い作物
 - ② 汚泥肥料の施用等により有害重金属を含むおそれのある

○ 新たに顕在化したリスクに機動的に対応し得るよう、必要に応じて対象有害化学物質及び実施検体数の調整を図るものとする。

(2) 次の①～④に掲げる課題など比較的风险が高いおそれのある農産物等について、1テーマ以上を設定して次により有害物質の分析を行う。

○ 検査等業務に従事する職員からなるプロジェクトチームを設置し、検査等業務を行う各部門が有するデータを活用して分析対象や分析方法等の選定を行う。

○ 肥料、農薬、飼料及び飼料添加物並びに土壤改良資材の検査等業務と連携・調整を図るとともに、当該業務を通じて蓄積された知見等を活用し、生産現場等におけるリスク低減対策の支援等に資するよう、これらの資材の特性や使用実態等を踏まえつつ、農林水産省が策定する「サーベイランス・モニタリング計画」に基づき実施するものとする。

- ① 農薬が残留するおそれの高い作物
- ② 汚泥肥料の施用等により有害重金属を含むおそれのある作物

ゼアラレノン

〔飼料〕

- | | |
|-----------|---------|
| ・かび毒（注2） | 1,137検体 |
| ・有害金属（注3） | 783検体 |
| ・残留農薬 | 662検体 |
| ・ダイオキシン類 | 37検体 |

注2：オクラトキシンA、アフラトキシン類、ゼアラレノン及びDON

注3：カドミウム、無機ヒ素、水銀及び鉛

○ 新たに顕在化したリスクで、センターが対応すべき事案はなかった。

(2) 農薬が残留するおそれの高い作物について、次のとおり有害物質の分析を行うことにより、生産現場等におけるリスク低減策の支援等に寄与した。

○ ポジティブリスト制度が導入された中で、前作の作物に使用した農薬の作物残留に係るリスク低減に資するためのデータを得ることを目的として、食品検査業務及び農薬検査業務に従事する職員からなる「前作に使用された農薬の残留分析プロジェクトチーム」を設置し、検査等業務を行う各部門が有するデータを活用して、分析対象や分析方法等を選定した。

○ 生産現場におけるリスク低減対策の支援に資するよう、前作の農作物に使用した農薬の残留状況について調査を行うため、農林水産省が策定した「平成19年度食品の安全性に関する有害物質のサーベイランス・モニタリング年次計画」に基づく国産野菜の残留農薬分析の実施に当たっては、通常の検査に加え、農薬検査部門が有する土壤半減期の長い農薬等に関する知見を活用して選定した分析対象農薬を、食品検査部門において効率的かつ効果的に101件分析した。

	<p>作物</p> <p>③ カビ毒の発生する可能性の高い地域の作物</p> <p>④ 上記に掲げるもののほか、生産現場等におけるリスク低減対策の観点から必要な課題等、4件以上の課題について、中期目標期間中にテーマを設定して実施する。</p> <p>(3) 有害物質の分析の実施に当たっては、評価・公表ガイドラインに従って迅速かつ的確に行い、その結果を農林水産省に報告する。</p> <p>(4) 分析結果の信頼性を客観的に保証するため、精度管理、分析法の妥当性の確認等を的確に実施する。</p> <p>また、当該業務に従事する要員の資格要件を定め、必要な教育及び訓練を行う。</p>	<p>③ カビ毒の含有のリスクが高い作物</p> <p>④ 上記に掲げるもののほか、生産現場等におけるリスク低減対策の観点から必要な課題</p> <p>(3) 有害物質の分析の実施に当たっては、農林水産省が定めている評価・公表ガイドラインの要件に従って迅速かつ的確に実施し、その結果を農林水産省に報告する。</p> <p>(4) 分析結果の信頼性を客観的に保証するため、ISO/IEC17025及びGLPの考え方に基づく精度管理、国際的プロトコルの考え方に基づく分析法の妥当性の確認等を的確に実施する。</p> <p>また、当該業務に従事する要員の資格要件を定め、分析機器の操作等の分析技術に関する教育及び訓練を行う。</p>	<p>(3) 有害物質の分析の実施に当たっては、農林水産省が定めている評価・公表ガイドラインの要件に従って迅速かつ的確に実施し、その結果を農林水産大臣に報告した。</p> <p>(4) 分析結果の信頼性を客観的に保証するため、次に掲げる取組を行った。</p> <p>○ 内部精度管理として、分析の都度、添加回収試験等を行うことにより分析の精確さを管理するとともに、外部精度管理として、分析担当者に対して担当試験に係る外部技能試験に1回以上参加させた。</p> <p>また、野菜・果実の残留農薬に係る分析法を改良したことに伴う当該分析法の妥当性確認試験を行い、その妥当性について確認した。</p> <p>○ 「リスク管理分析担当者資格認定マニュアル」において当該業務に従事する要員の資格要件を定めるとともに、分析技術及び分析試験業務の品質管理・品質保証に関する教育訓練を実施した。</p>
<p>5 カルタヘナ担保法関係業務 遺伝子組換え生物等の使用等の規制による生物の多様性の確保に関する法律（平成15年法律第97号）第32条第1項の規定に基づき、同条第2項の農林水産大臣の指示に従い、立</p>	<p>5 カルタヘナ担保法関係業務 遺伝子組換え生物等の使用等の規制による生物の多様性の確保に関する法律（平成15年法律第97号）第32条第1項の規定に基づき、同条第2項の農林水産大臣の指示に従い、立入り、質問、</p>	<p>5 カルタヘナ担保法関係業務 遺伝子組換え生物等の使用等の規制による生物の多様性の確保に関する法律（平成15年法律第97号。以下「カルタヘナ担保法」という。）第32条第1項の規定に基づき、同条第2項の農林水産大臣の指示に従い、立入り、質問、検</p>	<p>5 カルタヘナ担保法関係業務 次に掲げる措置を講ずることにより、カルタヘナ担保法第32条の規定に基づき、同条第2項の農林水産大臣の指示に従い、立入り、質問、検査及び収去を的確に実施する体制を整備した。</p>

<p>入り、質問、検査及び収去を的確に実施し、その結果を速やかに農林水産大臣に報告する。</p>	<p>検査及び収去を的確に実施し、その結果を速やかに農林水産大臣に報告する。</p>	<p>査及び収去を的確に実施するため、次に掲げる措置を講ずる。 また、立入り、質問、検査及び収去を実施した場合には、その結果を速やかに農林水産大臣に報告する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 立入検査等を行うための規程等を必要に応じて見直す。 ○ 農林水産大臣からカルタヘナ担保法第31条第1項の規定に基づき収去した遺伝子組換え生物等の検査の依頼があった場合は適切に実施する。 	<p>なお、農林水産大臣から立入り、質問、検査及び収去の指示はなかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 立入検査等を行うための規程類については、立入検査等の要員の資格を規定する等の改正を行った。 ○ 農林水産大臣からカルタヘナ担保法第31条第1項の規定に基づき収去した遺伝子組換え生物等の検査の依頼はなかった。
<p>6 国際協力業務 可能な範囲において、研修生の受入れ、海外への専門家の派遣等の国際協力を行う。</p>	<p>6 国際協力業務 可能な範囲において、センターの技術力を活用した専門家の海外派遣及び海外からの研修生の受入れを行う。</p>	<p>6 国際協力業務 農林水産省、独立行政法人国際協力機構等の関係機関からの国際技術協力等の要請については、可能な範囲において、開発途上国等からの技術支援要請に対応するため、国内活動及び専門家の海外派遣を行うとともに、海外からの研修員の受入れを行う。</p> <p>また、必要に応じて独立行政法人国際協力機構の主催する研修等に職員を派遣する。</p>	<p>6 国際協力業務 国際協力機構等からの国際技術協力等の要請を踏まえ、次の取組を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 国際協力機構（JICA）から技術団員の派遣要請があり、職員を1回（1名）派遣した。 ○ JICAから技術協力専門家の派遣要請があり、役職員を講師として2回（2名）派遣した。 ○ JICA等からの要請により海外からの研修員を受入れ、JAS制度、日本の飼料安全制度、食品及び飼料等の分析技術等に関する研修を7回（延べ16か国、46名）実施した。 <p>また、環境省環境調査研修所の主催する海外研修生指導者研修及び国際獣疫事務局（OIE）の主催する獣医行政実績評価研修にそれぞれ役職員（2名）を派遣した。</p>
<p>第4 財務内容の改善に関する事項 適切な業務運営を行うことにより、収支の均衡を図る。 また、自己収入（JAS法に基づく格付業務及び飼料安全法</p>	<p>第3 予算（人件費の見積りを含む。）、収支計画及び資金計画 自己収入（JAS法に基づく格付業務及び飼料安全法に基づく特定飼料の検定業務に係る収入等を除く。）を平成18年度予算を基</p>	<p>第3 予算（人件費の見積りを含む。）、収支計画及び資金計画 本事業年度の予算（人件費の見積りを含む。）、収支計画及び資金計画は、別表1、2及び3に定めるとおりとする。</p>	<p>第3 予算（人件費の見積りを含む。）、収支計画及び資金計画 財務諸表等を参照のこと。 ○ 平成19年度においても予算の執行を適切に行い、平成18年度に引き続き、業務経費、一般管理費の削減に取り組んだ。</p>

<p>に基づく特定飼料の検定業務に係る収入等を除く。)の増額を図る。</p> <p style="text-align: center;">〔略〕</p>	<p>準として、毎事業年度1%以上の増額を図る。</p> <p style="text-align: center;">〔略〕</p> <p>また、平成18年度予算を基準として、1%以上の自己収入（JAS法に基づく格付業務及び飼料安全法に基づく特定飼料の検定業務に係る収入等を除く。）の増額を図るための取組を行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 執行に当たって、30万円以上の入札及び契約に係る文書にあっては、決裁終了後に監事に回付するよう関係規程類を改正し、入札及び契約を適正に実施した。また、契約に係る情報の公表について、契約事務取扱規程を改正し、国と同じ様式により公表した。 ○ 年度当初及び年度途中において必要に応じた予算配付を行うことにより、適切かつ効果的な資金配分を行った。 ○ 自己収入（JAS法に基づく格付業務及び飼料安全法に基づく特定飼料の検定業務に係る収入等を除く。）について、講師派遣の要請に積極的に対応する等の自己収入の増額のための取組を行った結果、平成19年度予算額を上回る自己収入（9,086,496円）を得た。 なお、センターは運営費交付金を主な財源として運営しており、これによつては利益は生じない。この他、検査・検定手数料、講習事業収入等により当期利益が生じているが、これは通常の業務範囲内での利益計上である。このため、中期目標期間終了後、運営費交付金残額と合わせた利益金は、国庫に返納することとして、特に目的積立金として申請していない。
<p>第4 短期借入金の限度額 平成18年度 : 7億円 平成19年度～平成22年度 : 13億円 (想定される理由) 運営費交付金の受入れが遅延 公務災害及び通勤災害が発生した場合の災害補償費の借入れ 神戸センターの移転・新築の際、現庁舎の跡地の売却収入が発生するまでの間、一時的に資金が不足した場合に業務活動に充当する経費及び移転・新築等に係る経費の借入れ</p>	<p>第4 短期借入金の限度額 平成19年度 : 13億円 (想定される理由) 運営費交付金の受入れが遅延 公務災害及び通勤災害が発生した場合の災害補償費の借入れ 神戸センターの移転新築の際、現庁舎の跡地の売却収入が発生するまでの間、一時的に資金が不足した場合に業務活動に充当する経費及び移転新築等に係る経費の借入れ</p>	<p>第4 短期借入金の限度額 運営費交付金の受入れの遅延等の短期借入を行う事案はなかった。</p>
<p>第5 重要な財産を譲渡し、又は担保に供しようとするときは、</p>	<p>第5 重要な財産を譲渡し、又は担保に供しようとするときは、その計画</p>	<p>第5 重要な財産を譲渡し、又は担保に供しようとするときは、その計画</p>

その計画

神戸センターの移転・新築に伴い不要となる現庁舎及び土地については処分する。その際、①庁舎の解体・撤去を行った上で土地を売却する、②庁舎の解体・撤去を行わず、庁舎と一体で土地を売却する、のいずれかの方法によるものとし、より有利な売却を図ることができるよう、十分に検討を行う。なお、現庁舎等を処分したことによる当該売却収入については、移転新築費用の一部に充当する。

土地：兵庫県神戸市中央区小野浜町1-4
(面積:7,292.12m²)

建物：旧館
昭和2年築、RC-4-1造
延べ床面積4,401.18m²
新館
昭和6年築、SRC-4-1造
延べ床面積11,623.26m²

(注) 土地の面積、建物の延べ床面積については、独立行政法人への移行時に国から出資された面積を記載 なお、第4に記述したとおり、当該売却収入が発生するまでの間、一時的に資金が不足した場合には、短期借入れを実施することとし、当該短期借入れの担保として現庁舎の土地及び建物を供する。

神戸センターの移転・新築に伴い不要となる現庁舎及び土地の処分について、①庁舎の解体・撤去を行った上で土地を売却する、②庁舎の解体・撤去を行わず、庁舎と一体で土地を売却する、のいずれかの方法によるものとし、より有利な売却を図ることができるよう、十分に検討を行う。

なお、第4に記述したとおり、当該売却収入が発生するまでの間、一時的に資金が不足した場合には、短期借入れを実施することとし、当該短期借入れの担保として現庁舎の土地及び建物を供する。

重要な財産の譲渡及び担保に供する事案はなかった。

なお、センターが所有する重要な資産として、庁舎及びその敷地、ほ場を所有しているが、庁舎については、センターが実施するすべての検査等業務に、ほ場については、肥料の公定規格の改正等に資する調査研究業務に使用している。

これらの資産は、引き続き事務・事業に必要な資産であり、遊休資産にはなっていない。

第6 剰余金の使途

検査検定業務に係る業務運営の効率化及び業務の質の向上を図るための分析機器の購入の経費に充当する。

第6 剰余金の使途

検査検定業務に係る業務運営の効率化及び業務の質の向上を図るための分析機器の購入の経費に充当する。

第6 剰余金の使途

剰余金を使用する事案はなかった。
なお、利益剰余金(34,399,080円)は生じているが、これは、検査・検定手数料、講習事業収入等の他、前中期目標期間繰越積立金(自己収入取得資産の減価償却費、棚卸し資産等に充当したものの残額)、積立金によるものである。

<p>第5 その他業務運営に関する事項 なし</p>	<p>第7 その他主務省令で定める業務運営に関する事項</p> <p>1 施設及び設備に関する計画 業務の適切な実施を確保するため、老朽化が著しく耐震上問題のある神戸センターの現庁舎について、移転・新築することとし、併せて新築時に大阪及び岡山の両事務所の業務を移管し、これらの事務所を廃止する。 また、業務実施上の必要性及び既存の施設・設備の老朽化等に伴う施設及び設備の整備・改修等を計画的に行う。</p> <p style="text-align: center;">〔略〕</p>	<p>第7 その他主務省令で定める業務運営に関する事項</p> <p>1 施設及び設備に関する計画 業務の適切かつ効率的な実施を確保するため、平成20年度の竣工に向け神戸センター新庁舎の建設を行うとともに、業務実施上の必要性及び既存の施設・設備の老朽化等に伴う施設及び設備の整備・改修等を計画的に行う。</p> <table border="1" data-bbox="931 529 1361 657"> <thead> <tr> <th>所名</th> <th>整備内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>本部</td> <td>農薬散布棟改修工事</td> </tr> <tr> <td>仙台</td> <td>検査設備等改修工事</td> </tr> <tr> <td>神戸</td> <td>新庁舎建設工事</td> </tr> </tbody> </table>	所名	整備内容	本部	農薬散布棟改修工事	仙台	検査設備等改修工事	神戸	新庁舎建設工事	<p>第7 その他主務省令で定める業務運営に関する事項</p> <p>1 施設及び設備に関する計画 本部（農薬検査部）の農薬散布棟改修工事及び仙台センターの検査設備等改修工事を実施した。また、神戸センター新庁舎建築工事においては進行管理に努め、平成20年度の竣工に向け3か年度計画の2年目として基礎工事及び躯体工事を実施した。 さらに、平成19年度補正予算により措置された本部及び福岡センターの遺伝子分析検査設備拡充工事に着手した。</p>
所名	整備内容										
本部	農薬散布棟改修工事										
仙台	検査設備等改修工事										
神戸	新庁舎建設工事										
	<p>2 職員の人事に関する計画（人員及び人件費の効率化に関する目標を含む。）</p> <p>(1) 方針 業務の適切かつ効率的な実施を確保するため、食品、肥飼料、農薬の各検査等業務間の人事交流に努めるとともに、共通部門である一般管理、企画調整、情報提供の各業務に適正な人員配置を行う。</p>	<p>2 職員の人事に関する計画（人員及び人件費の効率化に関する目標を含む。）</p> <p>(1) 方針 業務の適切かつ効率的な実施を確保するため、食品、肥飼料、農薬の各検査等業務間の人事交流に努めるとともに、共通部門である一般管理、企画調整、情報提供の各業務に適正な人員配置を行う。</p>	<p>2 職員の人事に関する計画（人員及び人件費の効率化に関する目標を含む。）</p> <p>(1) 方針 食品、肥飼料、農薬の各検査等業務間の人事交流に努めるとともに、次のとおり共通部門である一般管理、企画調整、情報提供の各業務に適正な人員配置を行うことにより、業務の適切かつ効率的な実施の確保に努めた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 地方組織の一般管理部門（総務課、会計課）は各地域センターのみに設置し、本部横浜事務所及び各地域センターの事務所には設置せず、一般管理部門の合理化を図った。 ○ 旧3法人にそれぞれ設置していた企画調整部門をさいたま本部の企画調整部に一元化し、合理化を図った。 ○ 肥飼料、農薬等の生産資材や食品等に関する情報を消費者、生産者、事業者等へ一元的に提供できるよう、各部門の担当者を情報提供部門に配置し、情報提供体制の整備を行った。 								
	<p>(2) 人員に関する指標 簡素で効率的な政府を実現するための行政改革の推進に関する</p>	<p>(2) 人員に関する指標 業務の効率化を図り、人員を削減することにより、人件費（退職金及び福</p>	<p>(2) 人員に関する指標 業務の効率化を図り、人員を平成18年1月1日時点（注）の常勤職員722名から688名（平成20年1月1日時点）と34名削減</p>								

る法律に基づき、平成18年度以降の5年間に於いて、センター全体の人件費（退職金及び福利厚生費（法定福利費及び法定外福利費）並びに非常勤役職員給与及び人事院勧告を踏まえた給与改定部分を除く。）について5%以上の削減を行うとともに、第1の1(5)の10%相当額の抑制を行うに当たり、一般管理部門の統合等による管理部門の合理化等の統合メリットを発現することにより、更なる人件費の削減を行う。

また、国家公務員の給与構造改革に併せ、人事院勧告を踏まえて、役職員の給与について必要な見直しを進める。さらに、「経済財政運営と構造改革に関する基本方針2006」に基づき、国家公務員の給与構造改革を踏まえ、人件費改革を平成23年度まで継続する。

(参考)

平成17年度の人件費

5,175百万円

期初の常勤職員数 742人

(注)平成19年4月1日に統合した旧肥飼検及び旧農薬検の平成17年度の人件費及び期初の常勤職員数（旧肥飼検1,081百万円、149人、旧農薬検540百万円、72人）を含む。なお、平成19年4月1日の統合時における常勤職員数は、700人で

利厚生費（法定福利費及び法定外福利費）並びに非常勤職員給与及び人事院勧告を踏まえた給与改定部分を除く。）について、平成17年度決算額を基準として2%以上の削減を行うとともに、第1の1(5)の1.5%相当額の抑制を行うに当たり、一般管理部門の統合等による管理部門の合理化等の統合メリットを発現することにより、更なる人件費の削減を行う。

また、国家公務員の給与構造改革に併せ、人事院勧告を踏まえて、役職員の給与について必要な見直しを進める。更に、「経済財政運営と構造改革に関する基本方針2006」に基づき、国家公務員の給与構造改革を踏まえ、人件費改革を進めるものとする。

することにより、平成17年度決算額を基準として人件費（退職金及び福利厚生費（法定福利費及び法定外福利費）並びに非常勤職員給与及び人事院勧告を踏まえた給与改定部分を除く。）を4.8%削減した。

注：独立行政法人通則法第60条の規定による常勤職員数の国会報告基準日である。なお、平成18年1月1日における職員数は旧3法人の職員数を合算したものである。

なお、平成19年度において、センターの給与体系は国と同一であったものの、国に比べて地域手当の異動保障を受給する者の割合が高かったことから、給与水準が国と比べて高くなった（ラスパイレズ指数100.1）ところであるが、人件費抑制に向けた人員削減を行っていきに当たり、組織の見直しの際に併せて管理職数も合理化していくことで、今後解消を図る見通しである。

また、国家公務員の給与構造改革に併せ、人事院勧告及び「経済財政運営と構造改革に関する基本方針2006」を踏まえ、平成18年度において見直した俸給表を引き続き職員給与規程において適用するとともに、地域手当の支給割合の改定等を行い、人件費改革を進めた。

	<p>ある。</p> <p>平成22年度の人件費見込み 4,641百万円 期末の常勤職員数 680人</p> <p>ただし、上記の額は、役員報酬並びに職員基本給、職員諸手当、超過勤務手当、休職者給与及び国際機関等派遣職員給与に相当する範囲の費用であり、今後の人事院勧告を踏まえた給与改定分は含んでいない。</p>		
	<p>(3) 人材の確保についての計画 農林水産行政と連携した業務運営を推進するため、業務上密接な関連を有する消費・安全局を中心とした行政部局との円滑な人事交流を行う。 また、職員の採用に当たっては、業務を遂行する上で必要とされる分析の基礎的能力、農林水産物や食品及び生産資材に関する専門的知識等を有する農学、化学等及び行政の試験区分の国家公務員試験合格者を中心として採用する。</p>	<p>(3) 人材の確保・育成 農林水産行政との連携を図り、センターの業務に必要な人材を確保するため、次に掲げる措置を講ずる。 ○ 人事交流については、農林水産省の行政部局等と計画的に実施することとし、一方に偏らないよう諸事情に即し、双方が出し合うことを基本とする。 ○ 職員の採用に当たっては、業務の円滑な推進を図るため、分析の基礎的能力、農林水産物や食品、生産資材の専門的知識等を有する農学、化学等及び行政の試験区分の国家公務員試験合格者等から採用する。 ○ 採用情報については、インターネット等を活用した広報活動により、優秀な人材の確保に努める。</p>	<p>(3) 人材の確保・育成 次に掲げる措置を講ずることにより、農林水産行政との連携を図り、センターの業務に必要な人材を確保した。 ○ 農林水産省消費・安全局等と人事交流（転出42名、転入54名）を実施した。 ○ 農学、水産等の試験区分の国家公務員試験等の合格者の中から5名を採用し、必要な人材を確保した。 ○ 採用情報については、インターネット等を活用した広報活動を行い、優秀な人材の確保に努めた。</p>
<p>3 積立金の処分に関する事項 前期中期目標期間繰越積立金は、前期中期目標期間中に自己収入財源で取得し、当期中期目標期間へ繰り越した有形固定資産の減価償却等に要する費用に充当する。</p>	<p>3 積立金の処分に関する事項 前期中期目標期間中の繰越積立金は、前期中期目標期間中に自己収入財源で取得し、当期中期目標期間へ繰り越した有形固定資産の減価償却等に要する費用に充当する。</p>		<p>3 積立金の処分に関する事項 前期中期目標期間中の繰越積立金は、計画に基づき前期中期目標期間中に支払っている前払費用等の平成19年度相当額（18,299,747円）を取り崩した。</p>